

けものんクエスト 孤  
峰（こほう）の騎士

今日坂

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「…私は、フレンズを食べちゃったのかもしれないんだ。」

ダイの大冒険のパロディ小説です。

とはいえキュルルがカバンストラッシュでバッタバタとセルリアンを蹴散らしてゆく話ではなく、数々の名場面をなぞりながらもフレ2をアレンジした物語です。p  
ixivとカクヨムにも載せています。

また、ピーストの黒い輝きや内なる声などの一部設定について、こちらに掲載されて

いる『けものフレンズR あるトラのものがたり』（作：ナガミヒナゲシ）という作品を参考にさせて頂きました。

※ この小説の内容に合わせて、フレンズの性格や言葉遣いなどは変えています。難しい言葉でも問題なく使います。

※序盤はパロディ少ないです。中盤の研究所編以降増えてゆきます。

## く 物語 く

ある日、突然フレンズから野生解放が失われ、セルリアンが多数現れるようになった。それと同時に、ビーストという乱暴者のフレンズが現れたという噂が広まり始めた。

### ●登場人物紹介

#### ○ビースト

強大な力を持つフレンズ。戦いが始まると、頭に一部の欠けたトラ縞模様の紋章が現れる。その存在はパーク中で噂になっていて、どんなセルリアンでも一撃で倒すほどの力を持つとされる一方で、フレンズにも見境なく襲いかかる乱暴者だとも言われている。

戦いを続けていると体が黒い輝きで覆われ、正気が保てなくなること恐怖を抱いている。

○キュルル

森の中をフラフラとさまよっていた時、カラカルとサーバルに出会った男の子。自分の事はほとんど覚えていないが、おうちに帰りたいという思いは残っていた。ビーストの噂を聞いてからは、彼女に強い憧れを持つようになる。

そしてカラカル、サーバルと一緒に危険なサバンナを離れ、旅に出る。おうち、ビースト、自分の事…、それらを見つけた時、彼に訪れる運命とは？

○カラカル

気が強いが面倒見の良いフレنز。

キュルルの事が好きになり、いろいろとアプローチもしているが、なかなか自分だけを見てくれない事にもどかしい思いをしている。恋のライバルという事もあり、ビーストには良い印象を持っていない。

○サーバル

いつでも元氣。持ち前の明るさでどんな子ともお友達になれる。親友のカラカルと一緒にサバンナで暮らしていたが、キュルルと一緒に旅に出る。

過去のぼんやりした記憶を持っているが、いくら考えてもそれ以上思い出せないため、あまり気にしていない。胸に刺した赤い羽はなんなのだろう？

# 目次

## サバンナ編

● セルリアンだらけ | 1

● 探偵コンビ | 25

## ビースト編

● ここはどこ？ 私は誰なんだ？ | 40

40

## ジャングル編

● でかい口（ビッグマウス） | 53

## 研究所編

● 研究所 | 75

● 焼け焦げた大きな背中 | 93

● それぞれの夜 | 106

## かけっこ編

● 衝突！ | 116

● 位置について！ | 132

## イエイヌ編

● おかえりなさい！ | 148

## ホテル編

● やつと会えた！ | 171

● 異変 | 186

## 女王編

● 明かされた真実・女王VSキュルル | 196

## 海底火山編

● サーバルの過去 | 214

◎ タイムアップ | 228

真・女王編

◎ 荒れ狂う闇！ 女王 vs ビースト

236

◎ ビーストレポート 《アムールトラ》

253

ビヤツコ編

◎ いつかまた会えるよね | 263

おかえりなさい編

◎ それから、これから | 283

## サバンナ編

### ◎セルリアンだらけ

サンドスターという謎の物質の力によってヒトのような姿となった動物達…通称フレレンズは、ジャパリパークという巨大な島のあちこちで楽しく暮らしていた。

そんなある日、突然フレレンズから野生解放が失われた。そしてその日を境に、各地で大型セルリアンがよく目撃されるようになった。

ここはそんなパークのエリアのひとつサバンナ。

短い草に覆われたオレンジ色の広大な大地には、所々に大きな木が生えている。一見乾燥した過酷な土地にも見えるが、少し離れた所を見ると、点在する泉の周辺には草木が青々と生い茂っていて、その向こうには森が広がっている。

このように場所によって多様な環境を見せるサバンナでは、沢山のフレレンズ達が暮らしていたのだが、最近はめつきり少なくなっていた。

ここでは特にセルリアンの問題が深刻化していて、フレレンズ達の生きる場所は日に日に脅かされていた。

かつてはフレレンズ達で賑わっていた広場も、今聞こえるのは風の音と草木のざわめき

だけだった。しかしそんな中、突然大きな悲鳴が響き渡った。

？「うわぁー！！！！」

そちらを見ると、青色の子が見上げるほどの大きさのセルリアンに追いかけてい  
る。そいつはデジカメラに球形の関節が連なった三脚をくつつけたような姿をしていて、  
レンズの部分には巨大な一つ目がついている。

その子は必死に走っていたが、セルリアンの足の方が速い。徐々にその差は縮まって  
いった。

するとその子の前に細長い溝が現れた。その子はそれを飛び越えると、今度はジグザ  
グに逃げ始めた。そしてセルリアンが溝を乗り越えて一步踏み出した瞬間、ズズンツと  
いう音と共にその足が地面に埋まった。

するとその子は振り向き、声を上げた。

キュルル「よし、うまくいったよ！」

この子の名はキュルル。

青い羽のついた水色の帽子を被り、黒いインナーの上に青いベストジャケットを羽織  
り、下は裾を捲った淡いグレーの長ズボンに水色の靴を履いていて、水色のシヨルダー  
バッグを肩に下げている。

この子はただ闇雲に逃げていたのではなかった。事前に溝の向こうに用意してあつ



た落とし穴に、うまくセルリアンを誘導したのだ。

そしてキュルルの声を合図に、セルリアンの背後から、朱色と金色の2人のフレンズが同時に飛びかかった。

2人は手に力を込め、けものプラズムを集中させた。するとその手が輝きに包まれた。

朱色の子「エリアルループロロー！」

金色の子「烈風のサバンナクロー！」

そして2人は、セルリアンの石めがけて全く同じタイミングで爪を閃かせた。

2人「サバンナX（クロス）ツ!!？」

2人の輝きが交差し、X字の巨大な斬撃が石に叩き込まれた。その強烈な一撃により、石は粉々に砕け散った。

セルリアン「グアオオオオオッ!!？」

そして大きな叫び声と共にセルリアンの体が弾け飛び、キラキラしたかけらがあたりに散らばった。

そしてキュルルが2人に駆け寄ってきた。

キュルル「やったあ！ありがとうカラカル、サーバル！」

しかし朱色の子：カラカルは、唇を震わせながら黙っていた。その子はつり目で外ハネのロングヘア、前髪には2つの黒い模様があって、大きな耳の先にはふさふさとした毛が生えている。

服装は袖のない白いシャツと長い手袋、首には蝶ネクタイのついた襟巻き、下はスカートとニーソックス、そしてお尻からひよろんと長い尻尾が生えている。

それに気付いたキュルルは、不安そうにカラカルを見つめた。

キュルル「大丈夫？どこか怪我しちゃったの？？」

するとカラカルは、泣きそうな顔をしながらキュルルに抱きついた。

カラカル「心配したんだから！セルリアン相手に無茶しないで！」

そして金色の子、サーバルもこう言った。

サーバル「びつくりしたよ！まさか急に1人で飛び出すなんて！」

この子は丸っこい目とボブカット、前髪にはMのような模様があり、これまた大きな耳をしている。服装はカラカルと同じようなものだが、白いシャツのほかはどれも金色地に斑点模様が付いていて、縞模様のあるふつくらした尻尾をしている。そして胸には、一枚の赤い羽が揺れていた。

キュルルはカラカルに抱きしめられながら、申し訳なさそうな顔をした。

キュルル「ごめんね、僕のせいで2人が危ない目にあって欲しくなかったんだ。」  
何があつたのかというと…。

先程3人が森を歩いていると、カラカルとサーバルの耳に、大きなセルリアンの足音が聞こえた。慌てて近くの茂みに身を隠すと、はたしてデジカメ型の大型セルリアンがやってきた。

3人が息を潜めていると、きゆるるるるつ、と小さな音がした。

キュルルの名前の由来となった腹の音だ。それを聞いてデジカメ型がピタリと動きを止めた瞬間、キュルルは茂みを飛び出して、溝へ向かつて一直線に走り出したのだ。

どうにか気持ち落ち着いたところで、カラカルはキュルルを離れた。

カラカル「アンタは爪も牙もないんだから、戦いはあたし達に任せなさい。あーあ、野生解放が使えたら、あれくらいセルリアン、1人で倒せるのになー。」

瞬間的にフレレンズの力を上昇させる野生解放は、対セルリアンの切り札として、かつては多くのフレレンズが使うことができた。しかしある日を境に、突然使うことができなくなってしまったn。

それを補うため、一部のフレレンズは複数でセルリアンに立ち向かうようになった。しかし本当に息の合った攻撃というのはなかなか難しく、今サバンナで大型セルリアンと戦えるのは、この2人だけだった。

サーバル「野生解放ってどんな気持ちなんだろう、やってみたかったなー！」

カラカル「そういえば、アンタがフレンズになったのは、みんなが野生解放できなくなつてからだつたわね。」

サーバル「うん！でもいいの、こうして大親友のカラカルと一緒に、誰かを守る事ができるんだもん！どんなセルリアンだつて、2人で戦えばやつつけちやうよ！」

それを聞いて、カラカルは顔を赤らめながらうつむいた。

カラカル「…まあ、又シには敵わないけどね。」

1週間ほど前に突如現れた、大型セルリアンよりも一回り大きな巨大セルリアン…、通称「又シ」に、2人は歯が立たなかつた。どれだけ爪を叩き込んでも、傷ひとつつけられなかつたのだ。幸いすぐどこかへ消えてしまったが、フレンズ達に恐怖を植え付けるには十分だつた。

それから他のちほーへ引つ越すフレンズが一気に増え、今ここで暮らしている子は、数えるほどしかいなくなつていた。

それを聞いたキュルルがこうつぶやいた。

キュルル「ビーストが来てくれたらなあ…。」

だがその言葉を聞いた途端、カラカルがムツとなつた。

カラカル「またそれ?!? アンタはもう毎日毎日…、あんな乱暴者のどこがいいのよ!!」

？」

キュルル「だって、どんなセルリアンでも一瞬で倒しちゃうとつても強いフレレンズだ、つてパーク中で噂になってるんでしょ？その子が来てくれたら、きつとヌシだつてイチコロだよ！そしたらカラカルもサーバルも、ここで安心して暮らせるじゃない。」

しかしカラカルはかぶりを振った。

カラカル「あたしもはじめは、その子に会つてみたいなあつて思つてた。けど、フレレンズにも見境なく襲いかかるようなやつつて聞いて怖くなったの。安心してキュルル、そいつがいなくても、あたしとサーバルは大丈夫だから。」

そう言つて、カラカルはキュルルの頭をポンポンと叩いた。

サーバルはその様子を黙つて見守つていたが、それはカラカルの強がりである事は分かつていた。すでに2人がどんなに頑張つてもどうしようもないくらい、ここサバンナではセルリアンの脅威が大きくなつていたのだ。

しかしサーバルは、明るい表情をキュルルに向けた。

サーバル「それじゃ、そろそろご飯にしようよ。」

キュルル「そうだね。ここは見晴らしがいいけどセルリアンに見つかりやすくもあるから…、やつぱりいつもの所で食べようよ。」

サーバル「さんせい！あの2人も心配だしねっ！」

そう言うのとサーバルは、先頭に立って歩き始めた。

キュルル「あ！そっちは…。」

キュルルは慌てて止めようとしたが遅かった。

ズボツ！

サーバル「うみゃー…!!？」

叫び声と共に突然サーバルの姿が消えた。そそっかしい彼女は、キュルルの落とし穴にうつかりはまってしまったのだった。

カラカルとキュルルは大急ぎで穴へと駆け寄った。

カラカル「サーバル!!？」

キュルル「しつかり、すぐ引つ張り上げるから！」

● アンタ誰？

3人は森の中に建っている、白い建物に向かって歩いていった。先頭を歩くキュルルの背中を見ながら、カラカルは彼と出会ってからの事を思い返していた。

カラカル『…いつの間にか、ずいぶんたくましくなったわね。この森で初めて会った時は、あんなに震えてたのに…。』

あれはヌシが現れた数日後の事だった。いつものようにサーバルと手分けして見回

りをしていると、見慣れない子が森の中をビクビクしながらさまよっていたのだ。

カラカルは、茂みに隠れながらその様子をうかがった。

カラカル『セルリアン：には見えないわね。新しく生まれたフレンズかしら？』

試しに茂みをガサガサしてみると、その子は驚きのあまり飛び上がった後、恐る恐る振り返った。その隙に、カラカルはその子の前に回り込んで声をかけた。

カラカル「：アンタ、なんのフレンズなの？」

？「うわあああ!!!」

するとその子は驚いて、大きな悲鳴をあげて腰を抜かした。

パツと見その子の頭には、フレンズなら誰しも持つているはずの耳や角がない。一枚だけついている羽では、到底飛べるとは思えない。さらによく見てみると、顔の両脇に、丸い形の耳がちよこんと生えていた。そしてヒヨロヒヨロの小さな体には、爪も牙も尻尾もない。

カラカル「弱そう……。ねえ、なんでこんなトコにいるのか知らないけど、さつさとここから出たほうがいいわ。でないと……」

これ以上怖がらせないようやんわりと話しかけたのだが、その子は全身をガタガタと震わせながら、ポロポロ涙を流している。口をパクパクさせているが、どうやらうまく言葉が出てこないようだ。

カラカル「ちょっと、聞いているの!?!?」

ここでカラカルは、その子が自分の後ろを見ている事に気づいた。そして背後から、ブオンツと風を切る音がした。

カラカル「!!」

カラカルはとっさにその子の手を掴むと、一目散に駆け出した。

ズドオオオン!

するとついさつきまで2人がいた所に、巨大な腕が振り下ろされた。その一撃で地面がえぐれ、周りの木が吹き飛んだ。

カラカルはその子の手を掴んだまま、森の出口へ向かって必死に走り続けた。その子は喘ぎながらも、なんとか声を絞り出した。

? 「何…あれ…?」

カラカル「知らないの?セルリアン!捕まったら食べられちゃうのよ!!?」

? 「食べ…!?」

そしてようやく2人は森を抜けた。すると目の前に、大きな木がズシンツと落ちてきた。

カラカル「くっ…!」

振り返ると、球形の体を3本の太い腕で支えたような形をした大型セルリアンが、体



の真ん中にある巨大な目をギロギロさせながら凄いい勢いで迫ってきていた。

こうなったらもう戦うしかない……！カラカルはその子を庇うように立ちはだかると、キツとセルリアンを睨みつけた。一方怯えきっていたその子は、目を潤ませながら叫んだ。

？「たつ、食べないでーっ！」

すると上空から誰かの声があった。

サーバル「食べさせないよっ！」

キュルルが思わずハツと顔を上げると、金色のフレンズ……、サーバルが爪を構えながら空から急降下してきて、セルリアンの背中の石に強烈な一撃を加えた。

ピシッ！

それにより石にヒビが入ったが、セルリアンはグンッと腕を伸ばして体をのけぞらせ、サーバルを弾き飛ばした。

しかしそれを見たカラカルは、すかさずセルリアンの体の下へ潜り込むと、思い切り地面を蹴って、右の爪で渾身の一撃を叩き込んだ。

伸び上がっていた所を下から強く押し上げられたのだから堪らない。大きくバランスを崩したセルリアンは地面に転がって半回転し、背中の石をさらけ出した。

先程吹き飛ばされたサーバルは、一本の木に叩きつけられそうになっていたが、空中

で何度も回転して体勢を整えると、その木の幹に着地した。そして幹を全力で蹴ると、セルリアンの石目掛けて一直線に向かっていった。

それを見て、カラカルもセルリアンに飛びかかった。

サーバル「いっくよーカラカル！」

カラカル「よーし、せーのっ！」

サーバル「烈風のサバンナクロー！」

カラカル「エリアルループクロー！」

掛け声と共に2人が同時に攻撃を繰り出すと、巨大なX字の斬撃がセルリアンの石を粉々に打ち砕いた。

セルリアン「ギョオオオオオツ！」

そして絶叫と共に、大型セルリアンは弾け飛んだ。

カラカル「ふうっ、手強かったわね。大丈夫、サーバル？」

サーバル「へーきへーき！遅れちゃってごめんね。…ところで、この子は誰？初めて見るよ。」

カラカル「森の中をウロウロしてたんだけど、何のフレンズか聞いても答ええないのよ。」

見ると、その子は震えながらへたり込んでいた。2人はその子のところまでやってく

ると、自己紹介をした。

サーバル「はじめまして！私はサーバルキャットのサーバルだよ！君は何のフレンズなの？」

カラカル「カラカルよ。アンタ、セルリアンはやつつけたんだから、もう怖がらなくてもいいのよ？」

するとその子は立ち上がり、涙目ながらも興奮に身を震わせながら叫んだ。

？「2人とも、すつごくカッコよかったよ!!？」

それから話を聞いてみると、その子は自分が誰なのかも、どこに住んでいたのかも分からないそうだった。

カラカル「動物だった時の記憶がない子は沢山いるけど、何のフレンズなのかも分からないってのは珍しいわね。…にしても変わった格好ね。」

サーバル「頭になんにもないし、フードも被ってない…、もしかして君、ヒトなんじゃないかな。」

？「ヒト？」

カラカル「それって、アンタが昔一緒にいたっていうフレンズの事？」

サーバル「うん。その時の事はあんまり覚えていないんだけど、こんな格好だった気

がするんだ。」

カラカル「ふーん。…この子はこう言ってるけど、どう?」

? 「うん…、分かんないけど、そうかもしれない。」

カラカル「まあ、あんまり気にしなくても大丈夫よ。きつといつか分かるでしょうし。なにせこの子だって、分からない事いっぱいあるのよ。」

サーバルは、過去の曖昧な記憶を持っていた。先程のヒトの事や胸に付けた赤い羽の事など、おぼろげなイメージはあるが、それ以上はどんなに頑張っても思い出せないのだという。

サーバル「そうそう。でも強くて速くて素敵な大親友と一緒にいられて、悩む事なんてないよ!」

カラカル「ちよつ…恥ずかしいからやめて!…けど、名前がないのは不便よね。」

? 「僕、名前は…、」

きゆるるるるっ!

するとその子から変わった音がした。それを聞いたサーバルとカラカルがキョトンとした顔をしていると、その子は恥ずかしそうにお腹を押さえた。

サーバル「変わった鳴き声…、なら、キュルルちゃんかどうか?」

カラカル「え…、ちよつと安直すぎない?」

? 「僕は…、あの…。」

サーバル「よろしくね、キュルルちゃん！」

そう言つて、サーバルはサツと右手を差し出した。

キュルル「よ、よろしくっ！」

そしてその子は戸惑いながらも、その手を両手でギュツと握り返した。

カラカル『受け入れたっ！アンタそれでいいの!?!?』

きゆるるる…。

するとまたキュルルから音がした。

サーバル「あはっ、やつぱりキュルルちゃんだ！」

キュルル「あう…、安心したらお腹が鳴っちゃつて…。」

カラカル「お腹の音だったのね。じゃあご飯にしましよ。あたし達についてきて。」

そう言うのとサーバルとカラカルは、キュルルを連れて歩き出した。

● 噂のあの子は怖くいで!

3人は広々とした原っぱへとやってきた。そこには『パンのロバヤ』と書かれた看板が掲げられた薄暗緑色の移動販売車が止まっていて、周りには木製の椅子とテーブルが並べられている。

カラカル「ここでご飯が食べられるの。」

サーバル「こんにちはー！ロバー、いるー!?？」

すると車の陰から、長い耳をしたフレレンズがひよっこり顔を出した。

ロバ「あ、どうもみなさん、お疲れ様ですー！」

この子はロバ。灰色の髪と女子学生服のような毛皮、頭には長い耳、ふさふさのポニーテールとブーツは黒、白いタイツをはいていて、お尻からは鞭のような尻尾が生えている。

彼女はここで、ジャパリまん、ジャパリコロネ、ジャパリチップス、ジャパリソーダなどさまざまな食料を提供していた。

かつては多くのフレレンズの憩いの場であったのだが、今は閑散としている。

ロバ「どうぞ、いっぱい食べていって下さい。」

サーバル「いつもありがとう、ロバ。」

ロバ「いえいえ。おや、その子は誰ですか？」

カラカル「森の中を一人でウロウロしてたから連れてきたのよ。なんにも覚えていないらしくて、自分が何のフレレンズかも分からないんだって。サーバルはヒトじゃないかって言ってるんだけど。」

ロバ「ふーむ…、私結構記憶力には自信があるのですが、こんな子を見るのは初めて

ですね。ですが、似たような格好をした方が、ジャングルで暮らしているって聞いた事があります。」

キュルル「ホントに!?？」

カラカル「相変わらず凄い情報通よね。」

ロバ「いえそんな。こうして沢山のフレンズさん達と接していると、自然と耳に入ってくるものですから。」

するとサーバルが、両手いっぱい食べ物を抱えながらやってきた。

サーバル「難しい事は後にして、食べながら話そうよ！」

そして3人は席に着きご飯を食べた。キュルルはそれらを美味しそうに頬張っている。どうやら好き嫌いはないらしい。

その様子をロバは嬉しそうに眺めていたが、しだいに表情が曇っていった。

ロバ「あの…、私これから引越そうと思うんです。いつまたヌシが現れるかと思うと、怖くて眠れなくて…。」

サーバル「そっか…、今までありがとう、元気でね。」

ロバ「はい…。ああ、ビーストだけじゃなくセルリアンまで…、パークはどうなっちゃうんでしょう…。」

キュルル「ビースト？」

ロバ「あ、やはりご存知ないのですね。ちょうどみんなが野生解放できなくなつて、セルリアンが多くなつてきた頃に噂になり始めたフレレンズです。フラツと現れて、どんなセルリアンでも一瞬で倒してしまふ、ものすごく強い子らしいんです。」

それを聞いたキュルルは目を輝かせた。

キュルル「そうなの？ 凄い!!？ 会つてみたいなあ…、どんな子なの!!？」

ロバ「それが…、事が済んだらすぐ立ち去つてしまふし、お話しした子もいないので、よく分からないんです。どうやらオレンジ色で、大きな体をしているらしいのですが。」

キュルル「大きい体…、どれくらいだろう、おつきなセルリアンくらいかな？」

サーバル「あはつ、それならどんなセルリアンも怖くないね！」

カラカル「アンタ達ねえ…、そんな目立つ子なら、見た目がよく分からないなんてありえないでしょ!…！ それにある意味、セルリアンより危ないかもね。」

キュルル「え、どういう事？」

ロバ「ビーストはフレレンズにも見境なく襲いかかる乱暴者だつて噂もあるんです。もちろん噂ですから、いろいろと話が大きくなっている可能性もありますし、そもそも誰かの作り話で、本当はビーストなんていないのかもしれないかも。」

カラカル「これだけ長い間噂になつてゐるんだから、いないつて事はないでしょ。どれだけ強いかは分からないけど、もしかしたら野生解放が使える特別な子なのかもしれない」



いわ。」

キュルル「野生解放？特別？」

カラカル「野生解放つてのは、一時的にフレنزの力を引き上げる能力の事。前はたくさんのフレنزが使えたんだけど、ある日急に使えなくなつたの。」

サーバル「特別つていうのは、その子にしかない力を持つてゐるつて事だよ。キュルルちゃんにも、きつとすぐ見つかるよ！」

キュルル「僕だけの、力……」

そう言われても、キュルルは半信半疑だつた。自分は戦う事も跳ぶ事もできないし、ロバの様に記憶力が良いわけでもない。

するとカラカルが、片目をつむりながらこう言つた。

カラカル「ビーストつて聞いて、あんなに嬉しそうな顔したのはアンタが初めてよ。」

ロバ「ですね。この話を聞いた子は、大抵怖がるのですが。」

サーバル「きつとキュルルちゃんにとつてビーストは、特別な子なんだね！」

そう言つて3人が笑つているのを、キュルルはキョトンとしながら眺めていた。

食事が終わると、3人は旅立つロバを見送つた。

ロバ「それではこれで。食料はこのまま置いてゆきますので、ご自由に食べて下さ

い。」

カラカル「悪いわね、ありがとう。じゃあ、気をつけてね。」  
そしてみんなでさよならを言ってお別れをした。

ロバの姿が見えなくなった後、2人はキュルルにどこから来たのか聞いてみた。すると彼は、森の向こうの建物を指差しながら、「あそこ……。」と言った。

何かキュルルの手がかかりが見つかるかもしれない。3人は森の奥にある、白くて大きな四角い建物へとやってきた。それは長い年月の間に外壁は煤けていて、窓もあちこちヒビが入ったり割れたりしている。また分厚い壁のいたるところに穴が空いていて、中の鉄筋がむき出しになっていた。

ギイイイツツ……

キュルルが大きな扉の細いドアノブを捻ると、軋んだ音と共に重たい扉が開いた。薄暗い部屋の中でまず目につくのは、頑丈そうな檻だった。掛けられたプレートには何か文字のような痕跡があるが、読み取ることとはできない。その鉄格子の一部は、まるで内側からこじ開けられたかのようにグニヤリと曲がっている。隣にはモニターや計器などが置かれているが、表示やランプなどは消えていて、何をやるものだったのかは分からない。

もう一つは、ヒト一人が入れるくらいの大黒色の丸いものだった。とても硬い

ものだが、何でできているのかは分からない。表面に大きな丸い穴が空いていて、破片が周りに散らばっている。中には四角いキラキラしたものがたくさん敷き詰められている。

なんでも、キュルルはこの中でずっと眠っていたらしい。そして怯えながら外に出て、カラカル達と出会ったのだという。

改めて声に出した事で心細くなったのだろう、しだいにキュルルの目から涙が溢れ始めた。

キュルル「…おうちに帰りたい。」

カラカル「おうち？そこから来たの？巣みたいなものかしら？」

サーバルがあたりを見回しながらこう言った。

サーバル「え？ここがキュルルちゃんのおうちじゃないの？」

キュルル「ううん…。僕のおうちは、もっと明るくて…、優しくて…、あつたかかった…。」

それを聞いたサーバルとカラカルは、キュルルと一緒におうちを探してあげる事にした。しかし手がかりが何も無い。

そこで球体の中をよく調べて見ると、キュルルの匂いのするものが見つかった。

それは水色のシヨルダーバッグだった。その中には水筒と沢山のペン、そしてスケツ

チブックが入っていた。キュルルによると、これは絵を描くもののだそうだ。キュルルがページを一枚めくってみると、そこにはサーバル達が知っている場所の絵が描かれていた。

サーバル「それじゃあ、さっそくここにいつてみよう！しゅっぱー…。」

カラカル「待ちなさいサーバル！」

サーバル「つつ?!？」

すぐさま駆け出そうとしたサーバルを、カラカルが引き止めた。

その視線の先には、サーバルの腰くらいの大きさの、羽のついたキノコのような形をしたセルリアンがいた。そいつは崩れた壁の隙間から、じつとこちらを見ている。

3人は身構えたが、なぜかセルリアンは建物の中に入ってこようとしない。そしてしばらくすると立ち去っていった。

キュルル「びっくりしたあ…。」

サーバル「なんで入ってこなかったんだらう？私達に気づかなかったのかな？」

カラカル「あんだけじつと見ててそれはないわ。入りたくても入れないって感じだった。キュルルはここでずっと寝てたのに、よく襲われなかったわね。」

サーバル「もしかしてここ、セルリアンが入ってこれないんじゃないかな？」

カラカル「そんな夢みたいいな事…、でも、ありうるかも…。」

そして3人は、用心しながら外へ出て歩き出した。しばらくして、変わった形をした石のある泉にたどり着いた。そこは確かに絵とそっくりな場所だったが、どうやらキユルルのおうちではないらしい。

それから一通りスケッチブックに描かれた絵を見てみたが、サーバル達が思い当たる場所はなかった。

サーバル「サバンナはとつても広くて私達が知らない場所もたくさんあるから、明日また別の所に行ってみようよ。」

カラカル「そうね、一旦引き返しましょう。」

そしてあの建物の近くに差し掛かった時、一体の小さなセルリアンを見つけた。

カラカル「もう一度、あの建物で試してみましょ。うまくいなくても、あれならすぐ倒せるわ。」

そしてそのセルリアンを建物まで誘導してみると、やはり入ってこなかった。どういう仕組みなのかは分からないが、どうやらここは安全な場所らしい。そこで3人はここを寝床とし、毎日少しずつサバンナ各地を回る事にした。

しかし絵に描かれた場所らしき所は見つからず、キユルルが何かを思い出すこともなかった。その間もセルリアンと戦ったりやり過ぎたりしたが、他のフレンズと出会う事はなかった。

こうして何日も一緒に過ごしているうちに、3人の意識は変わっていった。キュルルにとつて、2人はとても頼りになるお友達（フレンズ）だった。特に何かと気にかけてくれるカラカルは、キュルルの中でとても大きな存在となっていた。

おうちが見つかったら、そこで3人仲良く平和に暮らしていけたらいいな、そんなふうに考えたりする事もあった。

そしてカラカルのキュルルに対する思いも変わっていった。キュルルは戦う事はできないが、2人が気が付かないような事を思いついたり見つけたりする。また思いやりがあつて、いつも2人の助けになろうと努力していた。少々危なっかしいところもあるが、日に日にたくましくなつてゆく彼に、いつしかカラカルは恋心を抱くようになった。

しかしそれとなくアプローチしてみても、キュルルの反応は今ひとつだった。おまけにしぼしぼビーストの事を口にする。

ヒトなら『他人の好意に鈍感なものに憧れるのも、子供だから仕方ない。』で片付ける所だが、成長の概念のないフレンズであるカラカルはヤキモキしていた。

一方サーバルは、そんな2人の様子をニコニコしながら見守っていた。

## ◎ 探偵コンビ

カラカル『サバンナX（クロス）って名前も、この子が考えてくれたのよね。あたし達の事を大切に思ってくれるのは嬉しいし、ビーストに夢中になるのも仕方ないけど、もうちょっとあたしを見てくんないかな、はあ……。』

そんな事を考えているうちに、建物に到着した。

その中には、オレンジ色の帽子を被り、硬い毛皮に覆われた2人のフレンズ…、オオセンザンコウとオオアルマジロがいた。アルマジロは横になっていて、その隣でセンザンコウが心配そうに見守っていた。

昨日サバンナを歩いていたら、たまたまこの2人に会ったのだ。声をかけてみると、2人は探偵なのだという。しかし1週間ほど前からアルマジロの元気がなくなつて困っているというので、ここで休んでもらったのだ。

3人が帰ってきた事に気づいて、センザンコウは顔を上げた。

センザンコウ「おかえりなさい！」

サーバル「たっだいまー！2人とも、ご飯持ってきたから一緒に食べよっ！」

そう言うサーバルは、センザンコウにジャパリまんを2つ手渡した。

センザンコウ「すみません…。ほらアルマーさん、ご飯ですよ。」  
するとアルマジロが目を覚ました。

アルマジロ「うくん…。ありがとうセンちゃん。…ん？あ、みんな帰ってきてたんだ、おかえりなさい。」

そしてみんなで床に座ってジャパリまんを食べながら話をした。

センザンコウ「そんな形の大きなセルリアンが…？」

サーバル「うん！でも3人で力を合わせてやっつけたよ！」

カラカル「体調は昨日と比べてどうなの？」

アルマジロ「うくん、体の重さはあんまり変わらないな。」

キュルル「風邪でもなさそうだし、なんなんだろう？」

ご飯を食べ終えると、センザンコウとアルマジロが改まった態度で話しました。

センザンコウ「みなさんのいない間に2人で話し合ったのですが…、やはり別のちほーに行こうと思います、私達。」

サーバル「でも…、せめて元気になるまでこうしてたら？」

アルマジロ「こんな危ない所で、いつまでもみんなに迷惑をかけるわけにはいかないよ。それにもともと引越すつもりだったんだ。大丈夫、普通に歩いたり是可以るか。」



カラカル「どこかあてはあるの？」

センザンコウ「探偵としてパーク中を回ってましたから、過ごしやすい場所はいくつか知っています。今どうなっているかは分かりませんが、ここでじつとしているよりは安全なのではないかと。」

キュルル「そっか、じゃあ…。」

そう言うと、キュルルはシヨルダーバッグからスケッチブックとペンを取り出すと、サラサラと絵を描き始めた。

これは誰に教わったものでもない、キュルルだけの特別な力だった。頭の中のイメージを、いろんなペンを使って紙に描いてゆく。そしてセンザンコウ達とキュルル達が、サバンナで楽しそうに遊んでいる絵が出来上がった。

キュルル「これ、あげるね！」

アルマジロ「きれーい！」

センザンコウ「いいんですか？ありがとうございます！」

キュルル「うん、記念に。それと…、ね、2人とも？」

キュルルに促され、カラカルとサーバルが頷いた。

カラカル「あたし達も一緒に行くわ。」

センザンコウ「そんな…、気を使わなくても。」

サーバル「私たちもそのうち旅に出ようって話してたんだ。ここは危ないし、なんかキュルルちゃんのおうちも無いみたいだしね。それにみんなで行けば、なにがあっても大丈夫だよ！」

こうしてみんな一緒に旅立つ事となった。

さらにキュルルにはもう一つ、ビーストに会いたい！という理由があった。その子がヌシを倒してくれるという思いと憧れの他に、これだけ噂になっているのに正体の分からないフレンズをスケッチしてみたい、と考えていた。

そして一休みした後、みんな建物を出た。しかしキュルルは重い扉に手をかけたまま、しばらくじっと建物を見ていた。

カラカル「キュルル、何してんのよ。」

サーバル「早く行こーよー！」

キュルル「わわっ、今行くよっ！」

そして心の中で『行つてきます！』を言うと、扉をしっかりと閉めた。

### ● 邂逅

キュルル一行は別のちほー目指して歩き始めた。

センザンコウ「ジャングルにいるヒト…、そういえば聞いた事があります。なんでも

森の奥で暮らしているとか。キュルルさんはおうちも探しているんでしたよね。何か手がかりはあるんですか？」

キュルル「これに描かれた場所を探してるんだ。」

そう言つてキュルルがスケッチブックを手渡すと、センザンコウはパラパラと紙をめくり始めた。するとその手が、風車が描かれている絵のページで止まった。

センザンコウ「これに似た場所に心当たりがあります。そこへ行きましょう！」

それを聞いたキュルル達は、ひとまずセンザンコウについて行く事にした。その道すがら、キュルルは2人にビーストについて尋ねてみた。

キュルル「2人はビーストがどんな子（フレンズ）か知ってるの？」

センザンコウ「私達も直接会つた事はないので、噂以上の事は分かりません。ですが、ビーストが壊したという現場を見た事があります。」

アルマジロ「大きな木が真つ二つになつてたり地面が割れてたりで、もうむちやくちやだつたよ。並のパワーじゃないよね！」

キュルル「わあ、やっぱり凄いんだなあ！」

そんなキラキラと目を輝かせているキュルルを見て、思わずカラカルは口を挟んだ。

カラカル「ねえキュルル、そんなにビーストの事が気になるの？」

するとキュルルは、ニコニコしながら元氣よく答えた。

キュルル「うん！気になるし、会ってみたい！」

カラカル「……ふくん……」

それを聞いたカラカルは、なんでもない風を装いつつも心の中で膨れっ面をしていた。

カラカル『ああもう！どーしてアンタは、そんな危ないやつばかり気にかけるのよっ!??』

やがて、大きな四角い建物が見えてきた。2階建てで全体にトラの模様があしらわれていて、上の階には目のような2つの丸い窓があり、口に当たる所から細長い道がどこまでも伸びている。

サーバル「こんな所があったんだ……」

キュルル「これもヒトが作ったのかな……、でも絵の場所とは違うよ？」

センザンコウ「ご安心を。向こうを見てください。」

その隣には丘があり、そこには沢山の石でできた建物が並んでいる廃墟があった。スケッチブックの絵と見比べてみると、屋根から風車がなくなっていたり階段が草地になつていたりしているが、どうやらこの場所で間違いないようだ。

キュルル「だいぶ変わってるけど、たぶんここみたい。」

サーバル「やったね！それでどう、何か思い出せた？」

キュルル「うーん…、おうちじやないみたい。でも…。」  
そう言つて、キュルルは四角い建物の方を見た。その口のような所に、何か止まつて見えるのが見える。

それはモノレールだった。全体が黄色く塗られていて、まだら模様がついており、先頭の運転席は猫の顔のペイントが施されていて、屋根には大きな耳をあしらつた飾りが付いている。

キュルル「…あれに乗つてここまで来た気がする。」

カラカル「そうなの?!?それじゃあ行つてみましょうよ。」

一行は建物の中へと入つていった。そこには切符売り場と自動改札口が並んでいて、その奥に上の階へと続く階段があつた。

サーバル「なんなんだろうね、これ。」

みんなでそれらを物珍しげに眺めていると、サーバルとカラカルの耳がピクンと動いた。

サーバル「何か来る…!」

カラカル「あの丘の上!」

そちらを見ると、廃墟の陰から巨大なセルリアンが現れ、こちらに迫つてきた。今度のをやつはデジカメ型よりも一回り大きく、テレビカメラの形をした頭に4本のドリル状

の足がついている。

キュルル「セルリアン!?!」

サーバル「大変、ヌシだよ!」

カラカル「あれと戦うのはムリ…、逃げるわよ!」

すると、センザンコウとアルマジロが出入り口に立ち塞がった。

センザンコウ「私達があいつをひきつけます。その間に皆さんは逃げてください!」

キュルル「そんな…、一緒に行こうよ!」

アルマジロ「助けてくれたお礼だよ! 私達なら大丈夫、どんな攻撃でも跳ね返しちゃうから!」

ズズンツ!

セルリアンが体当たりしてきて、建物が大きく揺れた。壁が崩れ、天井から瓦礫が降ってきた。それから狭い出入り口に無理矢理足を突っ込むと、力任せにこじ開けようとした。

すると2人はセルリアンの注意を引くために、その足にしがみついた。

センザンコウ「早く!」

アルマジロ「潰されちゃうよ!」

サーバル「ごめん…、ありがとう!」

カラカル「すまないわね……。キュルル、急いで！」

3人は後ろ髪を引かれる思いで階段を駆け上がった。

キュルル『：オオセンザンコウさん、オオアルマジロさん、ありがとう！もしまた会えたら僕……。お礼になんでもするよっ！だから……。だから無事でいて!!?』

2階に上がると、目の前にモノレールが止まっていた。運転席には、海賊の格好をしたラツキービーストが乗っている。

サーバルがドアに駆け寄ったが、閉まっただけで入れない。

サーバル「入れないよ、どうしよう!!?」

カラカル「なら力づくでっ！」

カラカルが爪を構えたが、キュルルが止めた。

キュルル「待つて！もしかして……。」

キュルルがドアに書かれた手ひらマークに手を当ててみると、シャツと勢いよく扉が開いた。そして運転席から声がした。

ラツキービースト「アツアエン行きものれーるハ、マモナク発車シマス。オ乗りノ方ハゴ注意クダサイ。」

サーバル「え、ラツキーさん？」

カラカル「しやべれたの!!?」

キユルル「とにかく乗ろう！」

3人がドタドタと車内に駆け込むと、天井の明かりがついた。

ラッキービースト「扉閉マリマース、ゴ注意クダサイ。：オ待タセシマシタ、発車シマース！」

アナウンスと共に扉が閉まり、モノレールが発車した。みるみるうちに後ろの建物が小さくなってゆく。

サーバル「動いた！」

カラカル「逃げられたの…？」

ドカーン!!?

3人「「わあっ!!?」「」

なんとモノレールのすぐ後ろから、巨大セルリアンがレールを突き破って現れた。そしてレールに着地すると、すごい速さで追いかけてきた。

サーバル「すっごいジャンプだったね！」

カラカル「言ってる場合!!? 追っかけてくるわよ〜！」

キユルル「これ、もつと速く走れないの!!?」

ラッキービースト「ムリダヨ。」

カラカル「頑張りなさいよ〜！」



ラツキービースト「ムリだよ。」

そしてある程度距離が縮まったところで、セルリアンがまるでハエトリグモのように大きくジャンプし、モノレール目掛けて突っ込んできた。

3人「「うわああー!!!」」

とつぎに、キュルルは心の中でこう叫んだ。

キュルル『助けて、ビースト!!!』

? 「グオオオオオオー!」

ズガアアン!!?

突然雄叫びが聞こえたかと思うと、白い光がセルリアン目掛けて飛び込んできた。よく見るとそれは、オレンジ色をしたフレんズだった。両腕に厳つい手枷をはめて、頭にはトラの模様の形をした紋章が輝いている。そしてその子の爪が、手首までセルリアンに深々と突き刺さっている。

セルリアン「ゴアオオオー!!!」

そして大きな叫び声と共にセルリアンは碎け散った。

サーバル「なにあれ…?」

カラカル「わかんない…。」

キュルル「カッコいい…!」

呆気に取られている3人の耳に、どこからともなく声が聞こえてきた。

？「あれはビースト！早く逃げないとお前らも喰われるぞ！」

キュルル「え？」

サーバル「なに、今の声？」

カラカル「え、アンタが言ったんじゃないの？」

あたりを見回しても誰もいない。謎の声に3人が首を傾げていると、サーバルの耳がピクンと動いた。

サーバル「ん？なんだろう、あれ？」

その視線の先には、凄いスピードでモノレールに追いつがる影：四つん這いで走るビーストの姿があった。しかし距離が離れているうえ地面の色と重なって、どんな格好なのかはつきりとは分からない。

カラカル「あいつが…ビースト？」

キュルル達は窓に張り付いてその子を見つめた。

するとビーストは、あれよあれよという間にモノレールを追い越して、そのまま見えなくなってしまうた。

● 憧れと希望を胸に

センザンコウ「アルマーさん、しっかりしてください！」

センザンコウは、瓦礫に足を挟まれて動けなくなつたアルマジロをなんとか引つ張り出そうとしていた。あれからセルリアンは建物を破壊すると、2人に目もくれずどこかへ行ってしまったのだ。

アルマジロ「センちゃん、私の事はいいから早く逃げて…。」

センザンコウ「なに言ってるんです、そんな事できるわけないじゃないですか！」  
すると2人の頭上から、大きな瓦礫が降つてきた。

センザンコウ「あつ、アルマーさんっ…!!？」

センザンコウは、とっさにアルマジロに覆い被さつた。

ズンツ！

瓦礫が2人を押し潰した。が…、

ピシッ！ドガアアン!!？

大きくヒビが入つたかと思うと、勢いよく弾け飛んだ。押し潰されたはずの2人の体は、輝きに包まれていた。

アルマジロ「センちゃん、センちゃん！」

アルマジロの声がして、センザンコウは顔を上げた。

センザンコウ「アルマーさん…、ここは天国ですか…？」

アルマジロ「違うよ、しっかりして！助かったんだよ、私達！」

センザンコウはその言葉を嘔みしめた。

センザンコウ「生きてる…、はっ！アルマーさん、体は大丈夫なんですか！！？」

アルマジロ「うん！なんだか急に元気が出てきたんだ！私達2人にかかれば、あんな瓦礫なんてなんでもないよ！」

センザンコウ「よかったあ、アルマーさん！」

アルマジロ「センちゃん、ありがとう！」

そうして2人は、瓦礫の中で泣きながら抱き合った。

モノレールはレールの上を滑るように進んでゆく。キュルル達は座席に腰掛け、一息ついた。すると車内にアナウンスが響き渡った。

ラッキービースト「次ハ、アツアエンマエ、アツアエンマエ。」

キュルル「あの運転席にいる、水色の小さい子は誰なの？」

サーバル「ラッキービーストだよ。私はラッキーさんって呼んでるんだ。」

カラカル「中にはボスって呼ぶ子もいるわ。それにしても喋れたのね、声を聞いたの初めて。」

キュルル「カラカル達が知らない事も、すぐそばにたくさんあるんだね。そういえば

あの2人、大丈夫かな。」

カラカル「ヌシはいなくなつたし、取り込まれたようにも見えなかつたから、きつと大丈夫よ。」

サーバル「それにしてもあの子…、ビースト、見ず知らずの私達を助けてくれたんだよね、今度会つたらちゃんとお礼を言いたいな。」

カラカル「でもよく見えなかつたから、どんな姿か分からないのよね。」

キュルル「それなら、きつと…。」

そう言つてキュルルは興奮気味にスケッチブックをめくると、目をキラキラさせながら最後のページの絵を2人に見せた。そこにはオレンジ色のトラのフレンズが描かれていた。

キュルル「この子だよ！」

こうしてキュルルはサバンナを出た。

おうち探し、自分は何者で何ができるのか、ジャングルにいるというヒト…、旅に出なければ決して答えにたどり着けないものばかりだ。この先どうなるかを考えると正直不安もあつたが、隣にはカラカルとサーバルというかけがえのないお友達がいて、これから向かう先のどこかには、憧れのビーストがいる。そんな大きな希望を胸に、キュルルは次のちほーへと向かうのだった。

## ピースト編

◎ここはどこ?私は誰なんだ?

私は狭くてうす暗い箱の中で目を覚ました。箱には太くて丈夫そうな鉄の棒が何本もはまつていて、隙間からは壁と窓が見える。そこから差し込む明かりが、周りをぼんやりと照らしている。どうやらここは建物の中らしい。そして右の方を見ると、ヒト一人が入れるくらいの黒い球が置かれていた。

私は自分が何者なのか、ここがどこなのか全く分からなかった。ジャラジャラと音がしたので腕を見てみると、両手首に真っ黒で厳つい輪がはめられていた。

しばらくぼんやりしていると、突然頭の中で声がした。

【戦え…、戦え…!】

途端に体中の毛が逆立った。私はその声に追われるように立ち上がると、目の前の太い鉄の棒に手を掛けた。

グワツシャアアン!

それは私が力を込めるとあっけなくひん曲がった。その隙間をくぐって箱の外へ出ると、思い切り床を蹴って跳躍し、建物の天井をぶち抜いて外へ出た。その途端、強い

光が目飛び込んできて、私は思わず目を閉じた。

しばらくして目を開けると、雲ひとつない青空の下に、広大な世界が広がっていた。あちらにはオレンジ色の広い大地、こちらには豊かな森が広がっていて、耳をすますと木々の葉の擦れる音や風のそよぎ、そこで暮らす生き物達の声が聞こえる。

『わあ…、なんて綺麗なんだろう…。』

私はそれらをうつとりしながら眺めていた。すると、また頭の中で声がした。

【戦えーお前はセルリアンを倒す騎士だー！】

それを聞いて、私は反射的に飛び出した。

走りながら、私は考えた。

『セルリアン？騎士？なんだそれ！！？私は何をすればいいんだ！！？』

その建物のそばの森の中で、白い毛皮で覆われた小さなフレンズが、太い木の陰から顔をのぞかせている。

コアリクイ「…よし、誰もいない！」

ミナミコアリクイはそこから飛び出すと、警戒しながら森の中を歩きだした。もともと用心深く臆病な性格だが、数日前からフレンズが野生解放できなくなり、セルリアンが多くなったため、一層注意深く歩くことにしたのだ。

すると背後からガサツと音がした。

コアリクイ「ひっ!」

思わずバツと振り返り、両手を上げて威嚇のポーズをとった。けれどもそこには何もおらず、気配もない。

コアリクイ「なんだあ、風の音かあ。」

彼女はほつとして、再び歩き始めた。が…、

コアリクイ「ぶっ!!?」

道の真ん中に落ちていた巨大な岩にぶつかった。

コアリクイ「いったあ。こんなところに岩なんてあつたかなあ?」

するとその岩がズズツと動いた。なんとそれは岩などではなく…。

コアリクイ「せつ、セルリアンだーっ!!!」

私は闇雲に森の中を駆け回った。すると前方から嫌な気配がした。そして誰かの悲鳴が聞こえた。

コアリクイ「助けてえー!!!」

何が何だか分からないまま、私は一目散にそこへと向かった。

そして目に飛び込んできたのは、全身が白い毛で覆われた小さな子が、大きな怪物に



追いかけてられている光景だった。そいつは四角い顔の中に筒状の目が2つ並んでいて、2本の細長い触手を蠢かしながらその子を追っていた。

コアリクイ「あっ！」

その子は木の根につまずいて転んでしまった。そして怪物が、その子に向かって触手を勢いよく伸ばした。

【戦え！セルリアンを倒せ！】

頭の中に大きな声が響き渡ると同時に、感情が高ぶり体中が震えた。そして頭が熱くなり、体中が白い光で包まれた。

「グオオオオオーツ！」

私は雄叫びを上げながら思い切り地面を蹴った。そして相手に飛びかかり、右の爪を叩き込んだ。

ズガアアン！

セルリアン「ギョロロローツ！」

大きな叫び声を上げながら、ぱっかーん！という音と共に怪物は弾け飛んだ。

キラキラしたかけらが降り注ぐ中、私は自分の力に驚いて、動くことができなかった。『あんなに大きな相手が一瞬で粉々に……なんなんだこの力は……』

そして自分の両手をまじまじと見つめた。とても大きくて不器用そうな手に、真っ黒

な鋭い10本の爪が生えている。

『そうだ、あの子は大丈夫かな。』

追いかけられていた子の様子になって、私はその子の方を見た。

ミナミコアリクイは、目に涙を浮かべながらガタガタと震えていた。転んでしまい、もうダメだと諦めかけたその時、大きな叫び声とともにぱつかーんと大きな音がした。恐る恐る顔をあげると、双眼鏡の顔をした大型セルリアンのきらめきが降り注ぐ中、頭にトラ模様の紋章のあるフレンズが、鋭い目つきでこちらを睨んでいる。するとどこからか小さな声がした。

？「そいつはビースト、早く逃げないと喰われるぞ！」

ビースト『えっ!??!』

コアリクイ「ふえ!??!」

ミナミコアリクイはパニックになり、大慌てでその子の前から逃げ出した。

● 食べてしまったのか?!?

白い子は逃げてしまった。私はしばし呆然としていたが、さっきの声を思い起こした。

『私、ビーストつていうのか…。それに喰われるって…。そんな事しないぞ!』

私はあの大きな怪物を、頭の中の声に従って破壊した。その途端声が止んだ事から考えて、おそらくあれがセルリアンなのだろう。だが追われていた子を攻撃しようとは微塵も思わなかった。しかし私には、眠る前の記憶が全くない。

『…もしかしたら覚えていないだけで、私はあの子の仲間を食べてしまった事があるのかも知れない。』

そう考えると、自分が恐ろしくなった。

もしそれが本当なら、私はあの箱から出るべきではなかった。とてもじゃないが、そんな危ないやつと一緒に生活する事はできないだろう。知らなかったとはいえ、あれを壊してしまったのはまずかった。

それならばと、私はあの子達と離れて暮らす事にした。

私は感覚が鋭かった。ある程度近づけばあの子達やセルリアンの気配を正確に感じ取る事ができたため、隠れて生活するのは簡単だった。それと話すことはできないが、大体の言葉を理解し、表情や仕草から相手の感情を読み取る事はできた。

そうして物陰からこっそりあの子達の様子をうかがっているうちに、この世界の事がだんだんと分かってきた。

ここはジャパリパークという大きな島の、サバンナという場所らしい。またここ以外

にも、さまざまなエリアが存在するそうだ。

そして私と同じように2本足で歩き、全身が毛皮に覆われたあの子達はフレンズというそうだ。フレンズはパークの各所で、楽しく暮らしているらしい。

そんなフレンズの天敵…、姿形は様々だが、私が敵だと思つたやつらが、やはりセルリアンだった。とても恐ろしい存在で、食べられたフレンズは輝きを奪われ、動物に戻ってしまうらしい。

フレンズ達の行動から考えるに、彼女達は私のような強い力を持つていないようだった。そこで私は毎日サバンナを歩き回り、セルリアンを片っ端から蹴散らしていった。こうしていると、頭におかしな声が響くこともなかった。

戦いが始まると、頭が熱くなって体から白い輝きが噴き上がる。

この熱の原因はしばらくの間謎だったが、ある日泉に映つた自分の姿を見て、トラ縞模様の輝きが浮かび上がっている事を知つた。ほどなくして跡形もなく消えてしまつたが、これは一体なんなのだろう?

ただ私は、自分の力を扱いかねていた。有り余る力を制御しきれず、セルリアンと戦うたびに周りの木々や岩まで吹き飛ばしてしまう。このままではあの素晴らしい景色も台無しになってしまうかもしれない。それにもし、フレンズを巻き込んでしまつたら…、私は自分を許せないだろう。

さらにいくら隠れて暮らしているとはいえ、これだけ派手に暴れているのだ、注目されないわけがない。次第にフレンズ達の間で、私の噂が広まりだした。いくら広いサバナンナでも、これでは見つかってしまうのも時間の問題だった。

そう考えた私は、セルリアンと戦いながらパーク中を回ることにした。一箇所に留まらなければフレンズに見つかる事はないだろうし、もし本当に私がセルリアンと戦う騎士なのだとしたら、これが私の生き方なのだろう。

こうして私はパーク中を駆け回り、戦いに明け暮れる日々を送った。そうしているうちに体の扱いにも慣れ、周りへの被害も減ってゆき、さらなる力を引き出せるようになった。

時折、倒したと同時に喋りだすセルリアンに出くわした。その内容は、多少の違いはあったが概ねこうだった。

「そいつはビースト、早く逃げないと喰われるぞ！」

そういつたセルリアンの姿形はさまじまだったが、決まってフレンズを追いかけ回していた。そしてそれを聞いた子は、あつという間に逃げ出してしまふ。

それはとつても寂しい…、いやいや、相手の方から離れてくれるのだ、私にとっては好都合だった。

しかしなぜセルリアンは、私がフレンズを食べた時の事を知っているのだろうか。もし

かしたら、いつか私が眠る前の事を教えてくれるヤツが現れるかもしれない。

●セルリアン討伐は全てに優先する

それから長い年月が過ぎた。私はパーク中を回りながら、くる日もくる日も戦い続けた。いい加減嫌になる時もあったが、あまり休んでいないと頭の中にあの声が響いてきて、私を追い立てるのだ。

その頃にはビーストの噂はパーク中に広まっていたが、相変わらず私の正体を知るフレンズはいなかった。

すっかり戦いにも慣れ、私はセルリアンを倒す騎士として、立派にパークとフレンズ達を守っている。ならばもつと誇らしい気持ちになっても良さそうなものなのに、なぜか心が満たされなかった。これはおそらく黒い輝きのせいだろう。

いつからなのかは定かではないが、戦い続けていると、私の体から黒い輝きが噴き出すのだ。そうすると、頭の中が破壊衝動という黒い思考で埋め尽くされてゆく。

グツと堪えれば一時的に収まるが、戦闘をきっかけにまた吹き出してくる。そのためどうしても堪えきれない時は、周りにフレンズがいらないか細心の注意を払った上で、周囲の地形ごとセルリアンを吹き飛ばして衝動を発散させた。

しかし気分が落ち着いた後、破壊され尽くした大地を見て、私は自分の力に恐れおの

のき、激しい後悔に襲われるのだ。

フレンズ達を見ていると、運動や創作など、みんなさまざまな方法で楽しい時間を過ごしている。だが私は戦いしか知らず、これがなくなったらどうすれば良いのか分からない。

しかし戦い続けていても心は満たされず、事あるごとに黒い輝きが吹き出してくる。今はなんとか抑えられているが、もし今より衝動が強くなり、私が私を制御できなくなってしまったら…、本当にフレンズに襲いかかり、食べてしまうかもしれない。

そんな事になったら耐えられない。私はどうしたら良いのだろう。

『もういつそセルリアンしかないエリアへ行つて、未来永劫戦い続けていられたらいいの…。』

不安でいっぱいな私は、時折こんな事を考えるまでになっていた。

ある日の事、私は久し振りにサバンナを訪れた。ここには多くのセルリアンが蠢いていて、気配だけではどのくらいの大きさのやつなのかなかなか判別できない。

小さいやつらを蹴散らしながら歩いてゆくと、懐かしい建物が見えてきた。私は思わずそこへ足を運んだ。

隙間から覗くと、相変わらずこの建物の内部は不思議な空気で満たされていた。これ

が私がここで眠っていた所為なのか、建物の材料によるものなのか、あるいはあの黒くて丸い物質によるものなのかは分からないが…。

とここで、私は違和感を感じた。黒い球体の表面が割れ、破片があたりに散らばっている。ふらりと建物の中に入ってみると、何人かのレンズのもの他に、嗅いだことのない匂いがした。それは球体から外へと続いている。

『でもなんだろうこの感じ、なんだかとても懐かしいような、嬉しいような…。』

私は外へと飛び出し、その匂いを追いかけた。するとその向こうから大きなセルリアンの気配がしたので、私は猛然と駆け出した。

そこへたどり着くと、はたして巨大なセルリアンが、走っている箱を追いかけていた。そして一瞬体を縮めると、箱目掛けて飛びかかった。もはや一刻の猶予もない。

「グオオオオオオー!」

私は雄叫びを上げながらセルリアンに飛びかかった。頭にトラ縞模様が現れ、全身が白い輝きで覆われてゆく。そしてそのままの勢いで、筒状をした目の横つ腹に思い切り爪を突き刺した。するとセルリアンは、大きな叫び声とともに木っ端微塵となった。

そのかけらが降り注ぐ中、私はどんどん小さくなってゆく箱を見つめていた。すると右腕から黒い輝きが吹き出し、全身がゾワリと震え、衝動が押し寄せてきた。

『もつと…暴れタイ…!』



しかし私は、慌てて腕を掴んで頭をブンブンと振った。すると縞模様と黒い輝きは消え、気持ちが悪く落ち着いた。

チラツとしか見えなかったが、走り去っていった箱の中には、2人のフレレンズと見慣れない格好をした子がいた。初めて会ったはずなのに、なぜかその子の顔が目には焼きついて離れない。そこで私は、あの箱を追いかけける事にした。

そのまましばらく走っていると、私は箱に追いついた。中の3人が窓にピッタリ張り付いて、じつとこちらを見ている。飛び乗ろうかと思つた時、かすかにセルリアンの気配がした。どうやら風に乗って移動しているようで、それがどんどん遠ざかってゆく。

あの子も気になるが、こっちの方が気がかりだ。私はその気配を追う事にした。

走る箱を追い越した時、何故か胸の奥がキュツとした。けど…、

『…これでいいんだ。私はセルリアンと戦う騎士なんだから。』

こう自分に言い聞かせ、私はそのまま走り続けた。

それから丸一日ほど走つただろうか。さすがにくたびれてきたところへ、目の前に大きな森…、ジャングルエンが見えてきて、それと同時に気配が消えた。

ここには多くのフレレンズをはじめとした生き物達が暮らしていて、セルリアンの気配も紛れやすい。

私は用心しながら森の中へと足を踏み入れた。

## ジヤングル編

## ● でかい口（ビッグマウス）

ビーストは、伸び放題の草を踏みつけながら鬱蒼と生い茂るジヤングルの中を進んでいた。時折あたりを見回したり鼻をひくつかせながら進んでゆくと、向こうからフレンズの匂いとセルリアンの気配がした。あれが追いかけていたものかまでは分からなかったが、彼女は駆け足でそこへと向かった。

木々がひらけた所に、ジヤングルのフレンズ達の遊び場となっている広場があった。綺麗に掃除されていて、落ち葉ひとつ落ちていない。暖かな日差しが降り注ぎ、キラキラした泉が湧き出ている、あたりには心地よい風が吹いている。

その泉のそばで、1人のフレンズが真っ青な顔をしながら横たわっていた。

その子は薄い緑色の髪をポニーテールでまとめ、2房の前髪は口を開けたワニを横から見たような形状をしている。上は暗い緑色の大きく胸元の空いた鱗皮のライダージャケット、その袖にはトゲが生えている。下は紺色のダメージーンズ、そしてジャケットと同じ色のブーツを履いていて、お尻から鱗で覆われた太くて長い尻尾が生えている。

イリエワニ「うう…、頭が重い…。明日は大切な日だつてのに、急にどうしたつていうんだ…。」

そうしているうちに、その子は気絶するように眠ってしまった。

すると彼女の髪が黒く変色し、ざわざわと蠢き始め、どんどん膨れ上がっていった。それはまるで大きなワニの頭のような形になると、大口を開けながら彼女を一気に呑み込もうと迫ってきた。

ガツチイイーン！

しかしすんでのところでは、ビーストがイリエワニを抱き抱え、なんとか大顎から助け出した。しかし鋭い牙がビーストの右腕を掠めた。そのあまりの衝撃に右腕は痺れてしまい、うまく動かせなくなった。

彼女はイリエワニを茂みに隠したが、間髪入れずワニセルリアンが飛びかかってきた。

バキヤン！

なんとか身をかわしつつ左の爪を牙に見舞ったが、弾かれてしまった上にこちらの腕まで痺れてしまった。

ガチン！ボキイ！グワシヤ！

ワニ口は、木も泉も地面もお構いなしに次々と噛み砕いてゆく。ビーストは転がった

り飛び回ったりしながら、必死にその攻撃をかわした。

ドンッ！

すると背中に大きな岩が当たった。知らないうちに、まんまと追い詰められてしまったのだ。すかさずワニ口が、大きな牙をギラつかせ、大口を開けながら飛びかかってきた。

とつさにビーストは振り向くと、まだ痺れの残る両腕を一気に大岩へと突き刺し、思い切り力をこめた。すると頭に紋章が輝き、体が白い輝きで覆われた。

ビースト「ガアアアアツ!!？」

そして咆哮と共に目一杯体をのけぞらせると、それを持ち上げてワニ口目掛けて力任せに投げつけた。

大口に巨大な岩を投げ込まれ、一瞬動きが止まったが…、

バキヤアアン！

ワニ口は大顎に力を込め、瞬時に岩を噛み砕いた。

しかしビーストは、その一瞬の隙を逃さなかった。すかさずワニ口の下顎目掛けて弾丸のような勢いで飛びかかり、両手に渾身の力を込めて爪を突き刺した。そしてそのまま下に振り下ろし、相手を真つ二つに切り裂いた。

ワニ口「ギョロロロロー!!!」

すると絶叫と共にワニ口セルリアンは砕け散った。

ビーストの腕はまだピリピリしている。それをさすっていると、小さな声が出た。  
？「ちつくしよ〜！だがな、あの青いボウヤに、ボクはタネをまいた！止められるものなら止めてみるんだなあ！」

ビーストはあたりを見回したが、声の主の姿は見つける事はできなかった。まだワニ口のかけらも消え去っておらず、セルリアンの気配を探るのも難しい。

ビースト『青いボウヤ…、はあの見慣れない子の事か？でもタネってなんだ…？』  
ビーストが首を傾げていると、茂みの中から声が出た。

イリエワニ「う…、う…ん…。」

どうやらワニの子が目を覚ましたらしい。しかも周りから、3人のフレンズの気配が近づいてきた。

もう少しここを探索したかったが、こうなつては仕方がない。ビーストは高々と跳躍すると、樹上へと消えていった。

後に残ったのは、もはや先程までの面影のかけらもない、破壊され尽くした広場だった。

● キュルル一行の軌跡

サバナナを出たキュルル達は、モノレールで竹林とアズアエンを訪れた。ここもおうちではなかったが、フレンズと交流したり悩みを解決したりした後、絵をプレゼントした。

そして次のエリアに向かう途中で大きな地震が発生し、レールが崩落してしまったため、モノレールを降りて歩いてパークを回る事となった。

そこからソンプレロを被った黄色い体のメキシカンラツキーのガイドでミナミメリカエンを訪れ、アードウルフとアリツカゲラのおうち探しに付き合った。

そして翌日、ガイドを引き継いだジャングルラツキーの案内で、ジャングルを訪れた。この子は深緑色の体にベルトを巻いていて、体の両脇に2本の木製のナイフを刺している。

ジャングルラツキー「ココカラ先ガジャングルエンダ。」

サーバル「わあー、でっかい森！」

カラカル「いろんな音も聞こえてくるわね。」

ジャングルラツキー「ココハふれんず以外ニモ沢山ノ生キ物ガ暮ラシテイル。トテモ広クテ迷イヤスイカラ、シツカリ俺ノ後ニツイテコイ。」

キュルル「ここにヒトがいるって聞いたんだけど、知らない？」

ジャングルラツキー「アア、ソレナラじゃんぐるノ奥ノ研究所デ暮ラシテイルゾ。」

カラカル「ホントにいたのね…。」

サーバル「よかったねキュルルちゃん！私もなんだか、そのヒトに会うのが楽しみで仕方ないんだよ！」

キュルル「うん！おうちについて、何か聞けるかもしれないね！」

これからヒトに会える…、それに、ビーストもいるかもしれない！そう考えると、キュルルの胸が高鳴った。そして3人は、ジャングルラツキーの後ろについて、うつそうと生い茂るジャングルに足を踏み入れた。

● 乱入！

ビーストは高い木の上で腕をさすっていたが、ようやく痺れが引いて、元のように動かせるようになった。すると、風がフレンズの匂いを運んできた。その中に嗅ぎ慣れない匂いを感じ取ったビーストは、木から木へと飛び移りながらその場所へと向かった。

そこではゴリラ、ヒヨウ、クロヒヨウ、メガネカイマン、イリエワニといったジャングルのフレンズ達と、サーバル、カラカル、ジャングルラツキー、そしてキュルルが紙相撲で遊んでいた。

そこへビーストがやってきた。するとみんなの中心からセルリアンの気配がした。不意に彼女は木から飛び降りると、その気配のする紙相撲に向かって急降下した。頭に



紋章が輝き、腕が輝きに包まれた。そしてそれに思いつきり爪を叩き込んだ。

ズドオオオン！

ヒヨウ姉妹&ワニ2人「「どわー!?」「」」

その一撃で、紙相撲は地面ごと吹き飛んだ。そしてあまりの衝撃に、周りにいたフレズまで吹き飛ばされた。だが襲撃に一瞬早く気づいたサーバルは後方に跳び、カラカルはキュルルを抱えてなんとか難を逃れた。

とっさにガードを固めて耐え凌いだゴリラは、もうもうと砂煙が立ち込める中で佇んでいる人影を見つめていた。やがてそれが晴れ、オレンジ色で体の大きなフレズが姿を表した。

ゴリラ「フレズ離れたこの力…、もしかして、あの子が広場を壊したのか？」

ビーストは鼻をひくつかせながら周りをうかがった後、かすかなセルリアンの気配目掛けて突進した。しかしカラカルの脇を抜けキュルルの目前まで迫ったところで、なにかを思い出しそうになった。ビーストは急停止し、その子の顔をじつと見つめた。

ビースト『この子は…？ああ、なんだかとても懐かしくて安らぐような…。』

その子は、突然現れたビーストにびっくりしてへたり込んでいた。見た目や雰囲気からは、何も脅威は感じられない。

しかしその子が抱えているスケッチブックから、わずかではあるがセルリアンの禍々

しい気配がする。

一刻も早く破壊しなければ！そう考えたビーストが、右の爪を振りかぶろうとしたその時…、

カラカル「その子から離れるお!!!」

キュルルの危機を目の当たりにしたカラカルが、ものすごい剣幕でビーストに飛びかかってきた。全身から赤い輝きが吹き出し、体のいたるところがまるで炎のように揺らめいている。

そのあまりの殺気に、ビーストの体がビリビリと震え、全身の毛がゾワリと逆立った。その威圧感は、先程のワニ口セルリアンの比ではない。

ビースト『これはっ…！半端な気持ちじゃ、こつちがやられる!』

ビーストはカラカルに向き直ると、全神経を相手に集中させた。そして両腕に持てる力の全てを注ぎ込み、迎撃の態勢を整えた。

カラカル「エリアルループクロ…」

サーバル「ダメ——ッ!!?」

べしやん!

カラカルが右手を振りかぶり、2人の爪がぶつかり合うかに思われたその瞬間、サーバルがカラカルの腰に飛びつき、そのまま地面に叩き伏せた。

堪らずカラカルは大声を出した。

カラカル「何すんよサーバル!!？」

そしてサーバルも怒鳴り返した。

サーバル「フレンズ同士ケンカはダメだよ!!？まずはお話してみようよ！」

ビーストはそんな2人の様子を、呆然と見つめていた。

ビースト『助かった…。なんなんだよあのもの凄い気は…。』

しかし今度は、複数の殺気がビーストに注がれていた。先程吹き飛ばしたフレンズ達が起き上がり、険しい目つきで彼女を見ている。そんな張り詰めた空気の中、ジャングルの奥から何かが飛んできた。

それは赤い紙で折られた紙飛行機だった。そしてビーストの目の前でパンツ！と大きな音をたてて破裂した。するとそこから大量の煙が吹き出してきた。

ビーストは驚いて、思わずヒツと息を吸いこんだ。その途端、鼻の奥が焼けるような感覚と共に、目がものすごく痒くなった。

ビースト「ぶわつくしよ！ゲホッ、ブホッ!!？」

そして大きくくしゃみと一緒に大量の涙と鼻水が流れ出し、呼吸が苦しくなった。これは堪らない。ビーストは慌ててその場から立ち去った。

キュルル「ゴホゴホッ。」

煙に巻き込まれたキュルルが咳き込んでいると、ジャングルの向こうから何かの音が近づいてきた。

ドルルルル…、ブオン！

すると茂みの中から、一台のオフロードカーが飛び出してきた。

そして運転席から誰かの声がした。

？「乗って！早く！」

サーバル「え？誰なの…。」

ゴリラ「あれは大丈夫だ、乗ろう！」

カラカル「キュルル、しっかり！」

カラカルはキュルルを抱えて、サーバルと一緒に車に乗り込んだ。

そしてゴリラ達は屋根に飛び乗った。

ゴリラ「みんな乗ったよ！」

？「よし、出発するよ！」

キュルル「ゴホツ…、待って、ビーストが…。」

キュルルは絞り出すような声で訴えたが、車は勢いよく走り出した。

そして上空からあたりを警戒していた誰かがこう呟いた。

??「『逃げるは価値』、力だけが全てではないのです。」

その子は茶色い鳥のフレンズだった。そして音もなくオフロードカーを追いかけ  
いった。

一方、森の中へと逃げ込んだビーストは、大きな木の下でうずくまっていた。涙と鼻  
水は落ち着いたが、まだ目がしょぼしょぼする。

ビースト『ぶえ…、鼻が効かない…、なんだったんだあの煙…。』

顔をくしくしこすっている、疲れがどつと押し寄せてきた。そういえば、ろくに休  
みもせずにサバンナからここまで走ってきたのだった。

ビースト『これじゃ搜索もできないな…。仕方ない、一休みしよう…。』

そして瞼を閉じると、すぐに寝入ってしまった。

### ●パークガイド

キュルルはサーバルとカラカルに挟まれて、後部座席に座りながらじつと後ろを見つ  
めていた。すると運転席から声がした。

？「みんな大丈夫？」

そして屋根の上からゴリラ達の「どうにか。」という返事が返ってきた。

それからサーバルがこう言った。

サーバル「助けてくれてありがとう、私はサーバルキヤットのサーバル！あなたは？」  
？「サーバル…？」

その名前を聞いて、運転席の人は振り向いた。

その人は緑色のウエーブがかつた髪をしていて、ぱっちりした瞳に端正な顔立ち、頭には薄い灰色のサファリハットをかぶっていて、そこに一枚の青い羽を刺していた。そして背もたれ越しに、赤い服の上に黒い上着をはおっているのが見える。

サーバルを見つめるその眼差しは、驚きと喜びと悲しみが混ざり合ったようなものだった。その人はしばらくそのまま固まっていたが、右腕につけた小さな機械から声が出た。

??? 「カバン、前ヲミテ」

その言葉が終わると同時に、車が石を踏みつけてガクンと揺れた。

みんな「わあ!？」

その人は慌てて前を向いた。

かばん「ごめんごめん、すっかり運転するよ。」

私はかばん。このパークガイドだよ。この近くで夕食の食材を探していたんだけど、ジャングルさんからの連絡を受けて飛んできたんだ。みんな無事でよかったよ。

そしてこの腕の小さいのは、ラッキーピーストのラッキーさん。」

ラツキーさん「ヨロシクネ。」

サーバル「よろしくね、かばんさん、ラツキーさん。」

そしてカラカルとキュルルもお礼と自己紹介をした。そしてキュルルの言葉を聞いて、かばんさんはハンドルを握ったままこう答えた。

かばん「君はヒトなんだね。私もそうなんだ。」

キュルル「ええー!？」

サバンナでロバやセンザンコウが言っていたヒトが目の前にいた事に、キュルルはとても驚いた。

キュルル「ハツクシヨン！」

そして最後の大きなくしゃみがでた。

カラカル「しつかりしてキュルル。ねえ、さっきの煙、なんだったの？」

かばん「あれはセルリアンへの目眩しと、フレンズさんのケンカを止めるためのものなんだ。ここには元気でヤンチャな子がいっぱいいて、時々力比ベをしてるんだよ。」

しかし白熱しすぎて怪我人ができそうなこともある。そんなフレンズ達のまとめ役であるゴリラから、なんとかできないかと相談を受けたかばんさんは、一つの方法として、紙飛行機を使った煙幕を思いついたのだった。

かばん「さっきのは緊急用の試作品で、あの煙には少量のトウガラシの粉を混ぜてあ

るんだ。少しの間涙と鼻水で苦しい思いをするけれど、それ以上の心配はない。でもだからって無闇にフレンズさんに使いたくないし、今回みたいな時は関係ない子達まで巻き込んだりから、早く他の方法を見つけようと考えてるんだけど思いつかなくて…。辛い思いをさせてすまなかつたね。」

キュルル「僕は大丈夫です。大変そうだったのはビーストの方…。すると屋根から声がした。

ゴリラ「いや、かばんさんが止めてくれなかつたら、ジャングルのみんなも巻き込んだ大ゲンカになってたよ。ただでさえ大事件が起きた後だったんだから。」

メガネカイマン「かばんさん、実は…、あの広場がめちやくちやにされちやつたんです。」

「あらかじめ時間と場所とルールを決めて、力比べを試みたらどうだろう。」というかばんさんの提案で、そこで運動会が開かれる事になり、ジャングルのみんなで小石や落ち葉を掃除したりして準備を進めていたのだ。

そしていよいよ明日が大会の日だったのだが…、

クロヒヨウ「ほんま楽しみやな姉ちゃん…、え!?？」

ヒヨウ「なんやこれ!?？」



会場の様子を見に来たヒヨウ姉妹が見たものは、見るも無惨に破壊された広場と、そこに佇むイリエワニとメガネカイマンだった。

ヒヨウ姉妹はワニ2人が広場を荒らしたのだろうと食ってかかったが、2人は濡れ衣だと言いつ返しした。

メガネカイマン「違います！私は大きな音が聞こえたので、ついさつきここに来たんです！」

イリエワニ「私はここで寝てたんだ。で、目が覚めたらこうなってた。」

ヒヨウ姉妹が訝しんでいると、どこからか小さな声がした。

？「ろくに手伝わなかったせに、ごちやごちやうるさいんだよ！」

ヒヨウ姉妹「「なんやと!?」？」

？「負けるのが怖いから、こんな事したんだよなあ？」

ワニ2人「「なんだと!?」？」

そうして4人が睨み合っているところへゴリラがやって来た。そしてまずは話し合いをしようと提案したのだが、互いに騒ぐばかりでまとまらない。仲は良いがヤンチャな4人組だ、口論は徐々にヒートアップし、一触即発の雰囲気となった。

ゴリラ『これは力ずくで止めるしかないか…。はあ…。かばんさんのようにはいかないなあ…。』

と、ゴリラがため息をついているところへ、キュルル達が通りがかったのだ。

ゴリラ「それで、こうなった訳を話した後、いくつか競技の内容を教えただ。そしてそれを聞いたキュルルさんが、スケッチブックの紙で相撲を作ってくれて争いが収まった。けど、突然現れたフレンズに壊されてしまったんだ。」

かばん「そっか……。残念だけど運動会は後回しにして、まずはみんなで広場を元通りにしよう。」

それを聞いたサーバルは、さっきの事を思い返した。

サーバル「それもあの子がやったのかな？」

カラカル「やっぱりただの乱暴者よ！」

キュルル「ビーストは絶対そんな子じゃないよ！」

未だにビーストの肩を持つキュルルに、カラカルは声を荒げた。

カラカル「アンタがいっちゃん危なかったの!!？」

イリエワニ「ビースト？あれが噂のビーストなのか？」

かばん「そう呼ばれてるね。あの子は言葉のやり取りができないし、常に野生解放状態みたいなものだから、本人にそのつもりがなくても周囲を傷つけてしまう事もある。けど安心して。噂みたいな悪い子じゃないから。」

ゴリラ「うーん、ホントにそうなのかな？」

カラカル「信用できないっ！」

カラカルは本気で怒っている。キュルルが危うく襲われかけたのだから当然だ。他のみんなも半信半疑だったが、一番危険に晒されていたはずのキュルルが、目を輝かせながら叫んだ。

キュルル「だよね！あんな強くてカッコいいフレンズ、どこにもいないよ！さっきの事も、きつとなにか訳があるんだよ！」

それを聞いたカラカルは、呆れ顔でキュルルの頭を小突いた。

カラカル「アンタねえ…、いい加減少しは怖がりなさいよ！」

そしてサーバルは、感心した様子で言った。

サーバル「かばんさんは物知りだね、すっごーい！」

するとかばんさんは、はにかんだ笑みを浮かべた。

かばん「ハハ、ありがとう。昔ちよつと関わりがあつてね。それにあちこちから噂も集めているんだ。」

### ● 希望の歌

かばんさんはゴリラ達をピーストから離れた場所に連れていった。そしてラツキー

さんに業務を引き継いだジャングルラツキーとも、ここでお別れする事となった。

かばん「ここならあの子も来ないと思うよ。広場の事は、もう少し落ち着いてからにしよう。」

ゴリラ「助かったよ。ありがとうかばんさん。」

かばん「じゃあねジャングルさん。また何かあったら知らせてね。」

ジャングルラツキー「マカセロ。」

別れ際に、キュルルが新しい紙相撲と土俵、それと絵を彼女達に手渡した。

キュルル「はい、ジャングルのみんなを描いてみたんだ！」

ヒヨウ「おおー！」

クロヒヨウ「これうちらか！」

イリエワニ「見事なものだな。」

メガネカイマン「素敵な力ですよね。」

ゴリラ「ありがとう。おうちが見つかったら、ぜひまた来てくれ。」

その後で、キュルルが起きた時の様子と旅の目的を聞いたかばんさんは、何か力になれるかもしれないと考え、3人を住まいである研究所へと誘った。

かばんさんの運転する車は、4人を乗せてゴトゴトと進んでゆく。

かばんさんがハンドル近くのスイッチを押すと、スピーカーから音楽が流れてきた。

それに合わせて鼻歌を歌いながら運転していると、隣に座っているキュルルが話しかけてきた。

キュルル「その音、なんなんですか？」

かばん「うん？　こういうのを聞いたのは初めて？」

キュルル「はい、とつても綺麗だなんて思つて…。」

かばん「これは歌つていうんだ。音だけじゃなく、それに合わせた言葉もあるんだよ。昔の記録を調べていたら見つけてね。いつ誰が、何のために作つたのかは分からないのだけ。」

それを聞いたサーバルが、後ろから身を乗り出してきた。

サーバル「なにそれなにそれ、聞いてみたーい！」

かばん「そう？　それじゃあ…。」

かばんさんは曲を巻き戻すと、歌い出しからせつせつと歌い始めた。それはなんだけか悲しい、けれどもとても綺麗で気持ちが揺さぶられる歌だった。すると歌を聞いていたサーバルとカラカルも、途中から一緒に歌いだした。そんな3人を見て、キュルルは目を丸くしながらじつと歌に耳を傾けていた。

歌が終わっても、キュルルは感心しきりだった。

キュルル「歌つてすごいなあ…。けどどうして2人も歌えるの？」

サーバル「うーん…、分かんないや！なんでだろう？」

カラカル「不思議なんだけど、自然と口から出てきたのよね。」

かばん「ゴリラさん達もそうだったんだ。もしかしたらフレンズみんなが歌えるのかもしれない。私は『希望の歌』って呼んでるんだ。」

キュルル「希望の、歌…。」

それを聞いたキュルルは、歌えなかった自分はやはりヒトで、フレンズとは少し違うのだなと考え、気持ちが悪んだ。

その様子に気付いたかばんさんは、微笑みを浮かべながらキュルルを見た。

かばん「心配しないで。みんなと同じじゃなくてもいいんだ。キュルルさんはまだ起きたばかりで不安もたくさんあるだろうけど、好きな場所や得意な事は、探していればきつと見つかるよ。」

「ジャングルでは話を聞いただけで紙で相撲を作ったっていうし、さつきはビーストの事を思いやつてくれたよね。君は賢くて器用で、とても優しいんだね。」

キュルル「えっ!?!そう、なのかな…。」

褒められて嬉しい反面、恥ずかしくもあった。キュルルは顔を赤らめつつうつむくと、スケッチブックをパラパラとめくりながら、さつきの事を思い返した。

キュルル『ビーストって、あんな格好の子だったんだ…。やっぱりこの絵は、あの子

を描いたものなんだな。』

ビーストは噂通り、オレンジ色にところどころ白の混じった大きな体をしていた。そしてトラ柄模様のついたポリュームのあるロングヘアを、黄色いチェック柄のリボンで2房にまとめていた。毛皮は白いワイシャツの上にコゲ茶色のベスト、首には黄色のネクタイを締めていて、下はリボンと同じ柄のミニスカートと、トラの縞模様の入った腿まであるガーターソックス、黒いリボンのついた白い靴を履いていて、お尻から縞模様の長い尻尾が生えていた。

改めてスケッチブックの最後のページに描かれているトラの子の絵を見ると、特徴がそっくりだった。

キュルル『鋭い目つきだったけど、全然怖くなかった。僕を見て何か言いたそうだったけど……、おしゃべりできるようになったら教えてくれるかな。』

しかしその絵をよく見てみると、ある違和感に気づいた。

キュルル『あの子の頭の紋章とこの絵の模様はちよつと違うな……。それに手枷と黒い鉤爪がない。』

するとサーバルが、後ろの席からスケッチブックを覗き込んだ。

サーバル「あれ？キュルルちゃん、その絵ってビースト1人じゃなかった？」

確かにトラの子の周りに、サーバルやカラカル、そしてこれまで出会ったフレンズ達

が描かれている。

キュルル「これはね、ビースト1人だと寂しそうだから、出会ったフレンズを書き足していつてるんだ。」

サーバル「わあ、やっぱりキュルルちゃんは優しいね。かぼんさんの言った通りだよ！」

一方カラカルは、さつきからビーストばつかりで、全然自分を見てくれないキュルルにむくれていた。

カラカル「なによ！このビースト馬鹿っ!!？」

そして腹立ちまぎれにこう叫ぶと、パイと顔を背けた。

その気持ちを察したかぼんさんは、ハンドルを握りながら苦笑いをした。

かぼん「はは…、仲良くね。」

しかし、肝心のキュルルはなぜカラカルがさつきから怒鳴っているのかよく分かっていないようで、目をパチクリさせている。そんなカラカルをまあまあとなだめながら、サーバルはかぼんさんをじつと見つめていた。

サーバル『初めて会ったはずなんだけど…なんだろう、この気持ち。』



## 研究所編

### ◎ 研究所

しばらく進むと、厚い壁に囲まれた研究所が見えてきた。

サーバル「わー、でつかーい！」

カラカル「ここがあんたのおうちなの？」

キュルル「多分違う：けどなんだかワクワクするよ！かばんさんはここに一人で住んでるんですか？」

かばん「違うよ。アフリカオオコノハズクの博士さんと、ワシミミズクの助手さんと一緒に暮らしているんだよ。あと、お手伝いをしてくれる2人組がいるんだけど、今は出かけてていないんだ。」

そこへ助手が音もなく空から下りてきた。そして車の屋根に乗ると、逆さに身を乗り出して窓からぬつと顔を出した。

助手「お前達、研究所を案内してやるですよ。」

キュルル達「わあっ!？」

そしてその体勢のまま、毛皮から「ことわざえほん」と書かれた本を取り出して読み

始めた。

かぼん「それ、このところのお気に入りなんだ。その影響で時々難しい事を言うんだけど、あまり気にしなくて良いからね。」

助手「言葉にしてこそ身につくのです。『百の文も、一言に如かず』なのです。」

車は薄暗いガレージに入って行つた。その中には一台のジャパリバスがあり、かぼんさんはその隣に車を止めた。

サーバル「かぼんさん、この子は？」

かぼん「それはジャパリバスだよ。これからちよつとやつてもらいたいことがあつてね、ようやく整備が終わつたところなんだ。」

サーバルは、なぜか熱心にバスを見つめている。

カラカル「知ってる子？」

サーバル「全然。けど、なんだか見ててウキウキしない!?？」

カラカル「…いや、しないけど？」

キュルル「わあ…、これもカッコいいなあ…！」

研究所の入り口の前では、博士が待っていた。

博士「かぼん、助手、戻つたんですね。… おや、珍しいお客が来たのです。」

かばん「ただいま博士さん。この子達はおうち探しの旅をしていて、たまたまジャングルにいたんだ。知りたい事があるそうだから連れてきたんだよ。」

それを聞いた博士は胸を張った。

博士「何でも聞くと良いのです。我々は賢いので。」

そしてかばんさんの隣で、助手も同じように胸を張っていた。

助手「聞くは一生の価値、聞かぬ者は一生同じ』なのです。」

かばん「他にもいろいろあつたから、後で話すよ。」

そしてかばんさんは、キュルル達にこう言った。

かばん「ようこそ研究所へ。歓迎するよ。」

かばんさん達は3人に研究所を案内した。ここにはラツキービーストのメンテナンスを行う機械もあり、数体のラツキービーストがその上に並んでいた。本体は外されて、前の台座に固定されていた。

その後、かばんさん達はお茶とお菓子で3人をもてなした。それからキュルルの話を聞いて見解を述べたり、自分たちの事を話したりした。

かばん「外出？時々ゴリラさん達に挨拶しに行ったり、ジャングルに食材を取りにゆくくらいかな。私達、あまり出歩かないんだ。」

博士「わざわざ出歩かなくても、賢い我々の所には、問題の方からやってくるのですよ。この間も、ホテルで行われるというペパプライブに助言をしてやったのです。」

助手「今度のライブは、夜通し行われる特別なものだそうです。」

かばん「正直、博士さんには、もう少し運動して欲しいんだけど……。」

助手「私もたびたび言っているのですが……、『暖簾に釘』、どうにもならないのです。」  
博士「だから問題ないって言ってるのです！」

その後でセルリウムの研究を見せたり、セルリアンと海底火山の關係に気付いたキュルルの判断力に驚かされたりした。

そうこうしているうちに夕方になった。かばんさん達は3人に、今日はここに泊まるよう勧めた。

夕食は定番の激辛鍋にした。キュルルとサーバルは辛さにヒーヒー言いながらもバクバク食べていたが、警戒心の強いカラカルは食べようとしなかったので、あらかじめ用意しておいたケーキ風ジャパリまんときこのスープをご馳走した。

ご飯を食べた後、3人はかばんさんに促され、大きなお風呂に入った。サーバルとカラカルは毛皮を着たままだったが、キュルルはどうにも違和感が拭えなくて、服を脱いで一緒に入った。

それからたくさんさんのベッドが並んでいる寝室に案内された。

かばん「どこで寝てもいいよ。今日はいろいろあつて疲れたでしょ、ゆつくり休んでね。」

キュルル「あの…、僕、みんなで寝たいんですけど、駄目でしょうか？」

かばん「え？…2人もそれでいい？」

かばんさんが尋ねると、サーバルとカラカルも頷いた。するとかばんさんは、6つのベッドを繋げてこう言った。

かばん「私達は夜遅いから、先に横になつて。後から来るけど、無理せず寝ていいからね。」

そう告げて部屋から出て行つた。

そうして窓のそばからカラカル、キュルル、サーバルと順に並んで、ベッドに横になつた。

サーバル「面白いとこだね。辛いご飯も、最初はビックリしたけどおいしかった。カラカルも食べればよかつたのに。」

カラカル「いいとこなのは分かるけど、あれだけはゴメンだわ。あんた火イ吹いてたじゃない。キュルルはどう？」

キュルル「うん。もしかして、おうちつてこういう所なのかもしれない。美味しいものがあつて、みんなが笑つて、あつたかくて明るくて、安心できて…。」

サーバル「キュルルちゃんのおうちも、きつと素敵なお家だよ。」

カラカル「あたし達と一緒に探せば、必ず見つかるわよ。」

キュルル「そうだね、ありがとう。あと…。」

カラカル「ピーストでしょ。ほんつと、あんたはそればかりね！」

そして3人で笑い合った後、キュルルは目を閉じた。

カラカルの言う通り、頭の中に思い浮かぶのは、おうちよりもピーストの事ばかりだった。実際に会った彼女は、想像の何倍もカッコよかった。突然の事でビックリしたが、今日の事は何か訳があるに違いない。今度はいつ会えるだろう。そんな事を考えているうちに、いつしかキュルルは眠りについた。

### ● 約束

煌々と輝く月が、あたりを明るく照らしている。博士への報告を済ませたかばんさんは、2階の自室の椅子に上着をかけると、机の電気スタンドをつけて調べ物を始めた。すると窓から十分な月光が差してきたので、スタンドの明かりを消した。窓の向こうにはまんまるな月が見える。そしてそこに、ポツンと小さな影がある。

研究所の資料によると、あれはかつてヒトが作り出した人工衛星というものだそう  
だ。

かぼん「ヒトはあれで、なにをしていたんだらうなあ。」

それをぼんやりと眺めていると、後ろのドアから音がした。振り向くと、そこにはサーバルがいた。

サーバル「えへへ、何してるの？」

かぼん「サーバル……! どうしたの? 眠れないの?」

するとサーバルは、右手の親指を立てた。

サーバル「私、夜行性だから! いつもはキュルルちゃんに合わせてるんだけど、今日はなんだか寝れなくて。あちこち見ながら歩いてただけど、かぼんさんの部屋のドアが少し開いてたから、覗いてみたくなったの。」

そして床にペタンと座った。かぼんさんは調べ物を切り上げると、サーバルと同じように床に座って、向かい合った。

かぼん「じゃあ、眠くなるまでお話ししようか。」

サーバル「うん! それじゃあ、: かぼんさんはここで生まれたの?」

かぼんさんは、少し言い淀んでからこう答えた。

かぼん「: うん、気がついたらここにおいて、博士さんと助手さんと暮らす事になったんだ。サーバルはどこで? その胸の赤い羽はなんなの?」

サーバル「この羽、フレンズになった時からあったんだ。それからずーっとサバンナ

で暮らしてただけで、たまーに知らない景色が頭に浮かんでくるの。そんな時はいつも隣に誰かがいるんだ。その子がどんな格好なのかはハッキリ思い出せないんだけど、とっても優しくくて、私の大好きな子なの！」

「今日かばんさんに会って、私、その子の事が頭に浮かんだんだ。だからかばんさんに聞いてもらおうって思ってた。：それでね、かばんさんはその子の事、何か知らないかな？」  
湧き上がる感情をグツとこらえ、かばんさんは平静を装いながらこう答えた。

かばん「：さあ、どうだろうね。さつきも言った通り、私はあまり出歩かないし、正体の分からないレンズの噂話はたくさんあるからね。もう少し特徴が分かれば答えられるかもしれないけど、これだけじゃなんとも言えないよ。」

サーバル「うみや：ごめんなさい。」

かばん「謝ることないよ！分からないことをそのままにしないで、聞きに来てくれたんだから嬉しいよ！」

サーバル「ホントに!?!？」

かばん「もちろんだよ!：：実はね、今取り組んでる問題が全部片付いたら、私も旅に出ようと考えているんだ。ここでは沢山の知識が得られるけど、実際に様々な風景やそこで暮らすフレンズ達を見て、見聞を広めようと思ってるね。もしかしたら途中で君たちとも出会うかもしれない。その時は、一緒にあちこち冒険したいな。」



サーバル「わあ……きつとそれはすつごく楽しいよ！楽しみだなあ、やくそくだよ！」  
かぼん「うん、約束だね！」

そう言つて、かぼんさんは左手を軽く握ると小指を差し出した。それを見て、サーバルは不思議そうな顔をした。

サーバル「それなに？」

かぼん「指切りつて言つてね、ヒトが約束する時のおまじないだよ、その夢が叶いますようにつて。サーバルもやってみて。」

するとサーバルは、かぼんさんの手をじつと見つめながらぎこちなく右手の小指を伸ばした。

サーバル「うん……」

かぼん「あ、反対の手でやるんだよ。」

サーバル「えーつと、こう？」

かぼん「そう！それでね……」

そしてかぼんさんは、すつと腕を伸ばしてサーバルと指切りをした。

かぼん「約束っ！」

それを聞いたサーバルは、目をキラキラと輝かせながら声を弾ませた。

サーバル「やくそく！」

かばんさん「約束だよ！」

指切りが終わっても、サーバルは興奮しっぱなしだった。

サーバル「やっぱりかばんさんはすつごいんだね！私の知らない事をいっばい知ってるし、いっつも難しい事を考えながら、楽しい事もたくさん思いつくんだもん！私も、かばんさんみたいにみんなを助けてあげられたらなー！」

かばん『つ……………!!?』

先程から、かばんさんはサーバルの言葉に心を揺さぶられ続けていたのだが、この言葉で耐えきれなくなった。どんなに必死に押さえつけようとしても感情が溢れ出てきてしまい、声が少し震えてしまった。

かばん「そんなふうにする必要なんてないんだっ……！だって……、だって私は、ずっとサーバルの事が好っ……」

……素晴らしいフレンズだと……、思ってるんだからさ……！」

そしてサーバルをじっと見つめる目は、涙で潤んでしまっていた。しかし幸いな事に、月光に照らされていたサーバルはそれに気づかず、屈託のない笑顔を浮かべている。

サーバル「わーい！ありがとうかばんさん！」

かばん『よかった……、月の明かりが涙を隠してくれたみたいだ……』

そしてかばんさんは、悲しげに笑いながら自分にこう言い聞かせた。

かばん『これでいい…、これでいいんだっ…！今はまだ言えないよ…。サーバルちゃんか思ってるほど、僕は強くもなければ賢くもないんだっ！なんとかか…、早くなんとかしないと…!!?』

●強襲！バス型セルリアン

グゴゴゴゴツ

そこへ突然、大きな地震が起こった。研究所が激しく揺れ、セルリウムを保管していた棚が倒壊した。すると中に保管されていたセルリウムが、輝きに向かってうねうねと伸びていった。それはガレージに止めてあったジャパリバスまでたどり着くと、その輝きを取り込んでバス型のセルリアンとなった。

グワシヤアン！

ガレージから大きな音がした。かばんさんとサーバルが慌てて窓から下を覗くと、バス型セルリアンがガレージを飛び出して、キュルル達の寝室に向かって猛スピードで走ってゆくのが見えた。

サーバル「いけない！」

サーバルはすぐに窓から飛び出すと、セルリアンを追いかけた。そして博士と助手が部屋に駆け込んできた。

博士「かぼん、大変なのです！」

助手「ガレージからバスの形をしたセルリアンが！」

かぼん「分かっている、行こう！」

かぼんさん達は部屋を飛び出すと、大急ぎでキュルル達を助けに向かった。

外で大きな音がして、キュルルとカラカルは飛び起きた。すると…、

どつかーん！

寝室の壁を吹き飛ばして、バス型セルリアンが現れた。バス型は後輪で立ち上がり、運転席の正面に付いた巨大な目をグリグリと動かすと、前輪のシャフトを触手のように伸ばして振り回した。その大きなタイヤが、唸りを上げながらキュルルに迫ってきた。

とつさにカラカルがキュルルを抱えて跳び、なんとかタイヤをかわした。しかし体勢が整う前に、もう一つのタイヤが向かってきた。カラカルは避け切る事ができず、それが背中を直撃した。全身に激痛が走って意識が朦朧となり、彼女はその場に崩れ落ちた。

キュルル「カラカル!!?カラカル、しっかり!!?」

キュルルはカラカルを抱き起こし、必死に呼びかけた。そこへ、両前輪を高く掲げたバス型が迫ってきて、2つのタイヤを勢いよく振り下ろした。

ゴシヤアアン!!?

大きな音とともにベッドと床が吹っ飛び、もうもうと粉塵が舞った。しかしそこに2人の姿はなかった。するとバス型の後ろからサーバルの声がした。

サーバル「ほら、こつちだよ！」

サーバルの隣には、キュルルとカラカルがいる。

2人は間一髪の所でサーバルに助けられ、外に連れ出されていた。

バス型がサーバルの方を振り向いた。するとその背後から、部屋に飛び込んできた博士と助手が空中から飛びかかった。2人はそのままの勢いでバス型を押し続け、研究所を囲っていた厚い壁まで押し込んだ。

2人の爪がバス型に食い込み、その背中に小さなヒビが刻まれてゆく。

サーバル「みやみやみやみやみやみやーっ!!？」

そこへサーバルも突っ込んできて、ところ構わず攻撃を加えた。

するとバス型は上体を大きく捻り、振り向きざまに左のタイヤで3人を振り払った。その強烈な一撃で、博士と助手は壁の外まで飛ばされ、サーバルは地面に叩きつけられた。衝撃で頭の中がぐわんぐわんと揺れ、立ち上がる事ができない。

するとそこへ、かばんさんの運転するオフロードカーが突っ込んできた。かばんさんは運転席からチラッとサーバルを見た後、猛スピードでバス型に向かってゆき、思いきり体当たりした。

ドゴオツ!

大きな衝撃音と共に、バス型が壁にめり込んだ。しかし車の直撃を受けたにも関わらず、相手は怯む事なく触手を振りまわし、巨大なタイヤを車に叩きつけた。その攻撃で屋根が吹き飛んで内部がむき出しとなり、車体がひん曲がってメチャクチャになった。さらにバス型は車を抱え込むと、運転席ごとかばんさんを押し潰そうとした。

それを見て、サーバルが必死に叫んだ。

サーバル「につ、逃げてかばんさん!そこから今すぐつ:!!?」

すると、かばんさんの乗る車がものすごい光を放った。対セルリアン用の最終手段である自爆装置を作動させたのだ。かばんさんは、真つ直ぐ前を向きながらこう呟いた。

かばん「ごめんねサーバルちゃん…、さつきの約束、もう守れなくなりそうだ。けど…、それでも君は生きて…!!」

ドオオオン!

そして車が大爆発を起こした。激しい光と音とともに厚い壁が崩れ、車の残骸があたりに散らばった。

キュルル達は呆然とその光景を眺めていた。そしてサーバルの目の前に、かばんさんの帽子がパサリと落ちた。

サーバル「そんな…!やだよかばんさんつ…、かばんさああん!!!」

それを震える手でギュツと抱きしめながら泣き叫ぶサーバルの周りに、キュルル達も集まった。そして3人は声の限り泣いた。

サーバル「うああああん!!!」

キュルル「かばん…さんっ…、う…っわあああん!!!」

カラカル「ウソでしょっ…、わああっ!!!」

そこへ、吹き飛ばされた博士と助手がやってきた。

博士「よかった…、お前達、無事だったのですね!」

助手「…かばんはっ?!?…まさか…!」

キュルルはむせび泣きながらこう答えた。

キュルル「僕達をかばって…、車が爆発して…!」

その言葉で2人は瞬時に状況を理解し、沈痛な面持ちでうつむいた。すると、瓦礫となった壁の山が崩れ、その中から物音がした。それまでうつむいていたみんなは顔を上げ、そちらの方を見た。

サーバル「かばんさんっ…?!?」

「グオオオオオーン!!!」

なんと瓦礫を吹き飛ばし、雄叫びとともに現れたのはバス型セルリアンだった。全身が焼け焦げ、体のあちこちから煙が上がり、両前輪は吹き飛んでいたが、ギロリとキュ

ルル達を睨むと、ものすごい勢いで向かってきた。

ザシユツ!

しかし突然セルリアンの体が裂けたかと思うと、あっという間に全身にヒビが広がってゆき、そのままぱっかーん!と弾けた。

セルリアンのきらめきが降り注ぐ中、あまりの出来事にみんな啞然としていた。

サーバル「今のは…?」

キュルル「一体、何が…?」

カラカル「…かばんさんが、やっつけてくれてたのね…。」

しかし博士は疑問を抱いていた。

博士『妙ですね…、爆発にやられたというよりは、何か鋭いもので切り裂かれたような消え方なのです。』

それからみんなであたりを搜索したが、かばんさんの姿はどこにもなく、それぞれ悲痛な思いで夜を明かした。そして翌朝、博士と助手は出発するキュルル達を見送った。

博士「もつとゆっくりしていても構わないのですよ?」

キュルル「いいえ…、早く行かないと。僕よりもサーバルが辛そうで、見てられないんです。」



すると、博士がキュルルにラッキーピーストの本体を手渡した。

博士「それなら、これを連れてゆくと良いのです。何かあつたら我々と話ができるのです。」

キュルル「ありがとう…。」

キュルルは暗い顔をしながら受け取ると、それを左の腕に着けた。

助手はかばんさんの帽子をサーバルに差し出した。

助手「これはお前が持っていて良いのですよ。」

けれどもサーバルはかぶりを振った。

サーバル「ううん…、かばんさんが戻ってきた時、ここに無いと困るだろうから…。」

博士「近くを通りがかつたら、また遊びに来ると良いのです。」

助手「特にお前には、辛さの素晴らしさを知らしめてやるのです。」

カラカル「甘いもの用意しなさいよ…。でも、何か美味しいものを見つけたら持つてくるから…。」

そう言つて、3人は重い足取りで旅立った。その姿が見えなくなると、助手が涙ぐみながら博士に話しかけた。

助手「グスン。客人の前ではなんとかこらえてましたが…、やはり、気が緩むとダメですね…。ところで博士、かばんの事なのですが…。私はどうも、腑に落ちない点があ

るのです。」

博士「…ええ、確信がないのであえて伏せていたのですが、いくら凄い爆発とはいえ、体だけでなく毛皮の切れ端すら見つからないのはおかしいのです。それにもし万が一の事が起きて消滅したのなら、部屋にあつた毛皮も消えるはず…！もう一度、しっかりと探ります！」

助手は涙を振り払い、帽子を胸に抱いて叫んだ。

助手「一度と言わず何度でも！私は絶対諦めないのです！」

## ◎ 焼け焦げた大きな背中

真つ暗だった世界に、急に光が差した。

かばん「う…、う…、う…。」

かばんさんは、木漏れ日が降り注ぐジャングルの中で目を覚ました。ぼんやりした視界が、しだいにはつきりと像を結んでゆく。

そして右腕で光を遮ると、ラッキーさんが大喜びした。

ラッキーさん「カバン!!? 目ガ覚メタンダネ! ヨカッタ! ホントニヨカッタ!!?」

かばん『生きてる…? そうだ、あの時…!』

爆発の瞬間…、誰かがものすごい速さで飛び込んできて、バス型セルリアンに爪を見舞った。そしてかばんさんを抱き抱えながら車から飛び出し、爆発から守ってくれたのだ。

しかし凄まじい衝撃で、2人は空高く舞い上げられ、かばんさんは意識を失った。そして、気がついたら研究所から遠く離れたジャングルまで飛ばされてしまっていたのだ。

するとかばんさんの隣から、荒い息遣いが聞こえてきた。そちらを見ると、ぼろぼろ

になったビーストがうつ伏せに倒れていた。彼女は気を失っていて、背中が焦げ、毛皮がズタズタになっている。

かばんさん「ビースト!? 私を助けてくれたんだね、ありがとう…。」

!!?…ひどいケガ、待ってて。」

かばんさんは携帯していたサンドスターのビンを取り出すと、中身をビーストに振りかけた。するとビーストの体がぼんやりと輝き、背中の火傷が小さくなってゆく。

かばん「これじゃ足りない…。彼女の消耗も激しいし、なんとか研究所まで連れて行って休ませないとっ…イタタ。」

改めて自分の体を見てみると、いたるところが擦りむけたり火傷したりしている。が、なんとか動くことはできそうだ。かばんさんは意識のないビーストの体を支えながら、研究所に向かって歩き出した。

しばらく歩いてゆくと、ラツキーさんがこう言った。

ラツキー「上空カラ近ツイテクルふれんずガイルヨ。」

見上げると、かばんさんを搜索していた助手が舞い降りてきた。そして泣きベソをかきながらかばんさんに抱きついてきた。

助手「かばあああん! よがった、心配(じんばい)じだのですよおお!!?。」

大泣きしている助手の頭を、かばんさんは優しく撫でた。

かばん「ごめんねミミちゃん。安心して、私は大丈夫。それよりこの子が大変なんだ！」

助手「ビースト?!? お前がかばんを助けてくれたのですか?!?」

助手はすぐさま博士を呼んできた。そして助手がかばんさんを、博士がビーストを抱き抱えて研究所へと急いだ。こうして2人は、なんとか研究所にたどり着く事ができた。

●悪夢（ナイトメア）

かばんさんは自分の部屋のベッドに横になった。助手がその隣に座っている。

助手「かばん、体は大丈夫なのですか？」

かばん「うん、あちこちヒリヒリするけど平気だよ。心配かけてごめんね。それよりあの子たちは？」

助手「かばんがいなくなっちゃったと一晩中泣いた後、また旅に出たのです。『悲しい子には旅をさせるな』と言いますし、博士が引き止めようとしたのですが、ここにいるのはサーバルにとって辛すぎると…。」

かばん「そっか…、早く大丈夫だって知らせ…ない、と…。」

話の途中で、かばんさんは眠ってしまった。大きな怪我はないようだが、あれほどの

事があったのだ、相当消耗しているのだろう。助手はそんなかばんさんを心配そうに見つめていた。

一方博士は、ビーストの看病をしていた。バス型セルリアンにめちやくちやにされてしまった寝室から無傷のベッドを居間に持つてきて、そこにビーストをうつ伏せに寝かせた。

博士はベッドの横で微笑みながら、彼女にこう囁いた。

博士「かばんを助けてくれてありがとうございます。」

ビーストは、静かに寝息を立てている。呼吸も落ち着いてきて、顔色も良くなってきた。博士はひとまず安心し、今度はかばんさんの様子を見るために、そつと部屋を後にした。

ビーストは、鉄格子がはまっている四角い箱の中で目を覚ました。鉄格子は一部がぐにやりと曲がっていて、大きな隙間が開いている。そこから這い出てみると、あたりは真つ暗で誰もいない。するとどこからか低い声が聞こえてきた。

「戦え…、戦え…！」

それに急かされるようにビーストは駆け出した。しかしどこまで行っても暗闇ばかりで、次第に心の中が恐怖と寂しさでいっぱいになっていった。それなのに、声ばかり

が大きくなってゆく。

「戦え……戦えっ!!戦うんだっ!!」

ビーストはハッと目を覚ますと、ガバツと起き上がった。すると背中がズキンと痛んだ。その痛みになぞくまりながらあたりを見回すと、見知らぬ建物の中だった。床には緑色の絨毯が敷かれ、部屋の真ん中に丸いテーブルと椅子があり、壁際にはヒト一人が入れるくらいの細長い機械のカプセルが置かれている。

するとテーブルと椅子の影がチロチロと揺らめき、耳が生えてフレンズの顔のようになつた。そして耳障りな声でしゃべり始めた

影「タバタンダ。タバタンダ。」

それからケラケラと笑い出した。ギョツとしていると、すぐ後ろからも同じ笑い声が出た。恐る恐る振り向くと、そこには自分の影が立っていた。真っ黒な顔に、亀裂のような笑みを浮かべた大きな口だけが白く光っている。

影「オマエガ、タバタンダア！」

ビースト「グワアアアッ!!!」

恐怖で胸が張り裂けそうになり、ビーストは大きな叫び声をあげた。

博士「何事ですっ!!?」

それを聞いて博士が飛んできた。ビーストはベッドの上で喚きながら両腕を振りまわしていたが、すぐに力尽きて仰向けに倒れ込むと、ひどく怯えた顔をしながら震えていた。

博士「大丈夫、何もいないのです！ここは研究所、お前が助けてくれたかばんのおうちなのです。

やはりお前は喋れないようですね。私の言葉は分かりますか？…ま、分からなくても良いのです。お前が優しいフレンドである事は、ハッキリしているのです。」

博士はビーストを刺激しないよう、できるだけ穏やかな声で話しかけた。するとビーストは、次第に落ち着きを取り戻した。

それを見て、博士は微笑を浮かべた。

博士「今はただ、休んでいれば良いのです。難しい事は、元気になってから考えるのです。…っと、助手が来たようですね。相手をしてるので、お前はゆっくり寝てると良いのです。」

そう言つて博士は部屋から出ていった。すると廊下から声が聞こえてきた。

助手「何事ですか？」

博士「心配ないのです。きつと怖い夢でもみたのです。」

ビーストは会話はできないが、言葉はある程度理解できた。それと仕草や雰囲気など



から、相手の気持ちを察することもできた。

どうやらあれは夢で、ここは敵のいない安全な所らしい。ビーストは大きく安堵の息を吐くと、再び眠り始めた。

●トラ×アウル＋LOVE↓トラブル

それから2日後、ようやくビーストは目を覚ました。身体を起こしてみても、もうどこも痛くない。どうやらゆっくり休んでいる間に傷は消え、すっかり元気になったようだ。

それからわきに目をやると、ベッドに突っ伏して眠っている博士がいた。そのあまりにも無防備な寝顔に面食らい、ビーストは博士をまじまじと見つめた。

ビースト『この子…、本当に私が怖くないのか…?』

するとそこへ、一足先に目覚めたかばんさんと助手がやってきた。2人は元気そうなビーストを見て、思わず顔をほころばせた。

かばん「…!!?よかった、目が覚めたんだね!ずっとお礼を言いたかったんだ、助けられてありがとう!」

助手「お前には、言葉で言い表せないくらい感謝しているのです。かばんを助けてくれて、ありがとうなのです。」

すると博士も目を覚ました。

博士「むにや…、ん?…:ピースト、起きたのですね!よかったです〜!」

そう言つて、博士はニコニコしながらピーストの手をきゅつと握つた。

その様子を見たピーストは困惑していた。なにしろこれまで笑顔を向けられた事はおろか、明るく笑つた事すらないのだ。それでもなんとか相手の気持ちに応えようと、見様見真似で顔に力を入れてみた。

そうしてでき上がったのは、まるでキバを剥き出して威嚇しているかのような、あまりにも不器用な笑みだった。しかし3人は特にそれを気にする事もなく、ピーストに笑顔を向けている。

博士「ふふつ、まだまだ練習が必要なのです。」

助手「笑顔は幸せを運んでくるのです。『過度な笑いに福が来る』、ですよ。」

かばん「ははは、すぐできるようになるよ。さあ、ご飯を食べてからお風呂に入ろう!」

こうして、朝食の後みんなで入浴する事となった。かばんさん達は毛皮を脱ぐと、のんびりと湯船に浸かった。お湯の温かさが、体の隅々にまで染み渡つてゆく。

かばん「はあ、気持ちいい〜。」

助手「極楽なのです〜。」

博士「ほう…。ほら、怖くないですよ、お前も入ると良いのです。」

ビーストは毛皮が脱げる事を初めて知った。それにお風呂を見たのも初めてだ。そのためしばらくの間警戒しながら周囲をウロウロしていたが、かばんさん達の気持ちよさそうな顔を見ているうちに考えが変わったらしく、やけくそ気味に毛皮を脱ぐと、意を決して飛び込んだ。

初めてのお風呂は、とても心地よいものだった。つるつるの肌がポカポカと温かいお湯に包まれて、心と体が溶けていった。しかしビーストはそのままのぼせて目を回してしまい、ぶくぶくと沈んでいった。かばんさん達は慌てて彼女を湯船から引っぱり出すと、しつかり体を拭いてやり、それから毛皮（ワイシャツとパンツ）をゆったりと着せてあげた。そして博士が彼女を居間のベッドに連れてゆき、ネクタイやベストなど残りの毛皮を床に置いた。

博士はグツタリしているビーストの額に、冷たい水で濡らしたタオルを乗せた。

博士「しつかりするので。誰しも最初は不安で、失敗するものなのです。大事なものは、それを繰り返さないよう学ぶ事なのですよ。」

するとビーストは、熱に浮かされたような目で博士を見た。そしておもむろに大きな手を伸ばすと、ギユツと抱き寄せた。

博士「ひゃっ!? た、食べないで……………?」

博士は驚いて思わず体を細くしたが、ビーストは彼女を両腕で優しく包むと、顔をこすり付けてきた。

博士「…心細かったんですね。よしよし。心配しなくても、私はお前のそばにいてやるですよ。」

そして博士は、微笑みながらビーストをぎゅつと抱きしめた。ぬくぬくの体と温かな羽毛がお互いを優しく包み込んでゆき、やがて2人は眠ってしまった。

そんな部屋の外では、かばんさんと助手がその様子を見守っていた。

かばん「…悲鳴がしたから来てみたけど、問題なさそうだね。」

助手「ええ、ひとまずビーストは博士に任せましょう。」

2人は小声で言葉を交わすと、そつとそこから離れた。

しばらくしてビーストは目を覚ました。するとすぐ目の前に、眠っている博士がいた。

自分を恐れず、こんなに近くまで来てくれたフレンズは初めてだった。ビーストは、しげしげとその寝顔を眺めた。

博士はすーすーと寝息を立てている。それに合わせて小さな肩が揺れていて、体からはお風呂上がりらしいいい匂いがする。大きな目には艶やかなまつ毛が生えていて、ふつく

らした頬は、ほんのりピンク色に染まっている。

そのままじつと見つめていると、可愛らしい唇がむにやむにやと動いて、大きな瞳がゆつくりと開いた。

博士「ふあ…、おはようなのです。気分はどうですか？こうしているとなんだか心がふわふわして、とつても気持ち良いですね。」

そう言つてにつこりと笑つた。

なんだか急に恥ずかしくなつてきて、ビーストは顔を真っ赤にしながらバツと起き上がった。するとゆつたりと着せられていた毛皮がずれ、胸元が露わになった。慌てて床に置いてあつた分までしっかりと着直すと、ベッドに腰掛けて大きなあくびをした。

博士は微笑みながらその様子を眺めていたが、彼女の後ろ姿を見て、毛並みがボサボサな事に気づいた。そしてブラシを持つてくると丁寧にブラッシングをし始めた。

ビースト『わあ…、気持ちいいな…』

これまたビーストには初めての体験だったが、とても心地よいものだった。そのまま目を細めながら博士に身を委ねていると、今まで笑つた事のないその顔にわずかな笑みが浮かびかけた。

しかし突如、頭の中に例の声が響き渡つた。

【戦えっ！】

ドクン……!

途端に心臓が高鳴り、全身の毛が逆立った。ビーストは弾かれたかのようにベッドから飛び出すと、空中で一回転して四つん這いで着地した。そして吹き飛ばされたブラシが床に転がった。

その突然の行動に、博士はびっくりした。

博士「えっ、どうしたのです?!? 痛かったのですか?!?」

ビーストは右手で頭を抱えながら苦悶の表情を浮かべると、唸り声を上げながら部屋をバタバタと駆け回った。そしてなだめようと近づいた博士を突き飛ばしてしまった。

博士「あつ……?!?!?」

ビースト『!!!』

ビーストは尻餅をついた博士を見て悲しそうな顔をした後、不意に窓から外に飛び出すと、そのままどこかへ走り去ってしまった。

あまりに急な出来事で、博士はビーストの跡を追う事もできず、ただ茫然としていた。博士「ビースト……、一体どうしたのですか……。」

そこへ、アライさんとフェネックが調査から帰ってきた。そして部屋に入ってくるなりこう叫んだ。

アライさん「大変なのだ……えーつと、とにかく大変なのだ!!?」

フェネック「キュルルって子の絵からフレンズそっくりなセルリアンが現れて、ホテ  
ルに向かったそうだよ！」

## ◎ それぞれの夜

重い足取りで研究所を後にしたキュルル達。中でもサーバルは悲しみのあまりろくに眠れなかったため、キュルル達の後ろをフラフラと危なっかしい足取りで歩いていた。

すると、キュルルの左腕のラツキーピーストがこう言った。

腕ラツキー「じやんぐるハ広イカラ、コノペーすダト次ノえりあノ入り口アタリデ日ガ暮レルヨ。」

キュルル「そつか…。」

カラカル「なら、今日はその辺りで早めに休みましょ。」

キュルル「そうだね、サーバルもそれでいい？」

キュルルとカラカルが振り返ると、サーバルは虚ろな表情をしながら弱々しい声で返事をした。

サーバル「…うん…。」

今の2人には、サーバルにかける言葉が見つからなかった。

そのまましばらく歩いてゆくと、茂みの向こうから声がした。



? 「やあ、キュルルさん達!」

するとガサガサという音とともにゴリラが現れた。

ゴリラ「昨日はありがとう。今もみんなで、キュルルさんが新しく作ってくれた紙相撲で遊んでたんだ。どうだい、ちよつと見ていかないかい?」

キュルル「あの…。」

カラカル「ゴメン、あたし達急いでるの。」

ゴリラ「そつか。早くおうちが見つかるといいね。」

すると向こうから、ゴリラを呼ぶ声があった。

ヒヨウ「おやぶーん、あんたの番やでー!」

イリエワニ「今度は負けんぞ!」

ゴリラ「おー、今行くよー! もう少し落ち着いたら、荒らされた広場をまた綺麗にして、運動会をやるつもりだよ。おうちが見つかったら、ぜひかばんさんと一緒に来てくれよ。じゃあねっ!」

そう言うのと、ゴリラは茂みの奥へと消えていった。キュルルは困惑した目でカラカルを見つめた。

キュルル「…どうしよう、教えてあげた方がいいのかな…。」

カラカル「ううん、まだそうと決まったわけじゃないわ!」

ゴリラと別れたキュルル達は、とぼとぼと歩き続けた。そして日が暮れ始めた頃、次のエリアの入り口が見えてきた。

カラカルはグツと伸びをした。

カラカル「さて…とっ！次はどんなとこなのかも気になるけど、それは明日のお楽しみにして、今日はこの辺りで休みましょっ！」

キュルル「そうだね。じゃあこの大きな木の根元で眠る事にしようか、ねえサーバル？」

サーバル「…ごめん、私は木の上で寝るよ。」

カラカル「そう…、落っこちないように気をつけなさいよ？」

サーバル「うん…。」

そう言うと、サーバルはのろのろと木の上へと登っていった。

それを見上げながら、キュルルが心配そうな顔をした。

キュルル「…サーバル、大丈夫かなあ…。」

カラカル「いいから、そつとしときなさい。」

キュルルはカラカルと一緒に、大きな木の根元に寄りかかった。そして目を閉じると、かばんさんの顔とやり取りが次々と浮かんできた。

「私は『希望の歌』って呼んでるんだ。」

「心配しないで、みんなと同じじゃなくてもいいんだ。」

「先に寝てて。後から来るから。」

キュルル『かばんさん……。』

そしてそれらが頭の中でぐるぐると回りだし、ぼやけていった。

昨日よく眠れなかったのと、今日の体の疲れもあつて、キュルルはすぐに眠ってしまった。

一方、サーバルは太い枝の上でうつ伏せになっていたが、眠る事ができないでいた。心も体もクタクタで、もう目を開けているのも辛いのに、悲しみが押し寄せてきて寝られない。まるで夜の暗闇全部が悲しみとなつて、体にのしかかっているようだ。それに押しつぶされそうになった時、すぐ下の枝からカラカルの声が出た。

カラカル「サーバル、起きてんでしよう？ちよつといい？」

サーバルはビクツと体を震わると、慌てて起き上がった。

サーバル「カラカル……。うん、いいよ。」

しかしカラカルは、サーバルのいる枝には飛び移らずにそのまま腰をおろすと、いつもの調子で話しかけた。

カラカル「昨日の夜は大変だったわよね……。今更だけど、セルリアンから助けてくれ

てありがと。」

サーバル「……うん……。」

カラカル「ところでアンタ、寝床を抜け出してどこ行つてたの？」

するとサーバルは、ボソリとこう答えた。

サーバル「……かばんさんと話してた。」

カラカル「だと思った。……でね、あたしずっと気になつてたんだけど、昔アンタと一緒にいたフレンズつて、もしかしてかばんさんだったの？」

サーバル「……分かんない。」

カラカル「……かばんさん、頭に羽を付けてたわよね。アンタの色は違うけど、形はそっくりだった。お話しして、なんか分かったの？」

サーバル「……、分かんない。」

なんとかサーバルを元気づけようと登つてきたカラカルだったが、どんなに考えても適切な話題もかける言葉も見つからない。だんだんいたたまれなくなつてきた。

カラカル「……ごめん、やっぱり今は一人になりたいわよね。」

そう言つてカラカルは枝から腰を上げると、そこから飛び降りようとした。するとサーバルの声がした。

サーバル「待つて！……カラカル、ちょっとでいいからそこにいて。」

カラカル「…うん、分かった。アンタが寝るまでここにいろわ。」  
サーバル「ごめんね、ありがとう。」

カラカルはもう一度枝に腰を下ろすと、太い幹に寄りかかつて夜空を見上げた。今夜は少し曇っていたが、しばらくすると雲が晴れ、大きな月が現れた。その光が、あたりをぼんやりと照らしてゆく。

カラカルは頭の後ろで手を組みながら、心の中で月に話しかけた。

カラカル『毎日毎日、飽きもせず登ってきては沈んでく…。アンタはそれが辛いとか辞めたいとか、思った事ないの？』

すると、上の枝からサーバルの寝息が聞こえてきた。

不意に、キュルルは目を覚ました。すると隣にいたはずのカラカルがいない。周りを見渡すと、すっかり暗くなっていた。

キュルル『きつとサーバルの所へ行つたんだ。』

空には月が出ていたが、ジャングルの木々がその光を遮っていた。もう一度木に寄り掛かり、真つ暗な闇を見つめながら、キュルルはかぼんさんの事を考えた。

キュルル『かぼんさん…。ここから消えちゃつたら、どこへ行くんだらう。こんなふうに暗くて静かで寂しいところに、ひとりぼっちでいなきやなくなるのかな…。そ

して僕や周りのみんなも、いつかはいなくなっちゃうのかな……。』

疑問ばかりが湧いてきて、いつまで経つても答えは出ない。そして考えれば考えるほど、どんどん怖くなってきて、とうとうキュルルは泣き出した。

キュルル「グスッ…、うえええ〜ん！」

すると木の上からカラカルが飛び降りてきた。そしてキュルルの前でかがむと、そつと彼の肩に右手を置いた。

カラカル「どうしたの、キュルル？」

キュルル「カラカル…つ、どうしてかばんさんは消えちゃったの？ どうしてずっと一緒にいられないの?!? 消えたらみんなどこへ行くのっ…?!?」

訳がわからなくなつて、キュルルは泣き喚いた。するとカラカルは、キュルルをぎゅつと抱きしめると穏やかな声で語り出した。

カラカル「あのねキュルル…、フレンズもヒトも、いつかは消えちゃうの。それがいつなのか、どこへ行くのかは誰にも分かんない。でもね…、だからみんな、今日を一生懸命生きてるの。」

カラカルの口から、今まで考えた事もなかった言葉がたくさん出てきた。それらは難しくあまりピンとこなかったが、キュルルの問いに真剣に向き合おうという気持ちは十分伝わってきた。その心とぬくもりに包まれて、キュルルは少し落ち着いた。

キュルル「いつものカラカルだ…。やっぱり強いんだね、凄いや！」  
カラカル「…強くなかないわっ!!？」

そう叫ぶと、カラカルはキュルルの手を掴んで自分の目元へと持つていった。すると暗闇で分からなかったが、そこがびっしりと濡れていた。彼女もまた、泣いていたのだ。

そしてカラカルは、少し声を震わせながら言葉が続けた。

カラカル「…あたしには、かばんさんの事をすぐに受け入れろだなんて、偉そうな事は言えない。どれだけ時間がかかったっていい、何度でも思い返して、悩んで、悲しんで…、そしてキュルルなりの答えを見つけて。」

キュルル「…うん、分かった。」

カラカル「心配しないで、あたしはずっとアンタのそばにいてあげるから。」

キュルル「ありがとうカラカル。ごめんね、泣いてるのに気づいてあげられなくて。」

カラカル「いいのよ。」

キュルル「サーバルは？」

カラカル「大丈夫、ようやくあの子も寝たわ。」

キュルル「そっか…、よかった…。」

その言葉で、やっとキュルルも安心する事ができた。

そうして2人は、ぴったりと寄り添いながら眠りについた。

サーバルは太い枝にうつ伏せになって眠っていた。

サーバル「待って…、待ってよ…。」

サーバルは夢を見ていた。

彼女は、広い草原を疾走するオフロードカーを懸命に追いかけていた。運転席からかばんさんの声がする。

「私はかばん、このパークガイドだよ。」

「旅に出ようと思うんだ。もし途中で君たちに会えたら、一緒に冒険したいな。」

かばんさんの乗る車はどんどん遠ざかってゆく。サーバルは必死に追いかけるが、目一杯右手を伸ばすと、悲鳴のような叫び声を上げた。

サーバル「行っちゃだめ！お願い、止まってええ！」

すると車が激しい光を放った。眩しさのあまり、サーバルは思わず手で顔を覆った。

「ごめんね…。けど…、君は生きて…！」

その言葉が終わると同時に、車は大爆発を起こした。指の間から、爆炎と真っ黒な煙が見える。そしてサーバルの目の前に、かばんさんの帽子がパサリと落ちてきた。

そして、そこから声がした。



「約束、だよ…。」

サーバル「イヤだ…、イヤだよかばんさん、かばんさあああん!!!」  
そして眠っているサーバルの目から、はらはらと涙が流れ落ちた。

サーバル「かばんさん…、行かないで…。」

何も言わない月だけが、その涙を穏やかな光で照らしていた。

## かけっこ編

## ● 衝突!

翌朝、キュルル達はゴツゴツとした岩山の並ぶ荒野を歩いてきた。周りは見渡す限りほぼ茶色の大地、剥き出しの地面と岩山の他には、木や草がまばらに生えているだけのただっぴろい所だ。そして一本の曲がりくねった道が延々と続いている。

相変わらずサーバルは元気がない。いつもなら真つ先に駆け出して先頭を歩いてゆくのだが、今はしよげながらとほとほとキュルル達の後ろをついてきている。

さすがに心配になったキュルルは、カラカルに耳打ちした。

キュルル「ねえカラカル、サーバル、大丈夫かな……。どうしたらいいの?」

カラカル「うん……。これ一発で元気になるつ、て言葉はないわ。ヘタに元気付けようとするのは絶対ダメ、こうゆう事は、本人が少しずつ気持ちの整理をしてゆくしかないの。」

……今のあんたもそうでしょ? 気になるだろうけど、しばらくそつとしいてあげて。」  
 キュルル「あ……。うん、分かった。難しい事聞いちゃってゴメン、カラカルだって辛いのに。」

カラカル「…まあ、平気じゃないわね…。そういえば、この辺りの絵もあるの？」  
キュルル「うん。色からすると、これだと思うんだけど…。」

そう言つて、キュルルが開いたスケッチブックのページには、茶色い背景に空、そして中央にゴチャつとした線の塊が描かれていた。

キュルル「この線、一体なんなんだろう？」

カラカル「フレンズ…には見えないわね。竜巻とか？」

すると警告音と共に、キュルルの左腕のラツキービーストがこう言つた。

腕ラツキー「注意、注意！ 凄イすびーどデ近ツイテクルふれんずガイルヨ。」

キュルル「え？」

ドドドドドド…。

何やら音が迫ってくる。するとキュルル達の後ろから、大量の土煙を巻き上げながら2人のフレンズが物凄い速さで向かってきた。

2人は寸前でキュルル達に気付きなんとか正面衝突は避けたが、1人はバランスを崩して派手に地面を転がった。

キュルル達は風圧に吹き飛ばされ尻餅をついた。やがて、あたりをもうもうと覆つていた土煙が晴れてきた。

サーバル「ナニ?!? 何が起きたの?!?」

カラカル「いきなり何!? 危ないじゃない!」

キュルル「ぷはー、ビックリしたあ…。」

それからキュルルは立ち上がり、うつ伏せに倒れているフレンズに駆け寄ると、心配そうに声をかけた。

キュルル「あのお、大丈夫ですか…?」

? 「不覚…、あいたたたた…。」

そう言つてそのフレンズは立ち上がった。

その子はオレンジと白の混じつたおかつぱのようなショートヘアで、とんがった耳をしていて、頭には曲がつた黒い2本の角が生えていて、手には薄手の黒い手袋をはめている。そして白い体操服の上にオレンジ色のジャージを羽織り、下はベージュ色のブルマと靴下、それと運動靴を履いている。

その子は体からパツパツと土を払うと、キュルルに向き直つた。

? 「やあ、すまない。怪我はないか?」

キュルル「大丈夫です。えくと、君は…?」

腕ラツキー「プロングホーンダネ。トツテモ足ガ速クテ、最高時速ハ90km。草食動物ノ中デ一番速インダ。」

最速と聞いて、キュルルは目を輝かせた。

キュルル「そうなの?!? 凄い…!」

? 「プロングホーン様く!!!」

空から、誰かの叫び声が近づいてくる。そしてキュルルが上を見上げると、1人の鳥のフレンズが、慌てた様子で舞い降りてきた。

その子は胸にB e e P!と書かれた、胴体部分が水色、腕部分が青色、首回りが黄色の半袖シャツを着ていて、下は灰色のスパッツに白いソックスと運動靴を履いていて、左手首に水色の腕輪をつけている。髪型は灰色のショートヘア、もみあげを白でふちどられた青いリボンで結んでいて、両耳の上に羽が付いていて、黒い前髪に7つの星形の模様がある。

腕ラッキー「アレハG(グレーター)・ロードランナーダネ。飛ブコトモデキルケド、走ルノガ得意デ時速40kmデ走レルンダ。」

キュルル「わあ、じゃああの子もかけっこが速いんだね!」

その子は大慌てでプロングホーンに駆け寄った。

G「プロングホーン様、大丈夫ですか?!?」

プロング「ああ、心配ない。ちよつと転んだだけだ。」

? 「アーハッハッハ!!?」

すると先程走り去っていったフレンズが、高笑いしながらやってきた。その子は黄色

のロングヘアート、先の尖った小さな耳をしていて、額には鳥の顔を正面から見たような模様がある。黄色い瞳に吊り上がった目をしていて、よく見ると上瞼に紫のアイシャドウがかかっている。服装は半袖の白いシャツと黄色地に豹柄模様のアームカバー、ネクタイ、ミニスカート、ニーソックスと白い靴を履いていて、お尻からは斑点と縞のついたの長い尻尾が生えている。

腕ラツキー「アレハチーター。最高時速ハ120km、地上最速ノふれんずダヨ。」

キュルル「地上最速! プロングホーンさんより速いんだね!」

チーター「これで分かったでしょ? 地上最速はこの私、チーター様よっ! これに懲りたら、もうつきまとわないでちようだい!」

G「待てよ! 今のはナシだ、もう一回!」

チーター「約束を忘れたわけじゃないわよねえ、腰巾着? ま、どうしても言うんなら考えてあげなくもないわ。じゃあね。」

そう言うと、チーターは派手に土煙を巻き上げながら、あつという間に走り去ってしまった。

ロードランナーは拳を握りしめ、ギリギリと歯軋りをした。

G「くっそう…あんにやろう…!」

プロング「やめるんだロードランナー。」

G 「だって、プロンググホーン様……！」

するとプロンググホーンはロードランナーの顔を両手でそっと包んだ。

プロング 「約束は約束だ。こんな結果になったのは残念だが、受け入れねばならん。」  
それはまるで、ロードランナーだけでなく自分にも言い聞かせているかのようだった。冷静な口調ながらも、言葉の端々から無念さが滲み出ている。そして体を震わせながらうつつむいているロードランナーをじっと見つめた後、彼女は数歩後ずさって悲しげな笑みを浮かべた。

プロング 「私はちょっと向こうで一休みしてくるよ、くれぐれも気に病むなよ！」

そう言って、プロンググホーンは岩山の向こうへと走り去っていった。ロードランナーは何か言いたそうにその後ろ姿を見つめていたが、プロンググホーンの姿が見えなくなつた途端、ギロツツもの凄いい目で睨みながら、キュルル達に食つてかかった。

G 「お・ま・え・らあつ…、なんて事してくれたんだ！せつかくの…、せつかくの2人の勝負を邪魔するなんて!!？どうしてくれるんだ…あ？」

顔を真っ赤にしながら大声で怒鳴っていたロードランナーが、サーバルの様子に気が付いて固まった。彼女の目から、大粒の涙がポロポロとこぼれている。

サーバル 「…ごめんなさいっ…！」

そう叫ぶと、サーバルは突然逃げ出した。

それを見たカラカルは、さっとキュルルを抱き抱えた。

カラカル「ゴメン、あの子を追っかけなきゃならないから！待ちなさい、サーバル！」  
そして慌ててサーバルを追いかけた。

呆気にとられたロードランナーはしばらくそのまま固まっていたが、ハツと我に返ると怒鳴りながら3人の跡を追いかけた。

G「まっ、待ちやがれ！まだ話は終わってないぞっ!!？」

● 最速の2人

サーバルは道を逸れた先の岩陰でしゃがみ込んでいた。目から涙が溢れ出し、全身の震えが止まらない。荒い息をしながら両腕で体を抱きしめていると、キュルルを抱えたカラカルがやってきた。

カラカル「大丈夫？ガツクリきてたところにああ責められたんじゃあ、ビックリするわよね。」

そう言つて背中をさすつてやると、徐々にサーバルは落ち着きを取り戻した。

サーバル「…はあはあ…。ありがとう。もう大丈夫だよ…。」

しかしまだ、指先や肩が小刻みに震えている。キュルルは心配そうにサーバルを見つめた。



キュルル『あんなに元気だったサーバルが……。やっぱり相当辛いんだな……。』  
そこへ、ロードランナーが息を切らしながらやってきた。

G「ゼエゼエ……お前ら……はええなあ……。』  
するとカラカルが立ちはだかった。

カラカル「文句なら、あたしに言つて！」

G「そうじゃないっ……、とにかく話を聞いてくれえっ……！」

そしてロードランナーは、息を整えてからキュルル達に語り始めた。

もともとチーターは、足の速さを誇るフレンズ達の英雄的存在だったそうだ。抜群の身体能力と圧倒的なスピード、それに常日頃からトレーニングも欠かさない努力家だった。だが高飛車な性格で、すぐ天狗になって高慢な態度をとるのが玉にきずだった。その鼻を明かしてやろうと、ロードランナーは何度もチーターに挑んだが、その度に苦渋を舐めさせられた。

そんなチーターの前に、突如現れたのがプロングホーンだった。スピードはやや劣るものの、その驚異的な持久力で、それまで無敵だったチーターを完膚なきまでに打ちまかした。

彼女の追い求めるのはただ速さのみ、勝敗や名声など全く気に留めなかった。ロード

ランナーはそんなプロングホーンに惚れ込み、常にそばについて回るようになった。

一方プライドの高いチーターは、雪辱を晴らすためプロングホーンに何度も勝負を挑んできた。その度に彼女は打ち負かされたが、競い合う事で2人の速さはどんどん磨かれていった。しかしあくまで勝敗に固執するチーターは、次第に勝負をしたがらなくなってしまうた。

最近では、ロードランナーがなだめすかしたり煽ったりして、なんとか勝負をしてもらっていたそうだ。そして昨日、とうとうチーターはこんな事を言い出した。

チーター「あーもう！いいわ、明日勝負してあげる！ただし私が勝ったら、もうつきまとわないで！」

G「…それが今回の勝負の約束だったんだ。でもさ、私、嫌な予感がしたんだ。久しぶりの勝負だったのに、今日のプロングホーン様、てんで元気がなくてさ。」

心配したロードランナーが勝負の中止を勧めたが、プロングホーンはかぶりを振った。

プロング「相手が同意した時点で、もう勝負は始まっているんだ。どんな状態であれ、スタートラインに立ったのなら、もう降りられない。そして全力を出す…、それが相手に対する礼儀だ。」

そして勝負が始まったが、プロングホーンの走りは精彩を欠いていた。そして両者が並んで走っていた時に、たまたま居合わせたキュルル達とかち合ったのだという。

G「…こんなのが最後の勝負だって思ったら、私もうやるせなくて…。それで怒鳴っちゃまったんだ。ゴメン…。」

そう言つて、ロードランナーは頭を下げた。先程の威勢は何処へやら、しょんぼりとうなだれている。

そして、キュルル達も口々に謝罪の言葉を述べた。

サーバル「私たちこそ、邪魔しちやつてごめんね。」

カラカル「これじゃあ、怒鳴りたくなるのもムリないわね。」

キュルル「悪いことしちやつた…。それにしても、さっきのラツキーの話だと、チーターさんの方が速いんだよね？なのはどうしてこう一方的な結果になっちゃうの？」

腕ラツキー「チーターハ持久力ガナクテ、最高速度デハ10秒チョットシカ走レナインダヨ。一方プロングホーンハ、5分以上走り続ケラレルンダ。」

キュルル「そんなに…！じゃあ走る距離が長くなるほど、チーターさん不利じゃないか。」

G「え？やっぱりどこがおかしかったのか？私たちもなんつか引つかかつて、勝負の度に走る場所を変えてみたりしてただけど…。」

キュルル「それじゃちよつと違うんだよね…。ラッキー、なんとか公平にならない？何か力になれるなら、僕達も協力するよ。」

腕ラッキー「計算中…。計算中…。アクマデでーたダケデ出シタ答エダケド、コンナ方法ガアルヨ。」

● 走つてみなけりや分らない

その頃チーターは、一人気ままに走っていた。もう邪魔が入る事はない、そう考えてしばらくは清々しい気分でいられたのだが、次第に心の中がモヤモヤしてきた。

チーター『今日のあいつ、ちつとも楽しそうじゃなかったな。いつもはもつと、こう…。』

ふとチーターは立ち止まった。すると、知らないうちに平べったい岩の前に来ていた。ここにはいつもプロングホーンがいて、かつては勝負のために足繁く通ったものだった。

チーター『落ち着いて考えてみると、今日は走りも全っ然大した事なかった。…まさか、手を抜いた?!? いや、あいつがそんな事するわけが…。ひよつとして、具合でも悪かったの?』

…なによ、こんな勝利で浮かれてたなんて、私…。バカみたいじゃない!!?』

そこへ、空からロードランナーが舞い降りてきた。

G 「よ！探したぜ。実はちよつと話があつてよ……。」

チーター「ちよつどいいわ！腰巾着、もう一度あいつと勝負させなさい！」

G 「そう言うと思つた……つて、えええつ……？」

どうせ一目会うなり、追い払われるに違いない……、けど何を言われようとも、こいつを必ずプロングホーン様の下に連れてゆく、そのためならなんだつてやつてやる！と意気込んでいたロードランナーは、思いがけないチーターの言葉を聞いて素つ頓狂な叫び声を上げた。

一方、プロングホーンは一本の木の下で横になっていた。

プロング 『はあ……、なんなんだこの足の重さは……。せつかくの勝負だったというのに不甲斐ない……。』

片手を額に乗せながらそんな事を考えているうちに、いつの間にか寝入ってしまった。

それからしばらくすると、プロングホーンの左の靴が黒く変色し蠢いた。そして履き口を大きく広げると、彼女を飲み込もうと迫ってきた。

しかし異様な気配を感じ取ったプロングホーンは即座に目を覚ますと、とつさに転

がってそれをかわした。

プロング「なっ…、セルリアンか!?!」

すぐさまプロングホーンは起き上がり、右手にけものプラズムを集中させた。すると輝きの中から二股の槍が現れた。彼女はそれをしっかりと握りしめると、セルリアンに向かつてゆき、何度も突きを放った。

するとそのセルリアンは、するすると縮んでゆき、元の彼女の靴の大きさととなった。靴のタンの部分に、ギロギロした目玉がついている。そしてなんと、そいつは次々と繰り出される彼女の攻撃を、ヒラヒラとかわしていった。

プロング「このっ…! それほどの速さを持つているのなら、コソコソしないで堂々と勝負しろ!」

セルリアン? 「ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。」

プロング「なにつ、お前しやべれるのか!?!」

すると、その靴型の陰から小さな緑色のセルリアンが現れた。そいつは暗い声で話した。

緑セルリアン「全く単純だねキミは…。ボクはね、輝きを取り込めば、どんな力でもこの通り簡単に再現する事ができる。キミが言ったように振る舞えば、どのフレんズよりも優れた存在となって、パークの頂点に君臨することもできるだろう。それだけの力

はあるからね。

ぷ…ククツ…、でもね、そんな勝利には興味を持たなくなってしまうたのさ…ボクは…。」

プロング「なんだとっ…?!?」

緑セルリアン「羽をもがれた蝶のように、突然力を奪われて狼狽しているフレンドズを見るのは最高さ…。一途に努力を重ねてきたヤツであればあるほど、堕ちた時の表情が楽しめるっ…!一度これを味わってしまうと、真つ当な勝負なんて馬鹿らしくなってしまうんだよ…。」

「そんなヤツをスウっと…、取り込んで動物に戻してやった時、心の底から思えるんだよねえ…。ボクはセルリアンなんだっ…てね、クククツ!」

それを聞いたプロングホーンは、槍を両手で握りしめると、思い切り地面を蹴って真つ直ぐ靴型に向かっていった。

緑セルリアン「そんな単純明快（シンプル）な動きじゃあ、ボクらを捕まえられないぞっ!」

靴型がその一撃をかわそうと身構えていると、彼女は突然急ブレーキをかけた。それによつて大量の砂埃が舞い上がり、セルリアンを覆った。そして右手をギュツと捻ると、槍の先端がセルリアンに向かって勢いよく飛び出した。

緑セルリアン「にやにや!?」

さしものセルリアンも面食らい、それをかわしきれずに木にはりつけにされ、動きを封じられてしまった。すかさずプロングホーンは間合いを詰めると、体を一回転させる勢いで思い切り靴型を蹴り上げた。

ドギヤツ!!!

緑セルリアン「ぐうっはつがあゝ!!!」

稲妻のような蹴りは緑セルリアンをも捉えた。そして上空に吹き飛ばされた靴型は、空中で粉々になった。すると取り込まれていた輝きが、プロングホーンに戻ってきた。

プロング「体の不調は、セルリアンに取り憑かれていたためか…。自分の事だというのに、気づかないとは情けない…。」

さつきまでの体の重さがウソのように消えた。軽く足踏みを試みたが、これならすぐにも全力で走る事ができそうだ。しかし…。

プロング「チーターとの約束があるし、どうしたものかな…。」

彼女が腕組みをしながら頭を悩ませていると、背後から声があった。

G「プロングホーン様〜!」

振り返ると、ロードランナーとキュルル達、そして仁王立ちしたチーターがいた。彼女はプロングホーンを指さすところ叫んだ。



チーター「もう一回勝負してあげるわ！ありがたく思いなさいっ！」

## ◎ 位置について!

キュルル達は、腕ラツキーの指定した場所にやってきた。ここはヒトがいた時代サーキット場として使われていた所だが、長い時の流れとともにかつての道路は失われ、今では岩の上のうちすらと跡が残っているだけであった。

そこに止められていた一台のパークのスタツフカーの前で、キュルルがみんなにかけっこの説明をした。

キュルル「それでは改めてルールの説明をします。今回はカラカル、サーバル、チーターさんと、ロードランナーさん、プロングホーンさんの二つのチームに分かれてかけっこをしたいと思います。それぞれ決められた位置に立って、この木の棒を渡されたら、それをしっかりと持って走ってください。」

そして地面に引かれた線を指差した。

キュルル「ここからスタートして、このコースを一周して、より早くここまで戻ってきた方の勝ちとします。」

僕はラツキーの運転するこの車で追いかけます。走り終わったらこれに乗ってください。歩かなくても応援ができます。」

プロング「そちらが3人、こちらが2人…、こんなやり方もあるのか、興味深いな…。」  
チーターは腰に手を当て、そつぽを向いている。

チーター「私一人でも全つ然問題ないんだけど、この子達も一緒に走りたいうつて言うから仕方なくよ！」

素直に対等な勝負方法が見つかった、とか言い方はあるのに、これがプライドの厄介なところだろう。

プロング『…なるほど、こうして体力のバランスをとっているのだな…。』

それがチーターの強がりである事はすぐに分かったが、プロングホーンはあえて口に出さずにこう言った。

プロング「面白い。チーター、いい勝負ができそうじゃないか！」

プロングホーンがニヤリと笑った。その目には闘志がみなぎっている。先程とは打って変わってとても楽しそうだ。

チーター「元氣そうね…。ふん、やめるんなら今のうちよ。」

プロング「ワクワクしてきたぞ！それと…。」

チーター「？」

プロング「また一緒に走れて嬉しいぞ、ありがとう！」

そう言つて彼女は、弾けるような満面の笑みを浮かべた。するとチーターは、顔を

真つ赤にしながら叫んだ。

チーター「べつ、べつにあんたのためじゃないわっ!このままじゃ納得いかないだけ…、もう一度勝つて、私が地上最速だってハッキリさせてやるんだからっ!!?」

キュルル「それでは、みんなそれぞれ、自分の位置についてくださいー!」

このキュルルの合図で、第一走者であるカラカルとロードランナー以外のフレンズは移動を始めた。そして少しうつつむきながらそこへと向かうサーバルに、みんなが声をかけた。

チーター「さつきからなにしょげてるの?下ばかり見てたら走れないわよ!」

プロング「うむ!昨日は今日を走る糧、今日は明日への道だ。振り向いてばかりいないで走り出せ!」

G「終わってから『本気じゃなかったら』とは言わせないぜ!」

カラカル「サーバル、気持ちは分かるけど、ここは一旦かけっこに集中して!」

サーバル『スタートラインに立ったら、全力で…。』

サーバルは、プロングホーンが言っていた言葉を思い出した。参加するのなら、いい加減な気持ちで臨むわけにはいかない。ひとまずかけっこが終わるまで、気持ちを切り替える事にした。

● よーい、スタート!!?

キュルルは車に乗り込むと、双眼鏡でみんなの位置を確認した。そして第一走者の2人にこう呼びかけた。

キュルル「準備できたみたい。そろそろ始めるよ!」

カラカル「はあ…、あの子、大丈夫かなあ。」

どこか上の空なカラカルの隣で、ロードランナーがかかたでトントんと地面を叩いた。

G「なあ、協力してくれてありがとな。それと、お前の速さは認めるけどさ、よそ見してたら負けるぞえ?」

それを聞いたカラカルは、両手で頬をパンツと叩くと、気合を入れ直した。

カラカル「んっ。…誰に向かって言ってるの?絶対に負けないわ!」

キュルル「それじゃあいくよ2人とも。よーい…、スタート!」

キュルルの合図と同時に、2人は猛然と駆け出した。ロードランナーはスタートこそ速かったものの、最高時速80kmを誇るカラカルのダッシュに、あつという間に追い抜かれてしまった。

G「ひよー、やつぱはっええなあ!けど今は、ちよつとでも早くプロングホーン様に

棒を渡すのが、私の役割だっ!!?」

そしてニツと笑ってスピードを上げた。それを見たキュルルは、車に揺られながらこう呟いた。

キュルル「うわあ…、2人とも凄いや…。」

カラカルは息を弾ませながら、プロングホーンの隣を駆け抜けた。抜きざまに顔を見ると、彼女は腕組みをしたまま微動だにせず、わずかに笑みを浮かべながら真つ直ぐ前だけを見ていた。

カラカル『こつちをチラツとも見ようとしない…、凄い集中力と自信、厄介ね。』

次の走者であるサーバルが目の前にいる。ついフツと気持ちちが緩んだ次の瞬間、背後から凄まじい気が迫ってきて、カラカルはゾクツと体を震わせた。

ロードランナーから棒を受け取ったプロングホーンが、驚異的なスピードで追い上げてきたのだ。その威圧感は、朝危うくぶつかりそうになった時を遥かに凌駕していた。

カラカルの全身の毛が逆立った。そして死に物狂いでスパートをかけると、サーバルに棒を託した。

カラカル「お願いっ!!?」

サーバル「任せてっ!!?」

そう言っつて、サーバルが駆け出した。

そのすぐ後に、プロングホーンがカラカルの横を疾風のように駆け抜けていった。カラカル「なにあれ…、ホントに今朝と同じフレンズなの…？」

サーバル「みやみやみやみやみやみや…！」

サーバルは全力で走っていたが、後ろから地鳴りのような音が迫ってきた。振り向くと、プロングホーンが鬼のような形相で追いつがってきている。

サーバルは動揺し、すっかりペースを乱されワタワタと走り出した。そして息が上がつて足が重くなってきたところで、あつという間に抜かれてしまった。

その時、プロングホーンが振り向いて、サーバルに笑顔を向けた。額には汗がにじんでいたが、爽やかで清々しい、まるで「楽しかった、また走ろうな！」と言っているかのような顔だった。

サーバルはへたばりながらもこう思った。

サーバル『ふえく、めつちや楽しそうく。』

プロングホーンはサーバルを抜き去ると、さらにスピードを上げた。そして一陣の暴風となって、不敵な笑みを浮かべながらチーターの横を駆け抜けた。

車の運転席からその様子を双眼鏡で見ていたキュルルは焦った。

キュルル「いけない…、これじゃチーターさんが追いつけなくなっちゃう…！」

カラカル「サーバル！もう少しよ、しっかり！」

後部座席のカラカルも、声援を送りながら心配そうな顔をしている。そしてキュルルの隣に乗っていたロードランナーが叫んだ。

G 「頑張ってください、プロングホーン様ー!!?」

トクン…、トクン…。

次第に小さくなってゆくプロングホーンの背中を見つめながら、チーターの胸は高鳴っていた。いつぶりだろう、こんな気持ちになったのは。

思えば初めて負かされたあの日から、チーターはずっとあの背中を追い続けてきた。勝負を挑み続けていた頃は、悔しくもあつたがとても楽しかった。

しかしプライドから勝敗のみに目がいくようになって、楽しさは消えてしまい、ただいたずらに走るだけとなった。プロングホーンも何か感じるものがあつたのだろう、いつの間にか、さつきサーバルに向けたような笑顔を見せなくなっていた。

そうなるともう張り合いもなくなつて、勝負を挑む気持ちも失せてしまい、時折投げやりな感じで走るのみとなつてしまった。

チーターは、自嘲めいたわずかな笑みを浮かべた。

チーター『はは…、なーんだ…。勝負がつまらなくなつたんじゃない、私が、つまらなくなつてたんだ…!』

するとそこへ、ヘロヘロのサーバルがやってきた。



サーバル「ごめ…、お待た…ふえっ!!?」  
棒を手渡した瞬間、ゴツ!!?という風の音と共にチーターの姿が消えた。

チーターは目にも止まらぬ速さで駆け出すと、あつという間にプロングホーンに追いついた。その顔は、歓喜で輝いている。

チーター「コレよコレ! 思いつきり走るの、たーのしー!!!」

プロング「きたかチーター! ハハハ、やはりお前とのかけっこは血がたぎるな!」

チーター「あーもー、私もそうよ! シヤクだけど認めてあげる、私はあるほど長く走れない! けど今、みんなが繋いでくれた好機(チャンス)! ここであんたに勝ってスッキリしてやるんだから!」

プロング「上等だ! それでこそ我が好敵手(ライバル)にして親友(とも)!!?」

チーター「それやめて!!?」

そして競い合う2人の体が輝きに包まれ、さらに加速した。

キュルル「ええーっ、なんで!!?」

腕ラツキー「アレハ共鳴(ハーモニー)ダヨ! ふれんず同士ノ思いガーツニナル事デ、サラナル大キナチからヲ生ンデイルンダ!」

キュルル「カラカルとサーバルが協力してセルリアンを倒してた時の輝きも、この力だったのか…!」

G 「ウオオ、いっけープロングホーン様！」

まるで閃光のように駆け続ける2人の前に、ついにゴールが見えてきた。残りあと3メートル、2メートル、1メートル…、そして、ほんのわずかの差で先にゴールラインを踏んだのは…！

キユルル 「チーターさんだああ!!?」

サーバル 「やったああ!!?」

カラカル 「やるじゃない!!?」

G 「ちくしょう!けど私は、こんな2人をずっと見たかったんだよオオ!!?」

そして4人は車の中で抱き合い、お互いの健闘を称え合った。

### ● 襲撃

一方全てを出し尽くした2人は、並んで大の字に寝っ転がっていた。

チーター 「ハアハア…、ま、ざっとこんなモノよ…。」

プロング 「フウフウ…、チーター、今日は完敗だ…、だが明日の私は、今日よりも一歩速くなるぞ！」

チーター 「なら私は、二歩速くなってやるわ！」

プロング 「そいつは楽しみだ…、フフフ…、ハハハハッ。」

チーター「アハハハッ！」

そして互いに手を伸ばすと、拳の先をコツンとぶっつけ合った。

ゴゴゴゴッ！

すると突然、何か大きなものが、凄いスピードで近づいてくる音がした。2人がそちらを見ると、地面を削りながらトラクター型セルリアンが迫ってきていた。まるで巨大なヘッドランプのような一つ目が、2人を睨みつけている。

しかし今の2人には、あれから逃れるだけの体力が残されていないかった。いくら踏ん張っても、全く足が動かない。

チーター「セルリアンっ……!?このままじゃ潰される……！」

プロング「ぐくっ……！」

するとセルリアンから声が出た。一つ目の上に、緑色の小さなセルリアンが乗っかっている。

緑セルリアン「待ってたぜエ……へたばる時をよお……！」

プロング「この声はっ……!あいつ、消えてなかったのか……?」

緑セルリアン「このボクをコケにしやがってえ……!取り込むなんて生ぬるい、ぐしゃぐしゃのペシヤンコにしてやるぜエ!今度は仲良くかけっこしながら、あの世へ行くんだなあ……！」

するとそこへサーバルが駆け込んできた。そしてトラクター型の運転席に飛び込むと、ハンドルを殴りつけ、思い切り右に切った。それにより、それまで直進してきたトラクター型が右に外れ、左側の車輪が浮き上がった。

緑セルリアン「ぬぁにいいいっ!?!?」

轟音を立てながら、巨大なタイヤが倒れている2人の頭スレスレを通過していった。

そしてキュルルの運転するスタッフカーが、猛スピードで突っ込んできた。

腕ラツキー「キケン、キケン!」

キュルル「いいからあいつまで誘導して!」

ドツカアアア!

緑セルリアン「うわあああああ!!?」

スタッフカーがトラクター型の左側に激しく衝突した。車は横転し、トラクター型はもの見事にひっくり返った。そして裏側の面にあつた石が露わになった。

そして上空から、カラカルを抱えたロードランナーが石めがけて急降下してきた。

G「決めてくれ!誰かを抱えて飛ぶのはこれが限界なんだっ…!」

カラカル「言われるまでもないわっ!」

カラカルは爪にありつた力の力を込めると、十分石を引きつけてから、思いつき振り下ろした。また運転席から飛び出したサーバルも、カラカルと同時に爪を叩き込ん

だ。

サーバル&カラカル「サバンナX（クロス）ツ!!?」

激しいX字の輝きと共に石が砕け、トラクター型が木っ端微塵に弾け飛んだ。そして緑セルリアンは、またもや吹き飛ばされてしまった。

緑セルリアン「くっそ〜！だがもうすぐだ…、もうすぐお前らは地獄を見ることになる！せいぜいそれまで楽しんでおくんだなあ〜…」

誰にも聞こえない捨て台詞を残して、緑セルリアンはどこかへ飛んでいった。

横転したスタツフカーの運転席から、キュルルはなんとか這い出した。

キュルル「いたたたた…。みんな、大丈夫？」

しかしそれに応えられるものはいなかった。みんなくたびれ果て、仲良く気絶してしまつたのだ。

### ● 別れ道

それからしばらくして…。

ようやくみんな目を覚まし、お互いの無事を確認したり、お札を言い合ったりした。

サーバル「みんな無事でよかった。そういえばさっきのセルリアン、変な形してたね。」

G「同じ形のヤツなら見たことあるぞ。」

ロードランナーについて行くと、その言葉通り同じ形をしたトラクターがあった。正面には動物の顔を模した装飾が施されていて、後ろには牽引式のトレーラーが付いている。そしてキュルルが運転席に乗り込むと、腕のラツキービーストがこう言った。

腕ラツキー「運転席ノばねるニ僕ヲカザシテミテ。」

キュルルが言われた通りにすると、トラクターのエンジンがかかった。するとチーター達が話しかけてきた。

チーター「ねえあなた達、一回だけじゃ物足りないでしょ? 今度はいつ勝負する?」

ブロング「私達なら今すぐでも構わないぞ。」

キュルル「ごめんね、僕達、おうちを探さなきゃならないんだ。」

キュルルはこれまでの事を説明した。しかしチーター達も、キュルルが言うようなおうちに心当たりはないそうだ。そしてまた旅を続けるため、チーター達とはここでお別れする事となった。

チーター「それじゃあね。あと、あの…、その…。」

面と向かつてお礼を言うことに慣れていないためチーターが言い淀んでいると、隣のブロングホーンがこう言った。

ブロング「いろいろ世話になったな、ありがとう!」

チーター「それ私のセリフ〜！」

G「ホント、感謝してるぜ！」

キュルル「ううん、元はと言えば、僕たちが邪魔しちやったからだし。それに凄い勝負だったよ、これ見て！」

そう言つて、キュルルはロードランナーに絵を手渡した。そこには荒野で競争しているプロングホーンとチーターが描かれていた。

プロング「おお、我等か。」

チーター「素敵じゃない…つてちよつと待つて、なんでプロングホーンが前にいるのよ〜！」

チーターにとって、プロングホーンが左側に描かれているのが気に食わなかったらしい。

カラカル「そつか、あの線つてこの2人だったのね。」

キュルル「うん、速く動くものつてああ見えるからね。さっきの勝負を見て気付いたんだ。」

G「…なあおい、私は？えーつと、あれ？」

絵をしげしげと見つめながらあからさまに動揺しているロードランナーを見て、キュルルが得意げな顔をした。

キュルル「絵をお日様にかざしてみて!」

言われた通りにロードランナーが絵を掲げてじっとしていると、2人の隣で走るサーバル、その後ろから車で追いかけるキュルル、そしてカラカルを抱えながら空を飛んでいるロードランナーの絵が浮かび上がってきた。

キュルル「面白いでしょ。お日様に当たてると、描いた絵が出てくるペンを使っただ。」

G「なんだよつ、びつくりさせやがってえ!」

そうしてみんなで笑い合ったあと、3人は走り去っていった。そしてキュルル達も、トラクターに乗って出発した。

サーバル「元気な3人だったね。」

するとトレーラーに腰掛けていたカラカルが、屋根に座っているサーバルをみあげた。

カラカル「あんたも少し元気になったみたいでよかったじゃない。」

サーバル「うん、心配かけてごめんね。」

腕ラツキー「コレニ記録サレテイル次ノ目的地マデ、自動デ運転デキルヨ。安全運転デ行クカラ、ユツクリシテイヨ。」

キュルル「そう、なん、だ…。」



トラクターの程よい揺れにお日様の光、さらにかげつこでの疲れもあり、キュルルの  
瞼はすでに重くなっていて、もうラツキーの言葉に反応する気力もなかった。

キュルル『サーバル、元気が出てきてよかった。…そういえば、今頃ビーストはどこ  
でなにをしているんだろう…。』

そしてキュルルは運転席で眠り始めた。

## イエイ又編

### ● おかえりなさい!

キュルル達3人は、トラクターに揺られていた。すると、キュルルの腕のラツキーピーストがこう言った。

腕ラツキー「トラクターノ電池ガ、ナクナリソウダヨ。」

キュルル「電池つて?」

腕ラツキー「トラクターノゴハンダヨ。コレガナクナルト動ケナインダ。コノ先ニ充電<sub>デ</sub>キル場所ガアルンダケド…。」

するとトラクターが止まり、ガツクンと揺れた。牽引されていたトレイラーに座っていたカラカルは、はずみで後ろ向きにすつ転び、トレイラーの底にゴン!と頭をぶつけた。

腕ラツキー「アワワワワ。」

カラカル「あたたたた…。」

キュルル「大丈夫っ?!?」

そしてサーバルが屋根から飛び降りてきた。

サーバル「なにになにー、疲れちゃったの？押せばいいのかな？」  
キュルル「え？ど、どうしよう。」

すると、トラクターの鼻の部分から電池が飛び出してきた。

腕ラツキー「コレガ電池ダヨ。持ッテイッテ。コノ先ノ施設デ充電ガデキルヨ。」

電池はサーバルが運ぶこととなった。そこからしばらく歩くと白い石でできたゲートが見えてきて、その向こうには動物の顔を模した形の家々が並んでいた。

キュルル「施設ってこれ？」

腕ラツキー「モウ少シ進ンダ所ダヨ。」

ゲートをくぐって歩いてゆくと、熊の顔をした家に、一人のフレンズズの姿があった。その子は全身薄い灰色だが、ところどころ白い模様がある。少し吊り上がった目は、右が水色で左が黄金色のオッドアイ、ピンと尖った耳にシヨートヘア、袖を捲ったブレザーに短いスカートをはいている。

その子はお庭の花壇に小さなジョウロで水をやっていたが、キュルル達に気がつくと持っていたジョウロを取り落とした。そして、それが地面にぶつかる前にキュルルに飛びついてきた。

？「おかえりなさい！会いたかったあ〜!!!ああ〜、懐かしいヒトの匂い！この日をどんなに待っていたかあ〜!!」

いきなり押し倒されたキュルルは慌てふためいた。

キュルル「ちよ、ちよつと待って、君だれっ!?!」

イエイヌ「私は、イエイヌです! ヒトに会えるのをずーっと待ってたんです!」

イエイヌと名乗ったフレンズは、そのまま全身を喜びで震わせながらキュルルをガツチリと抱きしめている。事情はさっぱり飲み込めないが、えらい勢いだ。

するとカラカルが、両手でイエイヌの首根っこを捕まえてどうにかキュルルから引き剥がした。

カラカル「よく分かんないけどつ、ちよつと、落ち着き、なさい、よっ!」

イエイヌ「ふええ、もうおしまいですかあ? いやだあく!」

イエイヌは手をバタつかせながら、懸命に踏ん張っている。

そしてサーバルがキュルルを助け起こした。

サーバル「だいじょうぶ?」

キュルル「うん、びつくりしただけ。」

それからキュルルは、ジタバタしているイエイヌに挨拶をした。

キュルル「僕はキュルル。おうちを探して、サバンナからここまで来たんだよ。」

イエイヌ「おうちを…、なら、ここがあなたのおうちです!」

自己紹介を済ませると、3人はイエイヌのおうちに招かれた。その中には、テーブル

や食器棚など、かつてヒトが使っていたであろう家具がたくさん置かれていた。

壁には額縁に入れられた一枚の絵が飾られていた。パークのゲートの前で、ヒトとフレンズが笑いながら並んでいる。その中に、キュルルとよく似たヒトが描かれていた。

イエイヌ「さあみなさん、お疲れでしょう、ゆつくりしてくださいね。」

そう言うのと、イエイヌはホットプレートでヤカンにお湯を沸かし、カップに温かいお茶を淹れるとみんなに振舞った。

一口飲んでみると、爽やかな味と香りが口いっぱい広がった。

キュルル「わあ…、とっても美味しいよ！」

イエイヌ「喜んで頂けて嬉しいです！」

サーバルは、カップの横に置かれていた細長いものをつまみ上げた。

サーバル「このヒョローンとしたの何？」

イエイヌ「スプーンというものです。指を使わなくてもお湯をかき混ぜる事ができるんです。」

カラカル「へー、ヒトっていろいろな面白いものを思いつくのね。あんたはヒトと暮らした事があるの？」

イエイヌ「動物物だった頃のぼんやりとした記憶ですが、私は昔、ここでヒトのご主人と暮らしていました。でもある日突然いなくなってしまうて…。それでもいつか帰っ

てくるのではないかと、フレンズになっても一人でお留守番を続けていたんです。

そして、キュルルさんが絵に描かれているヒトにそっくりだったので、ようやく帰って来てくれたと思っただけです!

それを聞いて、キュルルは申し訳なさそうな顔をした。

キュルル「ごめんねイエイヌさん、僕はここの事を全然覚えていないんだ。だから、こは僕のおうちじゃないと思う。」

イエイヌ「え?!?…もしかして隣の家でしたか?」

キュルル「ううん…。この辺りの事もなんにも思い出せないんだ。だから…ごめん。」  
するとイエイヌは、目と耳を伏せしよんぼりとうなだれた。

「そう…ですか…。私の勘違いなんですわね、残念です…。」

カラカル「ずっと一人で?どこかへ行ってみたりとか、お友達が来てくれたりとかはないの?」

イエイヌ「はい…。」

サーバル「じゃあ私達が、初めてのお友達だね。これからよろしくね、イエイヌ!」  
それを聞いたイエイヌは、パツと明るい顔になった。

イエイヌ「わあ、ありがとうございます!」

キュルル「よろしくね、イエイヌさん!」

キュルルは握手をしようと手を差し出した。すると、なぜかイエイヌはペタンと床に座り軽く握った手をキュルルの掌に乗せると、尻尾をブンブンと振りながら幸せそうな顔をした。全身が歓喜で震えている。

キュルル「えーと、イエイヌさん？」

イエイヌ「久しぶりにできて嬉しいんです！」

カラカル「そうなの？」

それからカラカルとサーバルも手を差し出すと、やっぱり同じような反応が返ってきた。

カラカル「えーつと…？」

サーバル「面白い子だね！」

### ● 幻影

それからみんなで、棒の引つ張りっこをしたりかくれんぼをしたりして遊んだ。さらに時折体を撫でてあげると、そのたびにイエイヌは大喜びした。

楽しい時間はあつという間に過ぎてゆき、気がつくとい日が暮れていた。キュルル達はイエイヌのおうちに泊めてもらい、床に敷かれた一つの布団でくつつきあつて眠った。

そして翌日。

サーバル「いっくよー、それ！」

サーバルが投げたfrisビーを、イエイヌがはしやぎながら追いかけてゆく。そして間合いを見極めながら大きくジャンプし、見事に口でキャッチした。

キュルル「すごいよ、イエイヌさん！」

カラカル「どこに飛ぶのか、あらかじめ分かっている感じね！にしても…よく元気が続くわね…、ゼゼエエ…。」

カラカルはバテていた。先程までfrisビーを投げていたのだが、一向に疲れを見せないイエイヌ相手にヘトヘトになってしまったのだ。

イエイヌは嬉しそうに息を弾ませながら、frisビーを啜えてサーバルの所へと戻ってきた。

イエイヌ「もつと遠くに投げてもいいですよっ！」

サーバル「よし、それ！」

その様子をキュルルはスケッチしようとしたが、スケッチブックも水筒もバッグも無い。慌てて辺りを見回した後、ふと思い当たった。

カラカル「どうしたのキュルル？」

キュルル「昨日トラクターに、いろいろ置いてきちゃった…。」

カラカル「あ…、なんつか足りないと思ってたのよね。」



サーバル「あれ、キュルルちゃん忘れ物？なら取りに行こうよ！」  
キュルル「そうだね、ちよつと行つてくるよ。カラカルはここで休んでて。」

そんなキュルルとサーバルを、イエイヌが悲しそうな顔で見ている。遊びが突然終わつてしまい、2人ともこのままどこかへ行つてしまうのではないかと気が気じゃないのだ。

それに気付いたカラカルは、2人を引き止めた。

カラカル「待ちなさい！あたしが行くから、キュルルはこの子と一緒にいなさい！」  
キュルル「え？カラカル疲れてるんじゃない？」

カラカル「いーのよあたしの心配は！（ハア…）つべこべ言わずに任せなさい！！（ゼエ…）」

カラカルはムキになつて叫んだ。しかし息が切れているのをごまかす事はできなかった。

こうして強引に押し切られたキュルルは、イエイヌとお留守番をすることとなった。そして喘ぎながら歩いているカラカルの横で、サーバルがクスクス笑っている。

サーバル「やつさしー！」

カラカル「うっさい…！」

そんな2人を見送り、しばらくフリスビーで遊んだ後、キュルルとイエイヌはお茶の

用意をして2人を待つ事にした。

ヤカンをホットプレートに乗せると、キュルルはふとイエイヌにビーストについて聞いてみた。

キュルル「イエイヌさんは、ずっとここにいたんだよね。じゃあビーストの事は知らないのかな。ふらつと現れて、どんなセルリアンでも一瞬で倒しちゃう、とつても強くてカッコいいフレンズなんだ!」

イエイヌ「ビースト…、もしかして、オレンジ色で、体の大きなフレンズの事ですか?」

キュルル「知ってるの?」

イエイヌ「はい。昔、この近くの森を歩いていたら、大きなセルリアンに見つかって追いかけられた事があるんですが、突然現れてそいつをやっつけてくれたんです。

すぐに立ち去ってしまったので顔はよく覚えていませんが、匂いははつきりと覚えています。」

キュルル「わあ、イエイヌさんをセルリアンから守ってくれたんだね。実は僕たちも危ない所を助けてもらったんだ。とんでもない乱暴者でフレンズにも見境なく襲いかかるって噂もあるけど、全然そんな子には見えないんだよね。」

ズドオン!

そこへ突如、おうちの屋根を突き破つてピーストが飛び込んできた。その衝撃で家の半分が崩壊し、家具もドアも吹き飛んだ。またキツチンではヤカンが床に落ち、ぬるま湯があたりに散らばった。そのあまりに突然の出来事に2人は腰を抜かした。

ピーストは鼻をひくつかせながらあたりを見回した後、足元に転がっている絵を睨みつけると、それを額縁ごと砕かんと右手を振り上げた。

それを見た2人は顔色を変え、必死にピーストを止めようとした。

イエイヌ「ダメ！壊さないで！」

キュルル「待つて！ピースト！」

しかしピーストは、勢いよく爪を振り下ろした。彼女の他に気づいているものはいなかったが、絵の裏には緑色の小さなセルリアンが張り付いていたのだ。

緑セルリアン「さすがに鋭いな。だが…、ちよつとばかり遅かったなあ！」

するとその絵に込められたヒトの輝きがセルリアン化し、何本もの太い腕となつてピーストに絡みついた。不意を突かれた彼女はあつという間に動けなくなり、そのまま取り込まれてしまった。

がんじがらめにされたピーストは、なんとかそこから抜け出そうともがきながら真つ暗なセルリアンの体内を漂っていたが、ふと妙なことに気がついた。不思議な事にここは懐かしい匂いがして、妙に心が落ち着くのだ。

そしてあたりに目を凝らすと、その闇のいたるところでセルリアンの元となったヒトの輝きがほのかに輝いている。それを見てみると、もう忘れていたはずのヒトとフレンドが仲良く遊んでいるかつてのパークの光景が、目の前に次々と浮かんできた。

ビースト『わあ…、なんてきれいなんだろう…。』

ビーストはそれにすっかり心を奪われた。次第に体中が心地よい感覚に包まれてゆく。先ほどもあれほど体を締め付けられていたのに、今はまるでふかふかの布団にくるまっているかのようだ。ここにはなんの苦しみも痛みもない。硬い箱の中で目が覚めてから、こんなに安らかな気持ちになったのは初めてかもしれない。ビーストは全身の力を抜くと、すやすやと眠り始めた。そして徐々に体から輝きが奪われていった。

一方、ビーストを取り込んだセルリアンはそのままムクムクと膨れ上がり、見上げんばかりの巨大な姿へと変貌した。その額縁のような四角い顔の中央にはぎらつく一つ目が付いていて、細長い体には同じような太さの6本の腕が生えている。そしてそれらを振り回しながら、今度はキュルルとイエイヌに襲いかかってきた。

緑セルリアンは顔の陰に隠れつつ、勝ち誇った顔をしながら誰にも聞こえない小さな叫び声をあげた。

緑セルリアン「うぷぷっ！ 一番厄介なヤツが片付いた…。さあて、これまで散々やら

れてきたが、今度はお前らが覚悟する番だあ!!?」

イエイヌは爪を振りまわして、伸びてくる腕を必死に払い除けながらキュルルに向かつて叫んだ。

イエイヌ「キュルルさんは逃げてください!」

キュルル「そんな…、できないよ!」

イエイヌ「こいつは私だけではとても抑えきれません!それに私は、ヒトと共に生き、どんな時でもヒトを守るフレンズなんです!あなたが無事ならそれでいいんです!」

そうしてイエイヌは大きく口を開けると、相手の腕に思い切り噛み付いた。しかしセルリアンが腕を横に薙ぎ払った勢いで吹き飛ばされ、そのままキュルルと衝突してしまった。

イエイヌ「うう…。」

キュルル「イエイヌさん、しつかり!」

キュルルはなんとか立ち上がり、イエイヌを助け起こそうとした。すると今度は、セルリアンが巨大な腕を2人めがけて振り下ろしてきた。

しかしイエイヌが、とっさにキュルルを突き飛ばした。

キュルル「イエイヌさんっ!!?」

その顔は、まるでさよならを言っているかのような悲しげな笑みが浮かんでいる。

イエイヌ『キュルルさん、ありがとう。お手にフリスビーになでなで…。私、とっても嬉しかったです!』

次の瞬間ダンッ!という大きな音がした。とつきに上体を起こしたキュルルが見たものは、取り込まれセルリアンの体の中をどンドン上へと昇ってゆくイエイヌの姿だった。

そしてその先にある額縁状の顔の真ん中にある大きな目が、じつとキュルルを睨みつけていた。

キュルル「あ…、あ…。」

キュルルは恐怖でくみ上がり、立ち上がる事ができなかつた。ただ無意識に右手がジリジリと後ずさつてゆき、指の先が何か硬いものに触れた。振り向くとそこには、イエイヌが園芸用に使っていたのであろう先の尖つたシャベルが落ちていた。

キュルル『イエイヌさんっ…! そうだ、諦めちやいけないんだ!』

キュルルはそれを手に取ると、歯を食いしばりながら心の中で呟いた。

キュルル『ピースト…、ほんのちよつぴりでいい、君の勇気を僕に分けてくれっ!!?』  
すると、少しだけ体の震えが治まつた。キュルルは両足にグツと力を込めて立ち上がると、シャベルを両手でギュツと握りしめ、腕に向かって駆け出した。

キュルル「このっ! 離せ、離せよおっ!」

キュルルはシャベルを何度も腕に叩きつけた。しかしキンキンと硬い音がして、破壊するどころかかすり傷ひとつ付かない。

緑セルリアンは、その様子を楽しげに眺めていた。

緑セルリアン「ボウヤ、元気だねえ。でも……！」

バチン！

巨大セルリアンの腕がわずかに動いた。たったそれだけで、キュルルは跳ね飛ばされてしまった。

緑セルリアン「キャハハハハッ！弱っちいねえ！」

それでもキュルルは立ち上がり、叫びながらセルリアンに向かっていった。

キュルル「離せ……、2人を……離せえええ!!！」

そんなキュルルの頭上に、巨大セルリアンの太い丸太のような腕が迫ってきた。

緑セルリアン「これでおしまいだヨオ、ボウヤ!!？」

ドギヤツ!!!

激しい音がすると同時に、キュルルは誰かに突き飛ばされて尻餅をついた。すると目の前にカラカルが立っていた。彼女は必死にセルリアンの腕を受け止めていた。

緑セルリアン「チツ、戻ってきたか。まあ、どこまで頑張れるかだけどなっ！」

巨大セルリアンの圧力に押され、次第にカラカルの肘が曲がり膝が震え、ジリジリと

押し潰されそうになってゆく。だがそこへサーバルが飛び込んできて、セルリアンの顔に一撃を加えた。

それによつてセルリアンの巨体が揺らぎ、カラカルはどうにか腕から逃れた。そして2人でセルリアンの周りを飛び回りながら、何度も爪を叩き込んだ。

緑セルリアン「クソ生意気なハエどもがつ、とつ捕まえてやる!!?」

2人を取り込もうと、巨大セルリアンは6本の腕を縦横無尽に繰り出した。ところがあと一歩で追い詰められる、という所で腕が絡まり動けなくなった。

カラカル「今よ!」

サーバル「うんっ!」

すかさず2人はセルリアンの顔目掛けて飛びかかると、渾身の力を込めて同時に爪を叩き込んだ。

サーバル&カラカル「サバンナX(クロス) ツ!!?」

ズズウウン……!

強烈な一撃を受け、巨大セルリアンが倒れた。そしてサーバルとカラカルが、軽やかな身のこなしでキュルルのそばに着地した。

キュルル「すごいや2人も、ありがとうっ…!!?」

しかしカラカルは不意にキュルルを抱えると、サーバルと一緒に一目散に逃げ出し



た。キュルルは慌てて止めようとした。

キュルル「待って！まだセルリアンの中にイエイ又さんとピースがっ……！」

ポツツ

するとキュルルのおでこに、カラカルの涙がこぼれ落ちた。見上げると、2人とも苦悶の表情を浮かべながら大粒の涙を流している。さらには全身ボロボロで、ゼイゼイと荒い息をしながらどうにか走っている。もはや2人には、巨大セルリアンとやりあう余力が残っていないかったのだ。

カラカル「ごめん…、あたし達だけじゃ助けらんない！」

サーバル「あれだけやったのに碎けない……！石もないし、もう逃げるしかないよー！」

緑セルリアン「逃がさないよおくん！」

バウンツ！

なんと巨大セルリアンが、体を勢いよく地面に叩きつけ、反動を利用して空高く舞い上がった。そして、そのままキュルル達めがけて落下してきた。

3人「うわあー!!!」

ピースト『う……?』

その声を聞いて、取り込まれていたピーストは目を覚ました。するとイエイ又が、彼女にすっかりとしがみついていた。これほどの絶望的な状況にも関わらず、イエイ又は

けものプラズムを放出させながら彼女を守っていたのだ。

ビーストはイエイヌの大事なおうちを吹き飛ばしたうえ、大切な絵まで破壊しようとした。恨まれても仕方ないはずなのに…。

ビースト『こんな私を、守ってくれたのか…。』

それまでぼんやりとしていた頭が、急にハッキリした。しかし全身が痺れていて動けない。

ビースト『すぐにここから出ないと…! 体よ動け…、動けっ、動けえっ!!?』

〔…戦えっ!!〕

その必死の思いに呼応するかのように、頭の中に例の低い声が響き渡った。すると心臓がドクンと脈打ち、体中の血液が逆流したかのような感覚とともに全身の毛が逆立った。そしてビーストの頭に、光り輝く紋章が現れた。

それと同時に体が自由に動かせるようになった。すかさず全身に意識を集中させると、体中から白い輝きが立ち上り、鋭い爪に集まっていった。それから彼女はゆつくりと両手を高く掲げると、あらん限りの力を込めて思い切り振り下ろした。

ズバァッ!

体内で発生した巨大な白い斬撃により、巨大セルリアンは真つ二つになった。それはグオオオーン!と叫んだ後、バラバラになってキュルル達の周りに散らばり、きらめき

となつて消えていった。そしてひととき大きな塊から、ビーストとイエイヌが現れた。緑セルリアン「ちくしよっ、あと少しだったのに！」

小さな捨て台詞と共に、緑セルリアンは誰にも気付かれる事なくどこかへ飛んでいった。

こうしてイエイヌの絵から現れたセルリアンは、みんなの協力で撃退された。

●生きてた！

ビーストの全身を覆っていた白い輝きが、次第に黒く変わつてゆく。戦いは終わったというのに、衝動が収まらない。

ビースト『まだ暴れタリナイ…。』

彼女は歪んだ笑みを噛み殺しながら、疼く体をなんとか抑え込んでいた。

そこへイエイヌがやってきて、親しげに話しかけてきた。

イエイヌ「あんなに強いセルリアンを一瞬で…、本当にありがとうございます！私、以前にもあなたに助けてもらった事があつて、ずっとお礼を言いたかつたんで…。」

ペシッ

イエイヌ「ふぎやん!!？」

しかしビーストは、反射的に爪を振るつてイエイヌを払い除けてしまった。イエイヌはびつくりして、そのまま尻餅をついた。

ビースト『!!』

途端に紋章が消え、黒い輝きが吹き飛んだ。彼女は真つ青な顔をして、全身を震わせながらイエイヌと自分の爪をじっと見つめた。

ビースト『私、今、とんでもない事を…このままじゃ、本当にフレレンズをつ…!!』

とうとう恐れていた事が起こってしまった。ビーストは今にも泣き出しそうな顔をしなからみんなに背を向けると、大きな叫び声をあげながらがむしやらに駆け出した。

ビースト「グワアアアー!!!」

絶叫がどんどん遠ざかってゆく。そのまま彼女はどこかへ走り去ってしまった。

一方、それを見て呆気に取られたイエイヌは、ポカンとしながらしゃがみ込んでいた。するとそこへキュルルが慌た様子でやってきて、彼女に手を差し伸べた。

キュルル「イエイヌさん、大丈夫?」

イエイヌはその手を取ると、しっかりとした足取りで立ち上がった。

イエイヌ「…ええ、平気です。ちよつとビックリしただけ…。私よりもみなさんは大丈夫ですか?ひとまず隣の家で休んでいてください。」

イエイヌの言葉に甘えて、キュルル達は壊されてしまったおうちの隣の家で休むことにした。その中の作りはイエイヌのおうちと似たようなもので、大きなベッドとテーブルと椅子がいくつか、引き出しのついた棚、それとキッチンと食器棚がある。

そしてひどく疲弊していたカラカルはベッドに横になり、イエイヌとサーバルはその周りの椅子に腰掛けた。しかしキュルルには、先程から気になっていたことがあった。

キュルル『イエイヌさん、鼻の頭が擦りむけちゃってる。』

キュルルは柵まで歩いてゆくと、引き出しから絆創膏を取り出してイエイヌの顔に貼ってあげた。

イエイヌ「ありがとうございます、エへへへ。」

イエイヌは構って貰えるのが嬉しくて、にこにこしながら尻尾を振っている。

キュルル「ううん、僕にはこれぐらいしか……ごめんねみんな、なんにもできなくて。」

イエイヌ「そんな事ないです！あんなセルリアン相手に一人で向かってゆくなんて、凄いです！」

カラカル「でも、あんまり無茶しないでね。逃げるのだって大事なんだから。」

サーバル「こーゆー事は、私たちに任せといて……まあ、いつも全部上手くいくつてわけじゃないけど。」

キュルル「ありがとう。それにしても……、ビーストはどうしちやっただらう？」

カラカル「テレ隠し……じゃないわね、あの顔は。」

イエイヌ「私が悪いんです、様子が変だったのに近づいてしまつて……。たぶん私を襲うつもりはなかったんだと思います、全然力が入っていませんでしたし。」

サーバル「今度会つたら、誰も怒つてないよーつて教えてあげようよ!」

キュルル「…うん、そうだね!」

今夜はみんなで一つのベッドで眠ることになり、カラカル、キュルル、イエイヌ、サーバルと並んで横になった。キュルルは目を閉じると、ピーストの事を思い浮かべた。

キュルル『セルリアンつて、あんなに強くて怖かつたんだ…。それとずつと戦つてきたピーストつて、やっぱり凄いや。いきなりイエイヌさんのおうちが壊されたのはびっくりしたけど、あの子は僕たちを守ろうとしてくれてたんだ。今度会つたらきちんとお礼を言いたいな。』

そしてキュルルは眠りについた。

みんな疲れ果てていたため、翌日目を覚ました時には太陽が高く登っていた。

イエイヌが用意してくれた朝食を済ませお茶を飲みながら話をしてしていると、突然キュルルの左腕のラツキーピーストが、かばんさんの声で喋り始めた。

かばん「…しもし、キュルルさ…、ザツ…こえる?」

イエイヌ「ひゃんっ!?」

カラカル「…かばんさんっ!?」

キュルル「かばんさん!? 無事だったんですか!?」

サーバル「かばんさん!? ホントにかばんさんなのっ!?!」

かばん「…ホテル…ザツ…き…て…ザザツ…パークの危機…ザザツ」  
雑音がひどくてうまく聞き取れない。キュルルはかろうじて聞こえた言葉を頭の中で組み立てると、こう答えた。

キュルル「パークの危機ですか？分かりました、僕たちもホテルに向かいます！」  
しかしかばんさんからの答えはなく、雑音だけが続いている。それでもサーバルは、ラッキービーストに向かって必死に呼びかけ続けた。

サーバル「かばんさん！何か言つてよ、かばんさん!!？」

しかし、なにも返事が返つてこないまま通信が途絶えた。

サーバル「かばんさん…。」

しよげているサーバルの背中を、カラカルがポンと叩いた。

カラカル「無事でよかったじゃない！きつとあなたの思いが通じたのよ！」

キュルル「そうだよ！ホテルに行けば、元気なかばんさんに会えるよ！」

サーバル「うん…！よかった…、よかったよお…！」

かばんさんの無事を知り、3人は涙ぐんだ。

今ホテルでは、かばんさん達も協力したというペプライブが行われる事になっている。特に今回は、夜通し続く特別なライブが開催されるのだ。

パークの危機がなんなのかは分からないが、そこでかばんさんに聞けば教えてくれる

だろう。キュルル達はホテルに向かうことにした。また彼らの事を心配したイエイエも、一緒に行く事となった。



## ホテル編

## ● やつと会えた！

イエイヌのおうちの近くにあつた施設で充電を済ませ、キュルル達はトラクターでホテルに向かった。

あたりが薄暗くなり始めた頃、夕暮れに照らされて大部分が海に沈んだホテルが見えてきた。岸には栈橋があり、緑色のラツキービーストが乗つた大きな船と手漕ぎのボートが何隻か止まつていて、そばには小さな看板が立つている。それには「こぎかた」というかばんさんの文字と、オールの使い方を示した絵が書かれていた。

キュルル達は看板を見た後、ボートに乗り込んだ。サーバルとカラカルが、ボートに固定されたオールを見ながら首を傾げている。

サーバル「これ、なんだろう？」  
カラカル「でっかいスプーン？」

2人がそれで水面をパシヤパシヤと叩くと、ボートが少し動いた。それを見たキュルルは、「こうやって使うんじゃないかな。」と言つて、両手でオールを握つて漕ぎ出した。するとボートがゆつくりと進み出した。

サーバル「すつごーい!」

カラカル「これなら濡れずにすみそうね。」

イエイヌ「あわわわわ、揺らさないでくださいーい!」

ホテルに近付いて行くと、いたるところに赤い矢印が置かれていた。それをたどってゆくと、「非常口」と書かれた入り口が見えてきた。そこから中に入ると、上の階から歌声と歓声が聞こえてきた。どうやらもうライブは始まっているらしい。

廊下を歩いてゆくと広いロビーに出た。そこには3人のフレンズがいて、キュルル達に気がつくのと歩み寄ってきた。そしてその中の一人の、大きな耳をした灰色のフレンズが話しかけてきた。

オオミミギツネ「ようこそ当ホテルへ!私は支配人のオオミミギツネ、こちらは従業員のアブさんとブタさんです。ライブはすでに始まっておりますので、お急ぎください。存分に楽しんでくださいね!」

ブタ「ネコさんにイヌさんに…、こちらはかばんさんと同じヒトさんでしょうか?」  
アブ「ちょうど、もうお客も来ないし、俺たちもライブ会場へ行こうって話してたんだ。一緒に行かないか?」

キュルル「ごめんなさい、実は聞いて欲しい事があって…。」

キュルルはパークの危機が迫っている事を伝えた。しかし3人は、信じられないとい

う顔をした。

ハブ「で、具体的に何が起こるんだ？」

キュルル「それはっ…。」

キュルルが言い淀んでいると、後ろから声がした。

？「パークがセルリアンで埋め尽くされます！」

振り返ると、そこにはかばんさんと博士と助手、そしてアライさんとフェネックが立っていた。

それを聞いたオオミミギツネは、困惑しながらかばんさんにこう尋ねた。

オオミミギツネ「かばんさん、それは本当ですか!?!？」

かばん「うん。このところ地震が頻発しているのはその始まりです。一刻も早くここから逃げてください！」

それを聞いたブタとハブは大慌てした。

ブタ「ちよ、ちよっと待ってください！」

ハブ「俺たち…いや支配人がこの日のためにどれだけ頑張ってきたか…！」

すると、2人を手で制しつつ、オオミミギツネがうつむきながら低い声で話し始めた。オオミミギツネ「…この建物はとても頑丈です。これまでの地震でも、ひび一つ入っていません。それに、お客様の中にはハンターさん達もいます。そこらの巣より、ここ

は安全なのではないでしょうか…? せめてあと1日…いえライブが終わるまで、見逃して頂けませんか!!?」

そして3人は懇願の眼差しをかばんさんに送った。

それを見て、かばんさんがたじろいだ。代わりに博士がこう言った。

博士「仕方ないですね、ライブが終わったら、すぐに逃げるのですよ。」

3人「…あ…、ありがとうございます!」

3人がよかつたよかつたと涙ぐんでいるのを、かばんさん達はじつと見つめていた。

サーバル「かばんさんああん!!?」

そこへサーバルが、叫びながら飛びついてきた。不意を突かれたかばんさんは、サーバルと一緒にどでーん!と床に倒れた。

ラツキーさん「サーバル、タベチャダメだよ。」

サーバルはかばんさんにすがりつきながら、ポロポロと涙をこぼしている。

サーバル「食べないよおっ! かばんさん! かば…あーん!!?」

そしてわんわんと泣きはじめた。

かばんさんは、右手でサーバルの頭をそつと撫でた。

かばん「ごめんね、心配かけて。すぐ連絡しようと思ってたんだけど、いろいろあつてできなかつたんだ。」

そして、サーバルを慰めながら立ち上がった。そこへカラカルとキュルルが駆け寄ってきた。

カラカル「かばんさん！ ホント、無事でよかった…。」

キュルル「無事だったんですね！ よかった…。あの、僕かばんさんに聞きたいことがあるんです。」

かばん「いいよ。立ち話もなんだし、急で申し訳ないけどオオミミギツネさん、空いているお部屋があつたら使わせてもらえないかな。」

オオミミギツネ「分かりました。それでは、一番広いお部屋にご案内致します。」

ブタ「どうぞどうぞ、こちらですよ。」

ハブ「へへ、中に入ったらぶつたまげるぞ！」

3人に連れられて、キュルル達はとても広い部屋に案内された。そこはいたるところに豪華な装飾が施され、寝室には巨大なベッドが2つ並べられていて、全員で泊まつてもまだ空きができそうだ。広いテーブルには大きなお皿にジャパリまんが山のように乗せられていて、ジャパリソーダなどの飲み物とグラスも用意されている。

サーバル「わあー、広くてでっかい！」

サーバルはベッドに飛び乗ると、ポンポンとジャンプし始めた。かばんさんに会えた事で、すっかり元気を取り戻したようだ。

カラカル「ちよつと、落ち着きなさいサーバル!」

イエイヌは興味深そうにポットを見ている。匂いや温度から察するに、中にはお湯が入っているようだ。

アライさんは、大はしやぎしながら目を輝かせている。

アライさん「おおー、お宝の山なのだ!」

フエネツク「盗つちや駄目だよ、アライさん。」

オオミミギツネ「喜んでいただけただけようだなによりです。」

ブタ「ゆつくりしていつてくださいね。」

ハブ「これから俺たちはライブ会場へ行く。よかつたらお前達も来てくれよな。ライブが終わつて余韻が抜ける…、まあ夜明けまでには全員避難させるから安心してくれ。」  
そう言うところ人は部屋から出ていった。

それから一行は床やベッドの上など、各々好きな場所に腰掛けてくつろいだ。サーバルは、ニコニコしながらかばんさんの隣にちよこんと座っている。

キュルルはこれまでの事をかばんさん達に話した後、こう尋ねた。

キュルル「あのメツセージなんです、かばんさんはなんて言つたんですか? 雑音だらけで聞き取れなくて。」

かばん「あれは、ホテルに向かうなら気をつけて、パークの危機が迫つてる!」つて

言っただけで、上手く伝わらなかつたみたいだね。ちよつとキュルルさんのラッキービーストを見せてもらえる？」

キュルルが左腕ごと差し出すと、ラッキーさんがチカチカ光った後、こう言った。

ラッキーさん「ナニカ強い衝撃ヲ受ケテ、上手ク話セナクナツテルネ。ソノホカハ問題ナイヨ。」

キュルル「もしかして、セルリアンに殴られた時かな？」

かばん「キュルルさんもいっぱい頑張ったね。後で研究所に来るといい、直してあげるから。」

キュルル「ありがとうございます！よかった…。」

サーバル「かばんさん、パークの危機つて、どうしたらいいの？」

するとかばんさんは、一瞬間を曇らせた。

アライさん「ホントは…モガッ！」

アライさんが口を滑らせそうだったので、すかさずフェネックがジャパリまんて口を塞いだ。

かばん「…さつきはああ言っただけど、本当のところ、いつ何が起こるのかは分からないんだ。」

博士「自分の巣や好きなもののそばで、じつとしていれば良いのです。」

助手「『住まいは気から』という言葉もあるのです。オオミギツネの言葉通り、ここにとどまるというのも、有力な選択肢なのです。」

カラカル「なーんだ、じゃあゆっくりしてればいいんじゃない。」

そう言うと、カラカルはベッドにねっ転がった。

サーバルとイエイヌも安心した様子だったが、キュルルは違和感を感じていた。話の内容はどこかチグハグで、無理にこちらを安心させているような感じがするし、かばんさんの態度もなんだかよそよそしい。

しかし疲労がどーんと押し寄せてきて、考えがまとまらなくなってきた。

かばん「疲れてるみたいだね、ゆっくり休むといい。私達は、せつかくだからライブを堪能してくるよ。」

そう言っただけでかばんさん達はそろそろと部屋を出ていった。

イエイヌが、そちらとキュルル達をキョロキョロと見ている。

イエイヌ「…キュルルさん、どうしますか？」

キュルル「いろいろ気になる事はあるけど…、ダメだ、疲れすぎてもう考えられないよ…。」

そして、キュルル達はベッドで休む事にした。しかしサーバルは、かばんさんの出て行ったドアをじっと見つめながら立ち尽くしていた。



●そのままできて、君だけは

廊下に出ると、かばんさん達はライブ会場ではなく、出入り口に向かって歩き出した。そして博士がポツリと呟いた。

博士「…本当は、安全な所なんてどこにもないのです。」

助手「パークの終わりをいつどこで見届げるか…、それだけの違いなのです。」

かばん「うん…、意味ないって分かってても、どうしても失敗した時のことを考えちゃうよね。」

フエネック「私もさく、バレないようにしてたけど、さつきから震えが止まらないんだよ。」

みんながうつむきながら歩いていると、アライさんが後ろ歩きで列の前までやってきて、胸の前で両手をグーにしながらまっすぐな瞳で叫んだ。

アライさん「やる前から怖がってたらダメなのだ！やってみて、ダメだったら怖がるのだ！」

しかしそのまま数歩進んだところで、慣れない歩き方のせいで足を取られてすっ転んだ。

アライさん「のだったっ!?？」

それを見て、フエネットクが思わず吹き出した。

フエネットク「相変わらずアライさんは面白いねえ。」

博士「まったく…。まあなんだかんだ、お前の根性は信頼しているのです。」

助手「何事にも『当たつてくだけだろ』…。たいしたたくましさなのです、まったく。」

かばん「ありがとう。アライさんのおかげで、怖いのがどこかへ飛んでいったよ。」

アライさん「なんで転んで褒められるのだ？けど、どんな時でもみんなを笑顔にするのがアライさんなのだ！」

かばんさん達は、互いに手を繋ぎながらホテルを出た。そして泊めてあったジャパリバスのトレーラーに、順番に乗り込んだ。ところが最後にかばんさんが乗り込もうとした時、背後から声がした。

？「待って！どこ行くの？」

かばんさんが驚いて振り向くと、そこには不安そうな顔をしたサーバルが立っていた。

かばん「黙って行くつもりだったんだけど…。私達は海底火山を止めてくる。」

サーバル「それって海の中だよ？へーきなの？」

かばん「心配しないで、すぐに戻ってくるよ。」

笑顔でそう言うと、かぼんさんはサーバルに背を向けた。しかし耳が良いサーバルには、かぼんさんの声が震えている事がすぐに分かった。

サーバル「ねえ、どうしてそんなに悲しそうなの？お願い、ホントの事を教えてよ！」するとかぼんさんの体がぴたりと止まり、カタカタと震え出した。

かぼん「…言えないよ。」

サーバル「やっぱり危ないの!?？ならここにいてよ。私、かぼんさんと離れたくない！」

かぼん「無理だよ…、私達にしかできないんだ。」

サーバル「かぼんさんはすっごいヒトでしょ、もつと考えればきつと他のやり方も…。」

かぼんさんはうつむき、肩を震わせながら大声で怒鳴った。

かぼん「もうやり尽くしたよ！何度も！何度も、何度もっ…。けど…、駄目だった。結局の方法も、しつかりつかんだと思つた途端指の間からこぼれ落ちていったんだ。」

その言葉は、次第に涙声となつていった。

かぼん「そして残つたのがこれだけ…、これだつて、上手くいくとは限らない…。」それからふつと上を向いた。

かぼん「…怒鳴つてごめん。大丈夫だから、サーバルはここで待つてて。」

その時サーバルの頭の中に、帽子を被った女の子の姿がフツと浮かび上がった。どこで会ったのか、名前も顔も分からない、けれどもとっても大切に大好きな子……。それを掴もうと、サーバルは体をわななかせながら手を伸ばした。

サーバル『なんだろう……。なにか思い出さなきゃいけないような……。とても大切なにかを……。』

不意に、かばんさんが振り返った。その顔は涙でクシヤクシヤになっていて、口元だけが無理に笑っている。

かばん「そんな顔しないでよ……。君だけはどんな時でも笑っててくれないと……。嫌だよ……。」

震える声でそう言うと、サーバルから目を背け、うつむきながらバスの入り口に右足をかけた。

それを見つめるサーバルの目は、涙でいっぱいになっていた。それが揺らめくとかばんさんの姿が歪んで、どんどん遠ざかってゆく。

サーバル「う、うわあつ……!」

かばん『ごめんねサーバルちゃん……。ずうっと一緒にいたかったけど、僕達の旅はここまでだよ……。』

するとサーバルの胸の中で感情が弾け、叫び声となって外に飛び出した。

サーバル「かばんちゃあぁん!!!」

そして勢いよくかばんさんに飛びついた。

突然のサーバルの言葉に、みんな驚いた。

かばん「えっ…?!?」

博士「かばん〃ちゃん〃…?」

助手「まさか、思い出したのですか?!?」

アライさん「なにが起きたのだ?!?」

フェネットク「信じられない…。」

サーバルは嗚咽を漏らしながら、かばんさんにありったけの思いをぶつけた。

サーバル「分かんない…分かんない!なにが分かんないのかも全然分かんないよ!でも、これだけは分かるよ!このまま行かせちゃダメだつて!離れたらもう会えないつて!!

お願い!私も連れてつて、かばんちゃん!!!」

これを聞いたかばんさんの目から、大粒の涙が溢れ出した。そしてずっと胸の奥にしまい込んでいた呼び名を吐き出すと、大声で泣きだした。

かばん「サーバル…ちゃん…!わあああ…っ!!?」

そうして2人は、目に涙を浮かべながらしつかりと抱き合った。また博士たちも、涙

ぐみながらその様子を静かに見守った。

それからしばらくして……。ようやく2人が落ち着き始めた頃、博士がバスから降りてきてサーバルにこう声をかけた。

博士「サーバル、口を閉じるのです。私がよしと言うまでそのままですよ。」  
サーバルは言われた通り口を閉じると、両手で塞いだ。すると博士は、サーバルの鼻をギュツとつまんだ。すぐに息が苦しくなってきた、サーバルの顔が赤くなり、体が震えだした。

サーバル「ブハア、なにをするの!?!」

堪えきれずサーバルが口を開けて大きく息を吸い込んだところへ、博士がおどろおどろしい口調で迫ってきた。

博士「いいですか?我々陸のけものが水の中で息をするためには、たくさんの空気が必要なのです。しかしバスに用意できたのは片道分……。つまり、たとえ海底火山を止められたとしても、帰ってくることはできないのです。」

これに乗ったら、お前は今よりもずっと苦しい思いを死ぬまで続けなければならぬのです。本当にそれでもいいのですか?」

するとサーバルは即座にこう答えた。

サーバル「いいよ!私はかばんちゃんのをそばがいい!」

博士「…そうくるだろうと思つていたのです。装備の都合上、行けるのは5人まで…。私の代わりに行ってくると良いのです。私はここで、できる限りのことをするですよ。」  
こうして、博士の代わりにサーバルが海底火山鎮静化に参加することとなった。みんなはバスに積んであつたアツアエンの潜水用の装備を身につけると、運転席に乗り込んだ。

かばんさんがスイッチを押すと、窓が厚いバリアで覆われ、完全に密封された。そしてバスは、海底火山に向かつて出発した。

博士はそれを黙つて見送つた。そしてバスがすっかり沈んで姿が見えなくなると、頭の羽を広げてふわりと舞い上がった。

博士『頼んだのですよ。…さてと、あいつはどこで震えているのですかね、まったく！』

## ◎ 異変

かばんさんたちが発つた後、ホテル周辺の海面が徐々に黒く染まりだした。海を漂っていたセルリウムが、輝きに惹かれてワラワラと集まってきたのだ。そしてその一部は、ホテルから伸びていた排水用のパイプから内部へと入っていった。

ライブ会場の上の階には、大きなプールが設置されていた。その水が、流れ込んできたセルリウムでどんどん黒くなってゆく。

そしてプールサイドには、それを見つめる小さな緑色のセルリアンがいた。そいつは全身をカタカタさせつつも、愛想笑いを浮かべながら震える声で話し始めた。

緑セルリアン「やあ…、お目覚めだね。久しぶりの地上はどう？ 感じ取るよりも直に見る方が、感慨深いものがあるんじゃないかな。…でも、もう少しゆっくりしてもいいんだよ？ 見てたよね？ ボク一人でも、十分やっていけるんだ。」

「そりゃあさ、与えられた指令を果たせなかったのは謝るよ。結局あのヒトの子は取り込めなかったし、ピーストも健在だ。でもさ、フレنزの厄介さは身をもって知ってるよね？」

「それにさ、各地で生まれたフレنز型も、もうそこまで来てる。ボクのまいた種が、よ



うやく芽を出したんだ！これでフレンズ達もおしまいき。だからさあ…、せめてそういったの活躍を見るまで、この姿でいさせてくれないか…？」

するとプールから水でできた一本の黒い触手が伸びてきて、セルリアンに巻きついた。

緑セルリアン「お願いだよ！ちよつとだけでいいんだじようお…、ウワアアアツ…：！」

誰にも届く事のない小さな叫び声を残して、緑色のセルリアンはプールに取り込まれた。そしてしばしの静寂の後、そこから抑揚のない声が出た。

？「…鬱陶しい。御託を並べるヒマがあるのなら、なぜ満足な結果を出さない。まあお前の知識と言葉は役立ててやる。私の中で好きなだけ世界を見るがイイ。」

すると大量の黒い水がスライム状の大きな塊となつて、のっそりとプールを這い出した。そしてズルズルと表へ出ていった。

キュルルはカラカル、イエイヌと一緒に寝室の大きなベッドで横になつていたので、いつまで経つても眠ることができなかった。頭の中に浮かんでくるのは、先程のかばんさん達と、「私も、かばんさんで行つてくる！」と言つて部屋から出ていったサーバルの事だった。

キュルル『今頃サーバルは、かばんさん達と楽しんでるんだろいな。』  
体も頭も疲れているのに、心がザワザワして落ち着かない。堪らなくなつて起き上がると、イエイヌが目を覚ました。

イエイヌ「あれ、キュルルさん、どうしたんですか？」

キュルル「何だか眠れなくて。」

イエイヌ「…そうだ、いいものがあります！」

イエイヌはキュルルと一緒に寝室から出ると、用意されていたグラスを一つ取り、毛皮から小さな葉っぱを取り出した。そしてグラスにそれを入れると、ポットのお湯を注いでキュルルに手渡した。

イエイヌ「はい、どうぞ。おうちの花壇で育てている葉っぱのお湯です。昔主人が、眠れない時はこれを飲んでいました。私も寂しくなるとよく飲んでいました。」

グラスの中には温かな薄いピンク色の液体が入っていて、とてもよい香りがする。飲んでみると、ほんのり甘くて、体中がポカポカと温かくなり、緊張がほぐれてきた。

キュルル「ありがとうイエイヌさん、とっても美味しいよ。」

キュルルはそれをゆつくりと味わいながら飲み干すと、大きなあくびをした。

キュルル「わあ、これならすぐ眠れそうだよ。」

イエイヌ「よかったです。良い夢が見られるといいですね。」

それからキュルルは、イエイヌと一緒に寝室に戻るとベッドに横になった。

キュルル「おやすみ、イエイヌさん。」

イエイヌ「おやすみなさい、キュルルさん。」

そして目を閉じると、すぐに眠る事ができた。

キュルルは夢を見ていた。そこではカラカルやサーバル、イエイヌやかばんさん、そしてたくさんのお友達と一緒に、広い花畑で遊んでいた。あたりは一面色とりどりの花が咲き乱れていて、みんなで歌を歌ったり、手を繋いで踊ったりと、素敵な時間が流れていた。

それからキュルルは、かばんさんに教わりながら花の冠を作り始めた。なかなか思ったような形にはならないが気にせずどんどん進めてゆくと、どうにかそれらしい物ができあがった。そうしてそれを誇らしげに掲げると、隣で見守っていたカラカルが拍手をしながら彼を称えた。

そしてふと視線をずらすと、少し離れた所をビーストが歩いていた。彼女はややうつむきながら、そそくさと通り過ぎようとしている。

そこでキュルルが手を振りながら「一緒に遊ぼうよ。」と声をかけると、彼女はためらいの表情を浮かべながらもこちらに歩いてきた。

ところが、ビーストの体が次第に黒い輝きで覆われていった。彼女が近づくとつれキュルルが持っていた冠がポロポロと崩れだし、花畑やみんなの姿が闇に飲まれて散り散りになってゆく。そしてとうとう暗闇の中に彼女だけが取り残された。

ビーストは悲しそうにうつむきながら、真つ暗がりの中ポツンと佇んでいた。しかしキュルルが手に残った一輪の花を髪に刺してあげると、びつくりしたような顔で彼を見つめた。それと同時に体を覆っていた黒い輝きは消え去り、あたりの闇が晴れていった。

● 闇の誘い（いぎない）

キュルルはビーストに声をかけようとしたが、彼女はキュルルに背を向け、何かから庇うように立ちはだかると、目の前の空間を睨みつけた。

そこでは先程の闇が集まって、巨大な影となっていた。それは次第にはつきりとした形を成してゆき、ついには全身真っ黒な髪、長い女のヒトの姿へと変わった。その頭には6本のトゲトゲした虹色の長い角が生えていて、吊り上がったとても冷たい目をして

いる。

女はビーストに片言で話しかけた。

女「そう睨むな、何もしない。ただ念のため、聞いておこうと思ってナ。ビースト、な

ぜ戦ウ？いくら痛くて怖くて辛い思いをしようが、誰もお前を見てくれない。」

ビースト「！」

不意に女はキュルルを一瞥すると、嘲るような笑みを浮かべた。

女「ああ、一人理解者がいたナ。だが…ククツ…ヒトは最低だゾ。お前が助けてやる価値など全くない、ひ弱で口先だけの生き物ダ。ヒトが泣いてすぎるのは苦しい時だけダ。事が済んだらすぐさま手のひらを返し、自分の利益ばかりを追い求め、不平不満を喚き出ス。」

「忠告しておこウ。たとえパークの危機を救ったとしても、お前はすぐに英雄の座から引きずり下ろされ迫害されル。そんな連中を命懸けで守る必要がどこにある？」

ビースト「……………」

それを聞いてキュルルは叫んだ。

キュルル「違うよ！僕は絶対そんな事はしないし、させない！」

しかし女はキュルルを凍りつくような目で睨むと、冷淡な口調でこう述べた。

女「それはお前が、ビーストに個人的好意を抱いているだけに過ぎない。たった一人のヒトの感情では、周りを動かす事はできない。実際、お前がいくらパークの危機を叫んでも、言葉だけではホテルに集まったフレンズの意思を変えることはできなかつタ…。違うカ？」

キュルル「ぐ……!」

女「ビースト、私に手を貸せとまでは言わない、ただ邪魔さえしなければそれでいい。そうすればお前には手を出さな。言う通りにしてくれば、お前はそのお気に入りヒトと一緒に、永遠に幸せな時間が続く世界で、永久に生きてゆけるゾ。その素晴らしさは、セルリアンの中でよく分かったはずだ。

さあ、どうすル? いくらお前が獣でも、この答えはすぐに出せるだろ?

……さあ、どうすル?!?」

ビーストはじつと目を閉じ、うつむきながらこう答えた。

ビースト「…嫌だね。」

女は一瞬驚いた後、ヤレヤレといった感じのため息をついた。

女「……所詮獣だな。明日の大きな幸せよりも、目先の幻想（エサ）にすがりついでたいの力。」

ビースト「…違う!!」

女「?!?」

ビースト「私はそれほど賢くないし器用でもない、戦うしか能がない。みんなから避けられているのは事実だし、お前の言うことも嘘じやないと思う。…でも、いいんだ。」

ビーストは目を開くと、まるで自分を奮い立たせるかのように話し続けた。

ビースト「それでも私はみんなが好きだ。ヒトも！フレンズも！山も海も風も大地も空も…私の周りにあるもの全てが好きだ!!？だからっ…、」

次第にその声は、かすれた涙声になっていった。

ビースト「もし本当に…みんなが私にいなくなつて欲しいなら…、みんながそう望むなら…、私は…私はっ…!」

そしてビーストは顔を上げ、寂しげな顔でこう言い放つた。

ビースト「お前を砕いて…!パーク（ここ）を去る…!!」

キュルル「なっ…?!?駄目だよビースト!」

それを聞いたキュルルは驚き、ビーストの手をギュツと掴んだ。

女「ソウカ…。まったく、おめでたい騎士（ナイト）だナア…。天下のビーストも、今や首輪のついた飼ひ猫か。…まあいい、それなら容赦はしない。お前が自責の念と後悔で泣き叫び、苦しみがく姿を見るのが楽しみダ。」

そう言うとう女は2人の前からかき消えた。

キュルルは不安そうな顔でビーストを見つめた。すると彼女は振り返り、穏やかな顔でキュルルの頭をポンと叩くと、そこから立ち去つていった。キュルルは彼女を追いかけようとして叫んだ。

キュルル「待って！行かないでビースト、ビーストオ！」

キュルルは叫びながら目を覚ました。その目には涙が浮かんでいる。それを聞いて、隣で寝ていたカラカルとイエイヌが飛び起きた。

カラカル「しつかり!…もしかして寝ぼけたの?」

イエイヌ「だ、大丈夫ですか?!?」

キュルル「…夢…?」

まだ心臓がドキドキしている。いやにはつきりした夢だったが、思い返そうとしている間にも内容がどんどん霞んでゆく。そしてすぐに、どうして涙を流しているのかも分からなくなってしまうた。

【戦えっ!】

ビースト『!!』

突如頭の中に響き渡った例の声に、ビーストは叩き起こされた。彼女は海のそばの高い木の上でキュルルと同じ夢を見ていたのだが、やはり内容は思い出せなかった。しかしパークとキュルルによくない事が迫っているのだけははつきりしていた。

暗闇の向こうに、輝いているホテルが見える。そして海中のセルリウムが、どんどんそこへ押し寄せている。



戦う事になったら、また闇に飲まれてしまうかもしれない、そうしたらみんなを傷つけてしまうかもしれない…。

しかしこのままじっとしているのは、もつと嫌だ！

すると空から声がした。

？「ここにいたのですね！よかった…。さあ、とつとホテルに向かうのです！」

## 女王編

### ● 明かされた真実・女王vsキュルル

ガシャアアーン！

「キヤアアアツ！」

突然上の階から大きな音と叫び声があった。

カラカル「何？ライブ会場からだわ！」

キュルル「みんなが危ない！」

そう言うと、キュルルは真つ先に部屋を飛び出して会場へと向かっていった。その後からカラカルとイエイヌが慌てて追いかけてくる。

カラカル「ちよつと、あんたは隠れてなさい！」

イエイヌ「そうですよ！危ないですキュルルさん！」

キュルルがライブ会場へ駆け込むと、黒くて巨大なスライムが暴れまわっていて、逃げ惑うフレンズ達と、それに立ち向かうヒグマ、キンシコウ、オジロヌー、オグロヌー、アイアイといったハンターらの姿があった。

オオミミギツネ「みなさん、ひとまず屋上へ逃げてください！」

ホテルの従業員らは、何とかみんなを避難させようと奮闘していた。そこへハンターらの隙をつき、スライムが彼女らに飛びかかってきた。

従業員たち「わああああー!!!」

キュルル「危ないっ!!?」

しかしすんでのところで、キュルルが彼女達を突き飛ばした。

ドパアアン!

そして派手な水音と共に、彼はそのままスライムに取り込まれてしまった。大量の黒い影がキュルルの中に入り込んでゆく。

バシヤ…

途端にスライムは元の水に戻り、力なく周りに散らばった。

ずぶ濡れとなったキュルルが、水浸しの床の上で暗い顔をしながらしやがみ込んでい  
る。そこへカラカルが駆け寄り、肩を掴んで手を握りしめた。

カラカル「キュルル、しっかり!」

するとキュルルの背後から、聞いた事のない声が出た。

?「…どケ。」

カラカル「え?」

ドン!

突然キュルルがカラカルを片手で突き飛ばした。するとカラカルは勢いよく壁に叩きつけられた。

カラカル「キュル、ル…？」

イエイヌ「なっ!? ヒトの力じゃない…！」

キュルルがゆらりと立ち上がると、その背後に巨大な影が現れた。それは抑揚のない声で、ゆつくりと語り出した。

女王「私は全てのセルリアンを統率する女王…、我々はこの世界のあらゆるものを保ち、再現する、永遠に。」

ヒグマ「この…、その子から離れろっ！」

ハンターらが飛びかかって攻撃を加えたが、手応えはなくそのまま通り抜けた。

女王「私は意志を持った影だ。肉体がないから攻撃は効かない。止めたいならこいつの体を砕くがイイ。だが…できるか？」

ヒグマ「くそっ！」

女王「こうなる事は、こいつが生まれる前から決まっていたのだ…。お前たちはおとなしくそこで見ている、新たなる王の誕生ヲ！」

そう叫ぶと、女王はキュルルの体の中に入っていった。

フレンズたち「ああっ!!？」

フレンズたちの力では、もうどうする事もできなかつた。

女王はキュルルの意識の中を泳いでいた。するとどこからともなく声が聞こえてきた。

キュルル「女…王…。」

女王「キュルルか、私にはお前の思いがよく聞こえるゾ。」

キュルル「お前は… パークの過去を知っているのか？それとあの口ぶり…、僕と何かつながりがあるのか？」

女王「…ほう…察しがいいナ、ただ易々と運命を受け入れる人形ではないようダ。いだろう、教えてやル。はるか昔…、まだヒトとフレンズが共に暮らしていた頃の話だ。」

「私はどこにでもいるちっぽけなセルリアンだった。だがヒトの輝きを取り込む事で、セルリアンを統率する女王となつタ。そしてこの力で世界を保存し、再現しようとした。しかしパーク中のフレンズが結束し、邪魔をしタ。私は全力で応戦したが――」

「どれほどセルリアンをけしかけられようが、どれだけ己が傷つこうが、奴らは諦めようとはしなかつタ。とうとうフレンズ達に追い詰められ敗北が確実となつた時、私は思つ

タ…。」

「私の望みのためには、ヒトの輝きが必要不可欠だ。だが生きているヒトを取り込めば、必ずどこかで繋がりのあるものが現れ邪魔をしてくる。しかし輝きを元に作り出したヒトならば、その心配はない。」

「それならばと、かろうじて残った輝きをコアに閉じ込め、そこから完全なヒトの複製を作り上げる事にしタ。」

そして戦いに敗れ肉体を失った私は、自らの意思を保存する事で意識のみの存在となり、地下を流れるセルリウムの中で意思の再現を繰り返しながら機が熟すのをじっと待ち続けタ。

それから長い年月を経て、ようやく生まれたのがお前だ。あとは私の意志の宿ったセルリアンがお前を取り込めば望みは叶う、はずだつタ…。」

「だがお前は、目覚めるとすぐにフレンズと行動を共にしタ。さらには旅に出た後も、行く先々で次々と協力者が現れタ。そして向かっていったセルリアンは、ことごとく撃退されタ。結局、海底火山に影響されたセルリウムの活性化によつて私が表に出られるようになるまで、お前を取り込む事はできなかつタ…。」

だがようやく、ここにたどり着けタ。長い道のりだったが、これからは私の道具として役に立つてもらおうとしよウ。」

キュルル「道具…、お前にとって、僕は道具なのか…。」

女王「そうだ、お前は道具だ！私に利用されるためだけに作られた存在だ！

お前はおうちを探し求めていたが、そんなものはどこにもない。それら過去の記憶は、オリジナルを複製する際に生じたゴミだ！お前は私によって生み出され育てられた複製人間（コピー）…、言うなれば、私がお前のおうちだ!!？」

キュルル「うわああー!!!」

やがて女王の目の前に、ぼんやりと青白い光を放つ手のひら大の球が現れた。

女王「見つけたぞ…お前の心ヲ。キュルル、これから私と一つになり、セルリアンの王としてこの世界を永遠に再現するのだ！誇るがいい、強大な存在となる自分ヲ！」

そして女王はキュルルの心を驚掴みにした。しかしそこから強い輝きが生じ、女王の手を弾き飛ばした。

女王「ナニツ…?」

キュルル「嫌だ…、僕は僕だ…。それにもう、おうちみたいに大切なものをいっぱい見つけたんだ…、優しいみんな…、強くてカッコいいピースト…、絶対忘れない！絶対にお前の好きにはさせない!!」

キュルルの心が、より強く輝き出した。

女王「バカナツ!!? こんな子供に、これほどの力があるとハ…。」

輝きに押され、女王はキュルルの体から飛び出すと、そのままいずこかへと消えた。キュルルはがつくりと膝をついた。そして心配そうな表情を浮かべたフレンズ達が、彼の周りに駆け寄ってきた。

カラカル「大丈夫、キュルル？」

キュルル：「…うん、さつきはごめんね、カラカル。」

カラカル「いいのよ、そんな事。ちよつとたんこぶできたけど。」

ヒグマ「それよりあいつは？」

キュルル「消えたよ、僕の中から。」

イエイヌ「それなら…一体どこへ？」

フレンズ達があたりを見回しても、女王の気配はどこにもなかった。

その頃、女王はヒトの輝きの気配をたどりながら、フラフラとホテルを漂っていた。そして部屋に落ちていたキュルルのスケッチブックを見つけると、すぐさまそこへ飛び込んだ。

するとページが勢いよくめくられてゆき、トラの子とキュルルが出会ったフレンズ達が描かれた絵があらわとなった。そして次の瞬間、それが黒く輝いた。

女王「仲間や体が碎けても…、その心は折れずにいられるかナア！」



するとそこから、全身真っ黒なセルリアンがゾロゾロと出てきた。その姿こそ描かれていたフレンズと同じだが、顔の中心には巨大な目が一つあり、それすらも黒く濁っている。そいつらは階段を駆け上がると、フレンズ達に向かってくる。

思わぬ事態に、フレンズ達は大混乱に陥った。そんな中、ホテルの従業員3人がみんなを誘導しながら階段を駆け上がり、その先にある観音開きの扉を開け、屋上へと避難させた。

そして、しんがりを務めていたハンターらが駆け込んできたところで、その扉を彼女らと一緒に必死に押さえつけた。

その向こうから何度も激しい音がした。次第に扉が歪み、崩れてゆく。そしてハブが、みんなに向かつてこう叫んだ。

ハブ「くるぞ！」

フレンズ達は戦いに備えて身構えた。

しかし勢いよく扉が弾け飛ぶと同時に飛び込んできたのは、吹っ飛ばされた一体のフレンズ型セルリアンだった。そいつはホテルの壁の向こうまで吹き飛んだあと、全身をきらめかせながら消滅した。

そして扉の向こうには、ゴリラをはじめとしたフレンズ達がいた。各地でキュルルの絵から現れたフレンズ型セルリアン、それを追ってここまで駆けつけてくれたのだ。そ

して船でホテルにたどり着くと、セルリアンを蹴散らしながら登ってきたのだという。そしてゴリラが、みんなにこう声をかけた。

ゴリラ「無事で良かった。さあ、急いでここから避難するんだ！」

ホテルの横には、緑色のラッキーストが運転する大きな船が着いていた。そして戦いが苦手なフレンズから順番に、船へと避難していった。

キュルルも避難しようとしたが、突然ホテルの周りの海の中から大勢のフレンズ型セルリアンが現れ、屋上に飛び乗ってきた。全身が真っ黒なのは先ほどのものと同じだが、濁りのない大きな一つ目が、品定めでもしているかのようにギロギロとフレンズたちを睨みつけている。

メガネカイマン「あれはっ！ 私たちの追ってきたセルリアンです!!?！」

ゴリラ「気をつけて！ ジャングルで少しやりあったけど、恐ろしく疾くて強いんだ、あいつら!!?！」

さらには扉からも、新手の黒目セルリアンがゾロゾロとやってきた。

### ● 孤高の騎士

ホテルの屋上で、フレンズ達とフレンズ型セルリアンの激しい戦いが繰り広げられた。しかし今度の相手は強力で、フレンズ達はジリジリと追い詰められていった。

一方船の上では、イリエワニ型のセルリアンがみんなに襲い掛かっていた。すると上空から、博士が誰かを抱えながら急降下してきた。その誰かは大きな両手を構えると、漆黒のかぎ爪を勢いよく閃かせた。

ヒョウッ！

鋭い風切り音と共に2人はそのまま急上昇し、屋上へと飛んでいった。そしてみんなが驚いて顔を上げる中、一瞬でバラバラに切り裂かれたイリエワニ型がきらめきながら消えていった。

屋上にてカラカルはキュルルを守りながらチーター型と戦っていたが、一瞬の隙を突かれ吹き飛ばされてしまった。そしてチーター型の巨大な一つ目がギロリと動き、キュルルの方を睨んだ。

カラカルは何とか起きあがろうと、必死にもがいていた。

カラカル「逃げ、て…、キュルル…！」

その叫びが終わらないうちに、チーター型はあつという間にキュルルとの間合いを詰めると、振りかぶった爪を勢いよく振り下ろした。

するとキュルルの周りから音が消え、禍々しい5本の爪がまるでスローモーシヨンの

ようにゆっくりと目の前に迫ってきた。全身から冷や汗が吹き出し、心臓がドクドクと大きな音を立てている。しかし感覚はやたらと研ぎ澄まされているのに、体が全く動いてくれない。とてつもない恐怖に耐えきれなくなり、彼は思わず目を閉じた。

カラカル「キュルルー!!!」

バキヤアアン!

ところが大きな音と共にチーター型の腕が根本からちぎれ、勢いよく回転しながら吹き飛んでいった。キュルルが恐る恐る目を開けると、目の前にオレンジ色の長い髪をなびかせた大きなフレンズが立っていた。

キュルル「ビースト!??!」

ビーストがキュルルの前に立ちはだかり、右腕で攻撃を弾いたのだ。そしてそのまま腕を横に振ると、チーター型の体が紙細工のように裂け、きらめきながら粉々に砕け散った。

それが消え去ってゆく様を、彼女はじっと見つめた。

ビースト『何度目だろう…、この光を見るのは…。戦って戦って、戦い続けてきた…。これが使命だと思って…。』

上空では、ビーストを運んできた博士が申し訳なさそうな顔をしながらこう呟いていた。

博士「すまないのですピースト…。でも今だけは、我々に力を貸して欲しいのです！」  
きらめきの向こうでは、おびたらしい数のフレンズ型セルリアンが蠢いている。

ピースト『どんなに痛くて怖くても、これを使い越えた先に何かがあると信じて…。  
けど…、私を待っていたのは戦いだけ…！ “戦い” がっ、私の生きる場所なんだあっ!!』

ピースト「ウオオオオオン！」

ピーストが雄叫びをあげると、頭に紋章が輝いた。そして彼女は戦場のど真ん中へおどり込むと、両手の爪を閉かせて次々とフレンズ型セルリアンを倒していった。

先程のチーター型の腕が床に落ちて弾ける頃には、すでにセルリアンの半数がピーストによって蹴散らされていた。残りも彼女に恐れをなしたのか、遠巻きに見つめているだけで向かってこない。

それを見て、ピーストの周りにフレンズ達が歓声をあげながら集まってきた。しかし彼女は唸り声をあげ、牙を剥き出してフレンズ達に襲いかかってきた。

ゴリラ「こつちに向かってくるぞ！」

ヒョウ「やっぱり見境なしや！」

慌てて逃げ出すフレンズ達。

それを見た博士は困惑した。

博士「どうしたのですピースト?!? やめるので…ん?!?」

その時、博士はある事に気づいた。そしてみんなに向かつて叫んだ。

博士「お前たち、早くここから飛び降りて船に乗るのです! 跳べない子には手を貸すのですよ!」

フレンズ達が屋上から次々と飛び降りてゆく。それを見て、ピーストは悲しそうな顔をしながら彼女達に背中を向けると、目の前にいる残りのセルリアンの群れを睨みつけた。

彼女の頭の中は、全てを破壊したいという衝動で黒く染まっていた。その中で、ほんのわずかに残った理性がこう呟いた。

ピースト『そうだ…、早く逃げろ。お友達なんて所詮うたかたの夢。私は…、ずっと一人だった! 一人でパークを守り抜いてきたんだ!』

破壊の悦びに体と心が打ち震えた。そして、歪んだ笑みを浮かべているピーストの全身が黒い輝きで覆われてゆき、握りしめた拳がバキバキと音を立てた。

ピースト『これで…目につくもの全てを引き裂くことができる。まるで、花を摘むヨウニ! 愉シイナアア!!』

すると背後から声がした。

? 「だめだよ!」

そして誰かが後ろからビーストを抱きしめた。彼女が驚いて振り向くと、キュルルが腰にしがみついていた。

彼はビーストをじっと見つめると、涙ながらに大声を上げた。

キュルル「置いてくなんて嫌だよ！ どうして一人になろうとするの？ 君はお友達（フレンズ）で、群れの仲間なんだよ！」

その温もりと眼差しが、彼女の頭の中から闇をかき消した。全身を覆っていた黒い輝きが霧散してゆく。

見ると、彼の足はガクガクと震えていた。無理もない、全く戦いを知らないヒトの子供が、セルリアンの群れと猛獣のようなフレンズが相對している所へ飛び込んだのだから。

ビーストはキュルルを慈しむような表情で見つめると、左手でポンと彼の頭を叩いた。

キュルル「わかって…くれたの？」

キュルルは僅かに微笑みながら、ビーストの腰から離れた。

しかしビーストは左手で彼の肩をつかむと、右手を股の間に差し込んだ。そして彼を軽々と持ち上げると、勢いよく船の方向へ放り投げた。

キュルル「なっ…!!？」

カラカル「キュルル!!?」

それを見たカラカルは、慌ててキュルルを追いかけた。

キュルルは空中で逆さまになったまま、呆然とビーストを見つめていた。

キュルル「なんでだよビースト!」

ビーストはうつむいていたが、頬が涙で濡れていた。

ビースト『ごめん…ごめんよ…。こうする事が…、こうして自分の大好きなもののために命をかける事が…、ずっとパークを守ってきた…、私の使命なんだよ!!!』

それからビーストはキュルルに背を向けると、大きな右手の指で不器用なビースサインをした。

キュルル「いやだあーっ!!!」

そしてキュルルは、泣き叫びながら屋上から船へと落ちていった。

● 真つ直ぐな思い

落ちてくるキュルルを見て、フレンズ達は慌てた。

メガネカイマン「キュルルさんが落ちてきます!」

ヒヨウ「危ない、受け止めるんや!」

すると、カラカルがホテルの壁を蹴って空中でキュルルを受け止め、何度も回転しな



がら船に着地した。

博士「これで全員ですね！さあラツキービースト、早くここから離れるのです！」

博士が緑色のラツキービーストに指示を出すと、その目がチカチカと点滅した。そして船がゆつくりとホテルから離れ始めた。

カラカルはキュルルを下ろすと、隣にしゃがみ込んで心配そうに声をかけた。

カラカル「大丈夫、キュルル？」

キュルルは全身をカタカタと震わせながら、放心した様子で何度もこう呟いていた。

キュルル「だめだよビースト…、どうして…。」

カラカル「聞いて！あの子、最後にこう言ってたの。『みんな…、その子、頼む』って。」

キュルル「!!…なんだよ、それ…。やっとお話できたのに、初めてしゃべった言葉が

それなんて！」

キュルルは泣きながら、両の拳を床に叩きつけた。

そんなキュルルをなだめながら、カラカルが博士にこう尋ねた。

カラカル「ねえ、なんであなたはビーストの気持ちが分かったの？」

すると博士は、うつむきながらしんみりとした口調でこう答えた。

博士「…好きだから…ですかね…、数日一緒に過ごしたただけでしたが、あの子の事はよく分かったのです。乱暴者だなんてとんでもない、とても優しく純粋で、それでいて

脆い…、非常に危うい心を持つているのだと。」

この言葉に、同じようにキュルルに恋心を抱いているカラカルはハツとなった。

「それに、研究所を飛び出す際に大騒ぎをした時もあんな目をしていただけですよ、寂しさと申し訳なさが同居したような、あんな目を…。これまでも、苦しみを自分だけで抱え込んで生きてきたのでしょうね、あの子はしゃべれない上に、ずっと一人ぼっちでしたから…。」

そして博士は目に涙を浮かべながら唇を噛んだ。そこへ、オオミミギツネがキヨロキヨロと辺りを見回しながらやってきた。

オオミミギツネ「かばんさん達が見当たらないのですが！一緒にではなかったのですか？」

博士「…かばん達とサーバルは、海底火山を止めに行つたのです。私はサーバルの代わりに、ここに残つたのです。」

キュルル「えっ…!!…なんで…、なんでだよ…!どうしてみんな、なんにも言わずにいなくなっちゃうんだよ…!」

すると博士が、キュルルの肩をそつと掴んだ。

博士「キュルル、分かつて欲しいのです。不器用でも真つ直ぐな彼女達の思いを。」  
それを聞いたキュルルは、嗚咽を漏らしながらうつむいた。

キュルル「ビーストお…、かばんさあん…！」

## 海底火山編

## ● サーバルの過去

ジャパリバスは、海底火山へ向かって海の底を進んでいた。かばんさん達は、ヘルメット越しに運転席の窓の外をじっと見つめている。

アライさん「ここに来るのも久しぶりなのだ。」

フェネットク「やく、おつきな岩や山の形なんかも、結構変わっちゃってるね。」

それを聞いたサーバルが、かばんさんにこう尋ねた。

サーバル「ねえかばんちゃん、『ジャパリまんくらの大きさで、まんまるなものが落ちてないかよく見てて』って言ってたけど、もしかしてここに来たことがあるの？ それに火山を止めるって、どうやるの？」

かばんさん「ん…、やつぱり、話しておくべきだよね…。」

かばんさんは少し口ごもった後、サーバルに過去の出来事を語り始めた。

それはまだ、かばんさんがかばんちゃんだった頃…。

ある日、突然フレレンズから野生解放が失われ、大型セルリアンがよく現れるように

なった。ジャパリバスで各地を回りながら、その原因を独自に調査していたかばんちゃん、サーバル、アライさん、フェネツクの4人は、最近活動が活発化しているこの火山を訪れた。

その頃はまだ、この辺りは海に沈んでいなかった。

山の麓には4つの丸い穴が開いた石板があり、そこにジャパリまんほどの大きさの、赤、青、黒の3つのキラキラした玉がそれぞれはまつていた。

そして、その周りをウロウロしているラツキービーストがいた。

かばんちゃんがそのラツキービーストに声をかけた。

かばんちゃん「すみません、これはなんですか？それとあなたは何をしてるんですか？」

ラツキービースト「はじめまして！この丸いノハおーぶダヨ。ぱーくヲ守ツテイル四神ノチカラノ一部ガ結晶トナツタモノナンダ。コレハ火口ノ周りニ置カレタ4枚ノぷれーとト連動シテイテ、4ツガ石板ニハマツテイレバ、火口ニふいるたーが発生スルンダ。」

四神のオーブとはそれぞれ、赤がスザク、青がセイリユウ、白がビヤッコ、黒がゲンブというフレンズのものらしい。

ラツキービースト「デモ地震ノセイカ、びやつこノおーぶガドコカへ行ツチャツテ…」

ソレヲ探シテルンダ。」

かばんちゃん「なら、僕たちもお手伝いします。一緒に探しましょう！」

アライさん「探し物なら、アライさんに任せるのだ！」

かばんちゃん達はあたりを搜索した。するとアライさんが、近くの岩陰から白いオーブを見つけた。

アライさん「あつたのだ、白いまんまる！」

フェネック「おお、さすがだねえ、アライさくん。」

サーバル「やったね、アライグマ！」

アライさん「ふっふーん、アライさんにお任せなのだ！」

かばんちゃん「すごいです！それじゃあ、早く元の場所に戻しましょう！」

アライさんがオーブを石板にはめ込もうとした時、ガシャンと音がした。みんながそちらを見ると、両耳と左目を食いちぎられたラッキービーストが倒れていて、そのそばにふた抱えほどの大きさの、黒い帽子型セルリアンが浮かんでいた。

そいつは大きな一つ目でアライさんを睨むと、巨大な口を開けながら飛びかかってきた。そしてアライさんの手からオーブを掠め取って飲み込んだ。

アライさん「なっ…、返すのだー！」

すると帽子型は、空中で身を翻すと、凄いスピードでアライさんに向かってきた。ア

ライさんは野生解放しようと力を込めたが、やはり使えない。それでもなんとか帽子型の突進を受け止めた。そしてサーバルとフェネックが同時に飛びかかり、全力で爪を叩き込んだ。

ドガガガッ！

ところが、大きな音と共に3人が吹き飛ばされた。相手は帽子に宿っていたヒトの輝きを取り込んだ強力なセルリアンだった。野生解放の使えない今の3人にとって、敵う相手ではなかったのだ。

そして帽子型は、今度はかばんちゃんに向かってきた。

セルリアン「グオオオオオー！」

かばんちゃん「うわあっ!!」

バシィ！

するとかばんちゃんの目の前で、激しい音と光が巻き起こった。

かばんちゃん「サーバルちゃん!?!」

なんとサーバルが、持てる力の全てを振り絞ってかばんちゃんの前に立ちはだかつていた。全身からけものプラズムが吹き出していて、体全体がまるで太陽のように輝いている。

すると次第にサーバルの輪郭がぼやけ、どんどん体が小さくなっていった。

Bannon!

突然輝きが弾けた。帽子型はよろめき、サーバルは後方に吹き飛んで、岩に叩きつけられた。

かばんちゃん「サーバルちゃん、大丈夫!?!」

駆け寄ったかばんちゃんが見たものは、倒れているサーバルキャットだった。けものブラズムが尽きて、サーバルは動物に戻ってしまったのだ。

セルリアン「ウオオオオオン！」

そして叫び声と共に、再び帽子型が2人に襲いかかってきた。

かばんちゃん「サーバルちゃんだけは、絶対に守る！」

かばんちゃんはサーバルキャットを抱きしめると、ギョツと目を閉じた。

すると、空から何かが帽子型目掛けてものすごい速さで落ちてきた。そして両手の爪を閉かせると、帽子型の頭に深々と突き刺した。

セルリアン「ギョオオオオオオオ!?!」

その叫び声で、かばんちゃんは目を開けた。すると、帽子型の上にオレンジ色をした大きな体のフレンズがいた。その子の頭には、一部が欠けたトラ柄の紋章が輝いている。帽子型は必死に振り払おうとしていたが、その子は両腕にグツと力を込めると、そのまま帽子型を真つ二つに引き裂いた。



セルリアン「ゴアアアアアア!!」

耳をつんぎくような断末魔を上げながら、帽子型は消滅した。

そしてセルリアンのかけらがきらめく中を、オレンジ色のフレンズがゆつくりとかばんちゃんに向かって歩いてくる。紋章は消えていて、その大きな右手には、白いオーブが握られていた。

かばんちゃんはサーバルキャットを抱いたままへたりこんでいた。するとかばんちゃんの耳に、どこからか小さな声が聞こえてきた。

「そいつはビースト、逃げないとお前まで喰われるぞ!」

かばんちゃん「え、ビースト?」

かばんちゃんは思わず身を固くした。するとビーストはかばんちゃんの目の前で立ち止まり、唸り声を上げた。

ビースト「グルルル…」

そしてかばんちゃんにオーブを差し出した。その大きな手には黒くて鋭い爪が生え、手首には黒光りする厳つい手枷がはめられていて、重たそうな鎖がジャラジャラと揺れている。

しかし目つきは鋭いが、その子の雰囲気はとても穏やかだった。

かばんちゃん『もしかして、しゃべれないのかな。でもとっても親切なフレンズさん

みたいだ。』

恐怖もあつたが、かばんちゃんはペコリと頭を下げた。

かばんちゃん「あ、ありがとうございます…。あなたはビーストさんっていうんですか？どうも、危ないところを助けていた দিয়ে…。」

すると、突如ビーストの右腕から黒い輝きが立ち上った。その子はギョツとすると、オーブを取り落とし、左手で右手を抑えながら悶え始めた。そして高々と跳躍すると、あつという間に姿が見えなくなつてしまつた。

あまりに突然の出来事に、かばんちゃんは呆気に取られた。するとそこへ、アライさんとフェネックがやつてきた。

アライさん「アイタタタタ…。かばんさん、大丈夫…。ああつ!!?サーバル!セルリアンに食べられたのか?」

かばんちゃん「違います!僕を守つて、全身が輝いたと思つたらこうなつて…。」  
フェネック「ムリしすぎて戻つちやつたか…。かばんさん、ちよつと見せてね。…うん、よかつた。気絶してるだけだから、しばらくすれば目を覚ますよ。」

その言葉を聞いて、2人ともひとまずホッとした。

アライさん「よかつたのだ!それにしても、あのでつかいフレンズはなんだつたのだ?」

かばんちゃん「え？ピーストだって教えてくれたの、おふたりじゃないんですか？」  
フェネットク「知らないよ。あの小さな声、てつきりかばんさんのだと思っただけ  
ど、違うのかなあ？」

アライさん「2人とも、一体なんの事なのだ〜？」

結局、あの声がなんだったのかは分からずじまいだった。

●今僕にできる事

かばんちゃんがビヤツコのオーブを拾って石板にはめると、オーブが輝き始めた。そして火口がフィルターで覆われ、火山活動が鎮静化した。

そこで、試しにアライさんが力を込めてみたが、相変わらず野生解放はできなかった。どうやら原因は他にあるようだ。

考えていても始まらない。かばんちゃん達は、とにかくここを離れる事にした。アライさんは倒れているラツキーピーストを背負うと、みんなと一緒にジャパリバスに乗り込んだ。

アライさん「ボス、もう大丈夫なのだ、しつかりするのだ。」

かばんちゃん「さて、どこに行こう…。ゆつくり休めて、パークの異変の原因も調べられそうな場所…。そうだ！

ラッキーさん、ジャングルで見つけた建物に向かってください！」

ラッキーさん「ワカッタ、マカセテ。」

アライさん「ジャングル：？ああ！あの白くてでっかくて、ひろーい壁に囲まれたところに行くのか？」

かばんちゃん「はい。あの時はちよつと中を見ただけで通り過ぎましたが、あそこなら安全そうですし、ヒトが残っていた資料なんかも沢山あったので、なにか分かるかもしれません。」

フエネット「なるほどね。あそこなら、私たちが思いつかない事も分かるかもだね。」

こうしてかばんちゃん達を乗せたバスは、ジャングルの研究所へと向かった。

しばらくして、サーバルキヤットは目を覚ました。その子は目をパチクリさせながらかばんちゃん達を見たあと、特に怯える事もなくおとなしくしていた。

バスに揺られていると、やがて厚い壁に囲まれた研究所に到着した。そしてバスはガレージに入ってしまった。するとそこには一台のオフロードカーが止まっていた。

ラッキーさん「コレモ運転デキルヨ。コノアタリノ荒レタ道ヲ走ルノニ便利ダヨ。」

玄関から入ったところには、何やら機械が置かれていた。丸い窪みのついたプレートが並べられていて、それらの前には何かを引っ掛けておくような台座がある。

ラッキーさん「コレデラッキービーストノ修理ガデキルヨ。」

そこでアライさんは、ラッキーさんの指示通り、背負っていたラッキービーストの体を窪みにはめ込み、本体を台座に乗せて休ませた。

この施設には電気が通っていて、ヒトが残っていた資料や機材がたくさんあった。それだけでなく、キッチンやお風呂場、寝室など、生活に必要なものは一通り揃っていた。

緑色の絨毯が敷かれ、白くて丸い椅子とテーブルが置かれた居間で、かばんちゃん達は一休みした。

かばんちゃん「僕はここで、ラッキーさんに手伝ってもらいながらパークの異変の解決方法を調べます。おふたりはどうされますか？」

アライさん「アライさんもかばんさんを手伝うのだ！」

フェネック「けどさー、私たち字が読めないから、ここにいても多分力になれないんだよね。だからさー、パークを回って、様子を見てきたり噂を集めたりしてくるよ。ちよくちよくここにも寄るから、手が必要だったら教えてよー。」

かばんちゃん「分かりました。じゃあ緊急時には、ラッキーさん、お願いします。」

ラッキーさん「ワカッタ。ソノ時ハ、ボクガ2人ノ近くニイルラッキービーストニ連絡シテ伝エルヨ。」

すると開いた窓から、博士と助手が音もなく入ってきて、テーブルに舞い降りた。

かばんちゃん「ふええつ、なんでここに!?？」

博士「ラツキービーストに聞いたのです。かばんが困っている」と。

助手「だから飛んできたのです。頭を使う作業なら、我々に任せるのです。」

かばんちゃん「あ…、ありがとうございます！」

すると2人はこう呟いた。

博士「かばんと一緒にいう事はですよ…、じゆるり。」

助手「料理が食べ放題、という事なのです、じゆるり。」

フエネツク『あ…、なるほどねえ。』

こうしてかばんちゃんは、ここでみんなと一緒にパークの異変解決の糸口を探る事となった。

### ● “私”の決意

翌日、かばんちゃん達は旅立つアライさんとフエネツクを見送った。それから真っ先に取り組んだのは、美味しいカレーを作る事だった。しかしここには、カレーの材料であるお米や小麦粉やスパイスが見つからず、代わりにたくさんのトウガラシがあった。そして試行錯誤の末でできあがった激辛鍋は、ここでの定番メニューとなった。

それから数日後、2人が帰ってきた。

アライさん「ただいまなのだ！遊園地でお宝を見つけたのだ！」

フエネツク「齧られちゃったボスへのお土産だよ。」

それは海賊帽子と眼帯だった。アライさんは、早速それらを怪我をしたラツキービーストに被せてあげた。そして目をキラキラさせながらボスを抱き上げた。

アライさん「おお、カッコいいのだ！ボスも早く元気になるのだ！」

しかしかばんちゃんは、このラツキービーストから聞かされていた。休んでも体の調子が戻らず、以前のようにパークを歩き回る事はできなくなってしまったそうだ。

気がかりはもう一つあった。

あれからサーバルキャットはずっとここで暮らしていたのだが、環境が合わないらしく日に日に元気がなくなっていくた。

もちろんかばんちゃんは、サーバルキャットに適したちほーで一緒に暮らす事も考えた。だが、研究を続けるためにはここ以上の場所はない。

また他にも利点があった。ヒトの輝きが強力なセルリアンを生み出してしまった以上、同じ事が起こりかねない。しかしこの閉鎖された環境なら、万が一の事が起こっても自分たちだけで対処できる。

そしてある日決心した。断腸の思いだったが、サーバルキャットとお別れする事にし

たかばんちゃんは、みんなと一緒にモノレールに乗りサバンナへと向かった。

初めのうちはこらえていたが、次第に目的地が近づくにつれ、ポロポロと涙が溢れてきた。そしてかばんちゃんは、泣きじやくりながらサーバルキャットを抱きしめた。

やがて、モノレールがサバンナに到着した。

駅から出たかばんちゃんはサーバルキャットを下ろすと、帽子から赤い羽を引き抜き、その子の胸に刺した。

すると、サーバルキャットはかばんちゃんの手で顔をこすりつけた。それから名残惜しそうな顔をしながらフイツと背を向けると、そのままトボトボと歩き始めた。そして何度も振り返りながら、地平線の向こうへと消えていった。

かばんちゃんは涙で顔をくしゃくしゃにして、ろくにまばたきもせずその様子を見つめていた。

かばんちゃん「サーバルちゃんっ…、ぼくっ…」

ここまで言ったところで右腕で乱暴に顔を拭くと、嗚咽しながら叫んだ。

「私、強くなる！パークの異変もセルリアンも全部解決できるように、もつともつと強く賢くなるからさっ…約束するよ！そしたら必ずまた来るからっ…、待っててね!!？」

こうしてかばんちゃんはサーバルと別れた。また本人の希望で、パイレーツラッキーはモノレールの運転席で過ごす事となった。



かばんちゃん「パイレーツさん…、いつか、サーバルちゃんがこれに乗って戻ってくるようだったら、その時は…」

ラッキービースト「マカセテ。さーばるがじやんぐるニ向カツタラ連絡スルヨ。」  
しかしその約束は、地震でレールが崩壊したため、果たされずに終わった。

## ◎ タイムアップ

かばん「…それから僕達は研究に明け暮れた。けど…、いろいろやってみただけで、結局パークの異変の原因は分からなかった。

その間に地形が変わって、あの火山は海の底深く沈んだ。そして最近になって、また活発に活動を始めた。そしてようやく海底へ行く目処がついた時、君達が現れたんだ。…今まで隠してごめんね。どうせすぐいなくなるのなら、忘れたままでいて欲しくて。それに、約束を果たせない僕を見せたくないって気持ちもあって、どうしても話せなかったんだ。」

助手は海底に注意を払いつつ、こう言った。

助手「呆れた事に、かばんは一人で行くつもりだったのです。様子がおかしかったので、我々でとつちめて無理矢理吐かせたのです。『正直は一生ものだから』…、かばんには、ウソは似合わないのです。」

かばん「あはは…、相変わらず、ごまかすのが下手だね僕は。結局サーバルちゃんも巻き込んだじゃったし…。話はこれで全部だよ。サーバルちゃんは、何か思い出せた？」

サーバルは、ふるふるすると頭を振った。

！  
サーバル「ううん……。でも、かばんちゃんが私の大事なお友達だつてはつきりしたよ

そうだ！この胸の羽、海から出たらかばんちゃんに返すよ！やくそくしよつ！」

そう言つてサーバルは、ニコニコしながらかばんさんに小指を伸ばした右手を差し出した。するとかばんさんは目を伏せた。

かばん「サーバルちゃん、僕たち、地上へはもう……」

助手「かばん、できるかどうかではなくて、やろうとする意思が重要なのです。それがなくては、できるものもできないのです。」

かばん「……そうだね！」

そしてかばんさんは、しっかりとサーバルと指切りをした。

サーバル「やくそく！」

かばん「約束！」

そしてついに、かばんさん達の目の前に巨大な山が現れた。火口からは大量の煙と泡が吹き出している。

その麓には、オーブが納められた石板がある。よく見ると、今度は青いセイリユウのオーブがなくなっていた。

サーバル「わあ、これがそうなんだね……。どうするの？外に出るの？」

かばん「ここから出るには、一旦バスのバリアーを解除しなきゃならないんだ。でもそうすると、海水の重さが体全体にのしかかってきて、すぐ潰されちゃう。だからそれは最後の手段なんだ。

バスを少しいじって、運転席の下にハサミ状のアームを付けてある。オーブが見つかったらまずそれで捕まえて、ここまで運んでから外に出ようと考えてたんだ。…本当はアームを操作して石板にはめられたらよかつたんだけど、そこまでできなくてね。

だからここまでみんなに周りを見てもらってただけど、それらしい物は無かつた。このまま空気がなくなるギリギリまで海底を調べて、オーブが見つかったら回収する。そして外に出て、それを素早く石板にはめる…。」

すると、アライさんが何かを指さした。

アライさん「ん？あれ、なんなのだ？」

そちらを見ると、バンドウイルカとカリフォルニアアシカの姿をしたセルリアンが、青いオーブをボール代わりにして遊んでいた。

サーバル「あれ、オーブだよ！」

フェネック「セルリアンが持つてる…、困ったねえ。」

助手「どうするのですかかばん、飛び出して奪えますか？」

かばん「こっちは水の中を素早く動けないから、逃げられたらおしまいだ。なんとか

セルリアンの興味を惹いて、近くまでおびき寄せないと……」

背後からの気配に、イルカ型とアシカ型は振り向いた。すると、ジャパリバスが2体に向かつてゴトゴトと進んでくる。そしてある程度近づいたところで、ヘッドライトが2体を照らした。

それに興味を惹かれた2体が近づいてきて、大きな目でバスを覗き込んだ。しかし運転席はもぬけの殻だった。

ラツキーさん「……イマダヨ！」

バスを遠隔操作していたラツキーさんの合図で、運転席とトレーラーの連結部分に潜んでいた5人が一斉に飛び出して、2体を押さえ込んだ。そして不意を突かれたイルカ型が落としたオーブをすかさず拾ったかばんさんは、石板へ向かって必死に泳いだ。

深海の水圧で身体中が締め付けられ、ヘルメットにヒビが入った。そしてあと少しでオーブをはめ込める、というところで左足に激痛が走った。振り返ると、アシカ型がかばんさんの足をガツチリと掴んで引き戻そうとしている。

そして他のみんなは、とうに力尽きていた。水圧でヘルメットが割れている。みんな意識を失って、力なく海底を漂っていた。

かばん『くっ……!』

かばんさんはそれを振り払おうと必死にもがいたが、バリーン!という音と共にヘル

メットに大穴が開き、大量の水が顔に流れ込んできた。

かばんさんは少しでも石板に近づこうと必死に体を伸ばしたものの、あと一步届かない。激しく体を動かした事で息が上がっていたが、いくら口を開けても入ってくるのは海水ばかりだ。そして頭の中がガンガン痛みだし、目の前が真っ暗になった。

かばん『ごめん…、みんな…。』

とうとうかばんさんも意識を失い、オーブが手からこぼれ落ちた。

そしてついに、激しい地震と共に海底火山が大噴火を起こした。

#### ● 5色の輝き

かばんさん達がバリアーを解除したため、ジャパリバスも水圧でひしやげていった。すると、セツトされていたテープから希望の歌が流れ始めた。歌は海水を伝って、あたりに響き渡った。

すると、それまでぐったりしていたかばんさんの体が、突然力強く水をかいた。その足のひと蹴りで、アシカ型の手が吹き飛んだ。そしてオーブをしつかりと掴むと、石板の穴にはめ込んだ。

4つのオーブがかばんやりと輝いた。そしてかばんさん達の体が、それぞれ赤、黒、白、青、緑色の輝きで包まれた。輝きの中から声が聞こえる。

かばんさん・赤（スザク）「懐かしい歌じゃなあ…、よい手土産じゃ。お礼に少しばかり暴れてやるかの！」

助手・黒（ゲンブ）「歌はいい…、心が洗われる…。もつとも、わしはうまく歌えぬがのお。…わしとて、かような気持ちは持ち合わせておるのじゃ。無論、困っている者を助けようという気持ちもな。」

アライさん・白（ビヤッコ）「久方ぶりの客人は、いつぞやの4人と出不精のオサ殿か。わざわざここまで出張るとは、余程のことが起きたのか、この4人に惚れ込んだのか…。面白い、力を貸そうぞ！」

フエネック・青（セイリユウ）「あなた達の頑張り、しかと心に留めたわ。すみません、少しの間、体をお借りします。あとは任せてちょうだいね。」

サーバル・緑（セーバル）「来てくれたんだね、サーバル。サーバルはセーバルの事、覚えてないのかな。でも大丈夫、セーバルはサーバルの事覚えてるから。ずっとずっといつまでも…。」

そして5人は、2体のレンズ型セルリアンと周囲のセルリウムを消し飛ばしながら、一直線に火口へと向かっていった。そして4人（四神）はそれぞれのプレートに乗ると、一斉に力を解放した。

4人（四神）「「「はあああああつ!!!」」」

4つのプレートの上に、4色の光の柱が立ち上った。そしてサーバル（セーバル）が、その膨大なエネルギーを全て手に集め、あやとりのようにまとめあげると、一気に火口へと注ぎ込んだ。

強烈な輝きが、火口から山の内部へと流れ込んでゆく。すると、噴煙も地鳴りも嘘のように鎮まり、火口がフィルターで覆われた。

サーバル「う…、う…ん…。」

サーバルはうつすらと目を開けた。するといつの間にかジャパリバスの運転席に座っていた。周りにはみんなもいる。ぐったりしているが生きているようだ。そしてバスは巨大な泡で覆われていて、その向こうで四神とサーバルが手を振っている。

スザク「また来るがいい。日々の精進と、土産を忘れずにな。」

セイリユウ「かき集めた空気よ。十分とはいかないけど、なんとか海上までは持つわ。」

ビヤッコ「なに、少しばかりの辛抱だ。海の上で嫌というほど堪能せい。」

ゲンブ「不便がなければありがたみが分からぬとは…。難儀なものよのう…。」

セーバル「そういえば、ちゃんとお別れ言ってなかったね、バイバイ、サーバル！」

そしてセイリユウが長い尾を一振りすると、潮の流れが変わってバスが浮上し始め



た。5人の姿がどんどん遠ざかってゆく。

そしてラツキーさんの声でした。

ラツキーさん「ミンナ、シツカリ！海上マデアト…」

ここでまた、サーバルの意識は途切れた。

## 真・女王編

## ● 荒れ狂う闇! 女王vsビースト

ぱっかーん!

ホテルの屋上では、ビーストがフレンズ型セルリアンを蹴散らしていた。あれから増援も現れたが、彼女の敵ではなかった。あれほど蠢いていた奴らが、あとわずか数体となっている。しかし長い戦いで、流石のビーストも息が上がっていた。

グゴゴゴゴッ!!?

ここで大きな地震が起こり、海から大量の噴煙が噴き出した。とうとう海底火山が本格的に噴火を始めたのだ。

ホテルが激しく揺れ、ビーストもよろめいた。すると下の階から大きな音が迫ってきた。何かが天井を次々とぶち破りながらこちらに迫ってくる。その気配に、彼女はゾクリと体を震わせた。

そして屋上のヘリポートを突き破り、サーバル、カラカル、ビーストを模した3体のフレンズ型セルリアンが現れた。ビースト型の頭上に、女王セルリアンの顔の影が浮かんでいる。

女王「あの絵の中で、特に強い輝きのこもった3人だ…。打ち破れるかナアツ！」  
女王の叫び声と共に、3体が一齐にビーストに向かつてきた。その突進に巻き込まれた残っていたセルリアンは、あつという間に体が千切れ跳び、粉々になって消えてしまった。

グワツシャアアン!!!

そのあまりのスピードに反応が追いつかず、ビーストはかわすどころかろくに防御もできないまま、まともに攻撃を喰らってしまった。

何が起こったのかを理解する暇もなかった。気づいた時には体が宙を飛んでいて、そのままビーストは壁に激突し床に倒れ込んだ。全身に凄まじい激痛が走り、息をすることができない。そして体から力が抜けてゆき、感覚がなくなっていた。

ビースト『いけない、立ち上がらないと！ここで負けるわけには、いかないん、だっ…。』

そんなビーストの意思とは裏腹に、彼女の意識はどんどん遠くなつてゆき、視界が闇に覆われていった。その中に思い出深い相手の顔が、次々と現れては消えてゆく。

ビースト「ハカセたち…、イエイヌ…、キュル…る…。」

そしてそれまで輝いていた紋章も消えてしまった。ビーストは意識を失い、動かなくなつた。

それを見て、女王は高笑いをした。

女王「アーハッハッハ！勝った！勝ったゾオ！所詮獣の力などこの程度、今度こそ邪魔はさせない！」

海から集まってきたセルリウムはすでに建物全体を覆い尽くし、屋上まで伸びてきている。そして倒れているビーストを取り込もうと、ジリジリと迫ってきた。

● 浮上

同じ頃、キュルル達の目の前の海面に、ボコボコと泡が浮かび上がってきた。

メガネカイマン「何ですか!？」

G・ロードランナー「セルリアンか!？」

フレンズ達が身構えていると、海面が大きく盛り上がり、そこからジャパリバスが現れた。

ゴリラ「かばんさん達だ！」

イエイヌ「よかった、無事だったんですね！」

運転席の中では、かばんさん、サバル、助手、そしてアライさんとフェネックが息も絶え絶えな様子で倒れていた。

そしてずっとみんなを励まし続けていたラッキーさんが、喜びの声をあげた。

ラッキーさん「ヤツタ、海上ダヨ！」

アライさん「ハア…、苦しかったのだ…。」

フェネック「死ぬかと思つたよ…。」

助手「『君子危うく散りかける』…、もう海はこりこりなのです…。」

サーバル「うみや…ありがとうサーバル…。」

かばん「ゼエ…、空気つて、こんなに美味しかったんだ…ハア…。」

海獣のフレンズ達が、バスを船の近くに運んでかばんさん達を引き上げた。

みんなしばらくのびていたが、5分ほどで息を吹き返した。

そしてサーバルがかばんさんの隣でこう言つた。

サーバル「はあはあ…、やったね、かばんちゃん！」

かばん「ふう…、ホント、もう駄目かと思つたよ。まさか神獣のみんなが力を貸して

くれるなんて！今度はちゃんとお礼を言う方法を考えないと…。」

サーバル「そんな事より…、はい！やくそくだよ、かばんちゃん！」

そう言つて、サーバルは胸につけていた赤い羽をかばんさんに差し出した。

かばん「…うん…！」

それを見て、かばんさんは目を潤ませながら帽子を脱ぐと、サーバルの前に差し出した。そしてサーバルが赤い羽を帽子に刺すと、満面の笑みを浮かべた。

かばん「…おかえり、サーバルちゃん!!?」

サーバル「ただいま、かばんちゃん!!?」

そして2人は笑い合った。

そこへ、キュルルが話しかけてきた。

キュルル「みんな無事でよかった…!おかえりなさい!体はもう大丈夫なんですか?」

かばん「うん、何とかね。海底火山はフィルターを張り直してきたから、地震と海のセルリウムは落ち着くはず。…詳しい事は後で話すとして、ピーストは来ているの?」

キュルルは唇を噛むと、ホテルの方を向いた。

キュルル「みんなのピンチに駆けつけてくれました、でも…。まだ、あそこです…。」  
ホテルはセルリウムでびっしりと覆われていて、まるで真っ黒で巨大なセルリアンのようだった。

かばん「そう…。」

キュルル「結局僕は、最後まであの子に頼ってしまいました。僕たちを逃して、誰の手も届かないあの場所に…。ちっ…。くしょう…。!」

キュルルは目をつぶって歯を食いしばると、涙をポロポロと流しながら体を震わせました。そんな彼にみんなが声をかけた。

博士「キュルル、しっかり前を見るのです。幾多の戦いを乗り越えてきたあの子があれほど取り乱したのですから、余程のことが起こっているのでしょう。ですが、誰よりもビーストのことを気にかけてきたお前が、あの子を信じてあげなくてどうするのですか。」

助手「みんなが全力を出したからこそ、誰一人欠けることなくここにいられるのです。だからビーストは、気兼ねなくあそこで戦うことができます。『万事を尽くせば天命が来る』…、もはや我々にできるのは、彼女の勝利を祈って待つ事だけなのです。」

かばん「あの子は僕達の肩を蹴って、駆け上がって行ったんだよ。最後の決着をつけるために…。」

サーバル「大丈夫だよ、あの子は必ず帰ってくるよ！」

アライさん「心配ないのだ！あんなに強いフレンズは他にいないのだ！」

フェネック「下ばっかり向いてると、あの子におかえりって言えないよ。」

それを聞いたキュルルは、拳で涙を拭った。

キュルル「…うん、そうだね。もう泣かないよ！」

そしてキツとホテルを見上げて叫んだ。

キュルル「ビースト、勝って！そして…、戻ってきて、僕たちの所に!!」

「頑張って!」「負けないで!」「諦めないで!」

キュルルの言葉を皮切りに、他のフレンズ達も口々にホテルに向かって声援を送った。

● 本心（ワタシ）

女王「ん……？ ナンダ？」

女王は大きな違和感を感じた。何か様子がおかしい。3体のフレンズ型セルリアンもきよときよとあたりを見回している。すると急速に地震が収まり、セルリウムの勢いが止まった。

かばんさん達の活躍により、海底火山が鎮静化したのだ。そしてビーストの手枷が、かすかな輝きを放っていた。

「…おい、…おい、起きなよー！」

ビースト「…う……？」

すぐそばから誰かの声がして、ビーストは目を開けた。すると薄暗い空間の中にトラのフレンズが立っていて、こちらに手を差し伸べている。

その子は長袖のワイシャツの上に赤いチェック柄のブレザーを着ていて、下はオレンジ色の半ズボンにガーターベルトとガーターストッキング、そしてロングブーツを履い



ている。両手に真つ白な手袋をはめて、首には赤茶色の蝶ネクタイ、そしてふわふわでボリユームのあるショートヘアには、服と同じ柄の小さなシルクハットがちよこんと乗っかっている。

「何手こずつてるんだい？ほら、さつきと起きて、ぱっぱと片付けなよ！」

しかし、ピーストは指一本動かすことができなかつた。そして相手の方を見つめたまま、投げやりにこう言つた。

ピースト「… 硬い箱の中で目を覚ましたら、突然頭の中に『戦え。』と声が響いてきた。そしてがむしやらに走り出し、それに導かれるままセルリアンを吹き飛ばした時に私は確信した。これこそが私に課せられた使命、かつ生きる意義なのだ。」

それから今日まで一人で戦い続けてきた…。あの声はお前だったのか？だが何を言われても、私はもう動けない。お前がなんなのかは知らないが、こんな役立たずはほつといてどこへなりと行くといい。」

それを聞いて、その子は一瞬キョトンとしてから吹き出した。

「ぶわははは！バカだなあ、そんな事できるわけないだろう！あのね、ワタシはキミの本心、立派なキミの一部だよ！そしていつもキミの頭の中に響いていた声は、眠る前のキミ自身の声なんだ！」

ピースト「私の声だつて…？その私は何をしてたんだ？やつぱりフレンズを食べてい

たのか？」

するとその子は顎に手を当てながら考えた後、こう言った。

「うくん、今ワタシが過去の事を全部話しても、キミは信じてくれないだろうね。ま、おのずと分かるから。ただ、キミはフレンズを食べちやった事はないから安心して。」

「話を戻すよ。いいかい、目が覚めたキミは、過去の自分の声を使命だと勘違いし、セルリアンなんかの言葉を鵜呑みにしたあげく、極力フレンズと関わらないっていう、無謀極まりない生き方を選んだんだ。はあ…、ほんつと単純というか、素直なんだから。」

「ホントのキミは、勇敢な騎士なんかじゃない。寂しがり屋で泣き虫な甘ったれ、そして誰よりも優しい奴なんだよ。だから過去のキミは、あの言葉で自分を奮い立たせ、なんとか戦っていたんだ。」

「けどキミは、それを使命だと思い込んだ。そして戦いしかすがるものが無かったもんだから、本心（ワタシ）を無理矢理押さえ込んで、使命に忠実な理想の自分を演じ続けたんだ。」

しかしいつまでも抑え込めるもんじゃない。これが漏れ出すたびに、キミは理想と本心の板挟みになって悶え苦しんできた。そしてその苦しみを、破壊という形でごまかし続けたんだ。」

ビースト「え…？しかし黒い輝きが…」

「あのね、キミのけものプラズムは感情に大きく左右されるんだ。誰かを守るために力を使えば白く輝くし、逆に自分の愉しみだけに使えば黒く染まる。キミは黒い輝きを纏うたび、闇に飲まれるーとか自分が自分じゃなくなるーとか心配していたけど、なんのことはない、心が壊れないように騒いでただけなんだよ。」

「だいたいさ、普段よりハデな事をして気晴らしするつてのは、誰でもやってる事だよ。それで正気を失うなんてありえない。」

それを聞いたビーストは、自嘲気味に呟いた。

ビースト「…そんな弱い私が、パークを守るだなんて…、はは、こいつはお笑いだ。いや、情けなすぎて笑い話にもならないな…。」

私にはもう、何も無い…。」

するとその子は、苛立たしげに怒鳴った。

「あのさあ、弱くて当たり前なんだよ！体と違って、キミの心はまだ赤ん坊なんだ！

そんなキミが、悩んだり迷ったり失敗したりするのは当然だ。その時は周りから助けられたり怒られたりしながら、成長すればいいんだよ。」

ビースト「!!?…そんな大切な事、何で今まで黙ってた?!?」

「言ってたさ、何度も！だがキミは理想の自分を守るために、ずうつと聞こえないふりをしてたんだ。ここにきてようやく言葉が通じるようになったのは、ひどく痛めつけられ

て耳をふさぐ気力もないってのもあるが…、弱いキミを受け入れてくれる誰かを見つけたからじゃないのかい？」

それを聞いて、ビーストはハツとした。

かばんさん達は、ジャングルで倒れていた彼女をととても大切に扱ってくれた。

博士は彼女を理解し、優しく接してくれた。内なる声におののき、訳がわからなくなつてそこから飛び出してしまつても、決して見捨てようとはせず、迎えにきてくれた。イエイヌは、自分の身が危ないにも関わらず守ってくれた。

そしてキュルル。彼はどんな状況に陥つても、最後まで信じてくれた。

ビースト「ようやく…分かった…。私は使命のために戦つてたんじやない、誰かを守るために戦つてんだ…！そして私も、守ってもらつてんだ！」

ビーストの目に力強い輝きがともし、体に力が蘇つてきた。そして彼女がよろめきながら立ち上がると、目の前の子の姿が揺らいでどんどん縮んでいった。

「よかつた、やっと気づけたね。それじゃあ、この子も大切にやってくれよ。ずっとキミに見つけてもらえる日が来るのを待つてんだ。本心つてのは、押さえ込んで見て見ぬふりをするものじやない。正面から向き合つて理解するものなんだよ。」

そして、小さな姿のビーストへと変わった。その子は、両手で顔を覆つてしくしく泣いていた。ビーストはその子のそばにしゃがむと、微笑みながら優しく声をかけた。

ビースト「ごめんね、長い間一人にして。でももう大丈夫、これからはずっと一緒だよ。」

するとその子はピタリと泣き止んだ。そしてゆっくりと顔を上げると、涙でうるんだ大きな瞳でビーストを見つめ、おずおずと彼女に向かって両手を伸ばした。

ビーストはその子を抱き上げると、そのままギュッと抱きしめた。するとその子は、すっかり安心した様子で腕の中で寝息を立て始めた。

ビースト『…ちっちゃくて軽くて、ホワホワして温かい。』

ビーストは穏やかな笑みを浮かべながら、じつとその寝顔を見つめていた。

すると彼女の耳に、キュルルやフレンズ達の声援が聞こえてきた。

ビースト「…戻らないと！」

彼女がこう呟くと、腕の中のビーストが輝き始めた。そして、その子は光となって彼女の胸の中へ飛び込んでいった。

そこに宿ったほのかに温かい輝きから、一筋の光が伸びている。そしてその向こうから、みんなの声が聞こえてくる。それに向かって、ビーストは暗闇の中を駆け出した。

● 最後の一撃！ 暗黒 v s 太陽

突如強力な輝きの気配を感じ取り、3体のフレンズ型セルリアンは一斉にビーストの

方を向いた。するとなんと、瀕死の状態だったはずの彼女が立ち上がった。それを見た3体はすぐさま彼女に飛びかかった。

女王「この、死に損ないガアツ！」

ドカカカツ！

3体の攻撃が当たった：ように思えたが、彼女の体を包んだ強烈な輝きがそれらを押し返していた。

と、サーバル型の体がぐらりとよろめいた。よく見るとビーストの右の手刀が、その胸に深々と突き刺さっている。そしてサーバル型が弾け飛ぶと同時に彼女が右腕を薙ぎ払うと、強い輝きと衝撃が巻き起こり、残りの2体も勢いよく吹っ飛ばされた。

ゴシヤァン！

2体は壁に叩きつけられた。そして壁とビースト型に挟まれたカラカル型は衝撃に耐えきれず、全身が碎けてバラバラになってしまった。

女王「バカナ：：なんだこのチカラハ：。」

女王の驚愕と恐怖の入り混じった視線の先には、輝きをまとったビーストが静かに佇んでいた。その瞳からは迷いのない、決然とした光が見て取れる。

彼女はゆっくりと息を吐くと、両足を踏ん張り身構えた。すると頭の紋章が、これまでになく強く輝き始めた。今まで欠けていた部分にも模様が現れ、全体が炎のように揺

らめいている。そして野生動物のようだった彼女の大きな手が輝きとなって弾け飛び、細くて華奢なフレンズの手となった。

その勢いはどんどん増してゆき、ついには彼女の全身が白く激しく輝きだした。そのまばゆさは、あたかもホテルの屋上に小さな太陽が現れたかのようだった。

その圧倒的な力に押しされ、女王がビリビリと震えた。

女王「ば…、化獣（ばけもの）メ…！」

ビースト「その通りだ女王…、お前以上の、なっ…!!!」

女王「ふざけるナア！きさまはついさっきまで死にかけていたんだぞ、いくらビーストとはいえこれほどのパワー、一瞬で引き出せるわけがナイ！それこそ奇跡でも起きない限りハツ…、ン？キセキ…、マサカツ!!？」

とつさに女王が天を仰ぐと、パークのあちこちから立ち上った輝きの奔流がホテルへと集まって来ていた。

その頃、船の上ではキュルル達が声援を送り続けていた。そしてキュルルの腕のラツキービーストは、ホテルでの出来事をパーク中のラツキービースト達に送信し、全てのフレンズにビーストの活躍とキュルル達の声を届けるよう働きかけていた。これにより、各地のフレンズ達も応援に加わった。

こうしてみんなの心が一つとなって、ホテルを中心として大規模なけもハーモニーが

起こった。そしてその力は、全てビーストに流れ込んでいた。

女王「ア、ア、ッ、しっこいしっこいしっこいしっこい! どうあっても邪魔するつもりかアッ!

ビースト型セルリアンはゆらりと立ち上がると、全身を震わせ雄叫びをあげた。するとホテル中を覆っていた大量のセルリウムが、一齐にビースト型に集まってきた。それらは折り重なり絡み合って、グネグネと蠢きながら何かを形作ってゆく。

そして女王の顔をしたビースト型セルリアンとなった。大きさはビーストの倍、そしてその体は鎧のような筋肉で覆われていて、全身から黒い炎のような輝きが噴き出している。

女王「グオオオツッ!」

女王の咆哮と共に凄まじい風が向かってきた。ビーストが吹き飛ばされないようグツと体を縮めると、女王が右の拳を握りしめた。凶々しい気配がどんどんふくれあがってゆく。するとその全身を覆っていた黒い輝きが右手に集まってゆき、真つ黒な炎の渦をまとった巨大な5本の爪が形成された。そして女王は爪を構えると、彼女めがけて一直線に襲いかかってきた。その様はまるで黒い光の矢のようだ。

一方ビーストも右手に力を込めた。すると輝きが指先に集まってゆき、5本の白く輝く爪となった。そして思い切り地面を蹴ると、白い光の矢となって女王に向かっていっ



た。

しかし2つの矢がぶつかり合うかに思われた次の瞬間、ビーストの体がガクンと止まった。

なんとカラカル型の腕が、足に絡みついてビーストの動きを封じていた。そして女王の爪が、唸りを上げながら彼女の頭めがけて振り下ろされた。

ガツシイイン!!

ビーストはとっさに上を向き、口で相手の爪を啜えて受け止めた。あまりの衝撃に両足が床にめり込んだが、彼女は怯まずにそのまま体を大きくのけぞらせた。そして女王を思いつき床に叩きつけると同時に、相手の爪を噛み砕いた。それからその胸に飛び乗って、渾身の力を込めた右の爪を女王の頭に突き入れた。

ドオオオオンツ!!!

まるで小型の隕石が落ちてきたかのような爆音と衝撃により、屋上が吹き飛んだ。それでも勢いは止まらず、ビーストは女王と一緒に天井をぶち破りながら、どんどん階下へと落ちていった。そして何枚目かの天井を破ったところで、ついにビーストの爪が女王の頭を貫いた。

女王「ウガアアアア!!!」

その先に、キュルルのスケッチブックが落ちていた。そして落下してきたビーストの

鋭い爪が当たった。するとそれは一瞬で粉々になり、女王の断末魔と一緒に部屋ごと吹っ飛んだ。

激しい戦いの衝撃と輝きは、船の上のキュルル達にも伝わっていた。そして大きな音と共に屋上が吹き飛んだかと思うと、そこからどんだん下の階へと亀裂が走ってゆき、ついには海中で大きな爆発が起こった。すると轟音を轟かせながらホテルが倒壊し始めた。

博士「ホテルが…！」

キュルル「ビーストオオオ!!!」

そしてあつという間にホテルは崩れ去り、瓦礫の山となった。キュルル達はその様子を呆然と見つめていた。

## ◎ ビーストレポート 《アムールトラ》

それからキュルル達は、ホテルの跡地だけでなく山も海も…パーク中を探し回った。ラッキービーストにお願いで、各地のフレンズ達にも連絡をした。しかしビーストの行方は、全くつかめなかった。

ただホテルの瓦礫の上に、彼女の手枷だけが転がっていた。その内側をラッキーさんがスキャンしてみると、アムールトラというビーストの本当の名前が刻まれていることが分かった。

ラッキーさんの指示で、これをかばんさんが研究所のコンピュータに打ち込んでみると、彼女に関する様々な記録と映像が表示された。

アムールトラは、動物だった時にヒトに助けられた経験のあるフレンズだった。そのせいか、誰にでも分け隔てなく接する明るい子でみんなから好かれる人気者であったが、寂しがり屋で一人ぼっちが大嫌いという一面もあった。

そして彼女は、ヒトがいた時代に生まれた最後のビーストだった。

そもそもビーストとは、時々生まれる強い力を持ったフレンズの事だった。性格は血

気盛んでヤンチャな子が多く、外見上の際立った特徴として、両手首に鎖の付いた厳つい手枷がはまっていた。

それに加えてひとときわ大きな手をしていたアムールトラは、さぞかしわんぱくに育つのだろうかと思われていた。しかし彼女は戦いが嫌いで、その恵まれた力をみんなを楽しませるために使っていた。

体を動かすのが得意で、誰かを笑顔にすることに大きな喜びを感じていたアムールトラ。パークのイベント会場では、彼女のショーがたびたび開催されていた。強靱でしなやかな体から繰り広げられる美しい演技の数々…、その素晴らしさに誰もが魅了され、惜しめない賞賛を送った。そんな彼女の夢は、サーカスのスターになる事だった。

そしてある日、一人のヒトの子と知り合った。容姿がキュルルとそっくりなその子は、いつもスケッチブックを持ち歩いていて、楽しい事があるたびに絵を描いては誰かにプレゼントしていた。そして2人は、何度も言葉を重ねるうちにすっかり仲良くなつた。彼女とその子が遊んでいる姿が、記録映像にも何回も映っていた。

それを見た誰かがこう言った。

「アムールトラの大きな手は、戦うためのものじゃない。たくさんの小さな手を、残さず包むためのものなんだ」と。

彼女はみんなに温かく見守られながら、力の使い方を学び、心を育んでいった。大き

な体と心を持ったパークで最も優しい騎士（ナイト）、それがアムールトラだった。

けれども彼女の夢は叶わなかった。ある日、アムールトラはあの子に自分の姿を描いてもらっていた。ペンの走る音に耳を傾けていると、ふと手枷が目にとまった。そして彼女はこれからの事をぼんやりと考え始めた。

アムールトラ『そろそろ私も一人前か……。そうになったらこの手枷ともお別れだな。そういえばこのおつきな手は拳を守る手袋で、力がコントロールできるようなれば小さくなるのではないか、ともいわれてたつけ。そうなたらどうなるんだろう、この子みたいに細かい事もできるようになるのかな？』

そうこうしているとあの子が顔をあげ、スケッチブックを彼女に見せた。するとそこには手枷の無い、華奢な手をしたアムールトラが描かれていた。

あの子「強くなったお姉ちゃんは、こんなだと思うんだ。」

アムールトラ「わあ、素敵だね！」

あの子「この姿を見たら、きつと誰もがそう言うよ。待ってね、これからお姉ちゃん周りに他のみんなを描くから。」

こう2人が笑い合っていると、突然セルリアンが現れた。そいつはその子を取り込んで女王セルリアンとなると、今のサバンナに当たる場所を拠点とし、セルリアンを統率して全世界を保存し、永遠に再現しようとした。

だが、そうはさせまいとパーク中のフレンズが必死に戦って、なんとか女王を追い詰めた。すると女王は、そこにいたフレンズを全て吹き飛ばそうと大爆発を起こした。そのままだったら、みんなやられてしまっただろう。

しかしアムールトラが立ちはだかり、全けものプラズムを放出してフレンズ達を守った。戦いに使える分だけではない、体を構築する分も含めてだ。彼女の負担は想像を絶するものだったが、それだけみんなを守りたいという思いが強かったのだ。

そして爆発が収まった後みんなが見たものは、気絶したあの子と女王のコア、そして全身がぼろぼろで、息も絶え絶えなアムールトラだった。

フレンズ達はアムールトラに駆け寄ると、残った力を分け与えた。それにより彼女はなんとか一命を取り留めたものの、そのまま長い眠りについた。一方助けられたあの子は、医療機関に運ばれて意識を取り戻し、天寿を全うした。

また当然の事ながら、女王のコアは排除されることとなった。しかし残った者達が多量に頑張っても、コアを破壊することはできなかった。そして不思議な事に、アムールトラの体は、まるで根が生えているかのようにそこから動かさなかった。もしかすると、こうして眠っている間も、彼女は女王からみんなを守り続けているのかもしれない。

いつか女王が動き出す時、アムールトラも目覚めるのではないか…、そう考えたヒト達は、この事をいつまでも語り継ぐための記念碑として、コアとアムールトラの周りに

施設を建築した。さらに万が一建物内部で異変が起こった場合に備えて、監視装置と頑丈な檻を用意して彼女を守った。

博士「ヒトの話は長つたらしいのです、まったく。」

助手「『言うは易く伺うは難し』…。お前達、ついてきてますか?」

サーバル「へく???うん、分かんないや!」

アライさん「全く分からないのだ、アライさんにも分かるように言つて欲しいのだよ!」

フエネットク「よーするに、ビーストはアムールトラつて名前で、とつてもいいフレンズだつたつてコトだよ。」

アライさん「なるほどなのだ!でもどうして誰も覚えていないのだ?」

かばん「パークからヒトがいなくなつて伝えるものも無くなつて、またさらに長い時間が流れた。そしてフレンズ達は、いつの間にかそのことをすっかり忘れてしまったんだと思う。…あれ、これは?」

その映像をよく見てみると、研究室の壁に見慣れないドアが映っていた。そしてかばんさんがそこを調べてみると、壁の一部が開いて隠し部屋が現れた。その中に入つてみると、かばんさんの帽子の羽に反応して部屋の電源が入った。

そこには壁一面の機械とモニター、そして月の周りを周回している人工衛星に関する資料があった。それによると、サンドスターは月の磁気を受けて変質するため、衛星を使ってこの星に届く量の調整を行なっていたらしい。

隠し部屋の電力が回復した事で人工衛星も再び活動を始めた。これによりサンドスターの性質が戻った事で、徐々にパークの地形も元に戻り、各地の水が引いて水没していた施設がまた使えるようになり、フレنزの野生解放が復活し、ヒトの輝きから強力なセルリアンが発生する事は無くなった。

#### ● 記念碑

すっかり水が引いた遊園地の一画に、文字の書かれているプレートがはめ込まれた小さな台座が設けられ、アムールトラの手枷が飾られている。そこへカラカルとキュルルが、神妙な面持ちでやってきた。

カラカル「アムールトラ：草も木も山も海も：アンタのおかげですっかりパークは元通り：平和な世界になったのよ。それなのに：それなのに肝心のアンタは…。」

キュルル「奇跡のフレンズ・アムールトラの手枷」か…、まるでお墓だよ…、縁起でもない…。」

博士「冗談じゃないのです、まったく。」

後ろから博士の声がして、キュルル達は振り返った。そこには博士と助手、そしてか



ばんさんとサーバルが立っていた。

サーバル「あのね、それはあの子が帰ってくる時の目印なんだって！」

それを聞いた2人は驚いた。

カラカル「ええっ!!?」

キュルル「あの子が…、帰ってくる!!?」

するとかばんさんがうなずいた。

かばん「過去の記録の中に、ビーストに関するものが見つかったんだ。それによると、この手枷は誰かがつけたものじゃなくて、ビーストが生まれつき持っている毛皮の一部だったんだよ。もしあの子に何かあったのなら、これも一緒に消えてしまう。でもほら、まったくそんな気配はないよね。」

博士「ビーストとは、時々生まれてくる強大な力を秘めたフレンズの総称だったそうなのです。彼女らはまず戦いを覚え、その中で他者と関わり言葉と心を育んでいったのです。そして力の操り方がしつかり身につくと、手枷は外れるそうなのです。」

助手「その手枷には、ある程度ビーストの感情を鎮めたり力を抑えたりする力もあって…、言ってみれば独り立ちするまでの補助器具だそうなのです。『備えあれば嬉しいな』、なのです。」

そしてかばんさんが、コンピュータから見聞きしたアムールトラの過去を2人に語っ

た。

かばん「…とまあこんな事があつたそうなんだ。でも長い年月の間に、フレンズ達は女王事件とアムールトラの事をすっかり忘れてしまった。ここからは監視装置の記録も合わせた推測になるのだけど、ある日、なんらかのトラブルが起きて衛星が止まり、パークのサンドスターが変異を始めた。ちようど、フレンズから野生解放が失われたあたりだね。それを感じ取つたアムールトラは、長い眠りから目覚めて施設を飛び出した。」

「彼女はビーストとしての力の他は、知識も経験も言葉も、全て忘れてしまつていた。そしてパークの各地で強大な力を振るい続けた。でもフレンズさん達の話をまとめると、彼女はその力をセルリアンにしか使わなかつたんだ。ただ、知つての通りセルリアンはものを取り込むからそれごと壊してしまつたり、力が強いから周囲の自然にまで被害が及ぶ事もあつたけどね。」

カラカル「ちよつと待つて。ならあの噂はなんだつたのよ!?!?」

かばん「どうやら彼女の悪評を広めていたセルリアンがいたようなんだ。緑色の小さなやつで、いつも他のセルリアンの陰に隠れていたらしい。そしてビーストの力と相まつて、みんな彼女は怖い存在だと信じ込んでしまつたんだ。」

キュルル「じゃあモノレールで聞こえた小さな声は、そいつだつたのか…。」

カラカル「あたし達の勘違いだったの…？なら、あの子に謝らなきゃ！」

かばん「それからさらに長い時間が経ってから、キュルルさんがコアから出てきたんだ。君が彼女を思い続けたのは、もしかすると過去の出来事が関係しているのかもしれない。けど、気にしなくていいよ。過去も女王も関係ない、キュルルさんはキュルルさんなんだから。」

すでにサーバルは何回も同じ説明を聞いているのだが、まだよく分かっていないようでポカンとしている。そしてカラカルが首をかしげた。

カラカル「でもそれなら…、何であたし達の前に現れないのよ？」

かばん「…分からない。けど経験を積んだピーストの中には、神獣になった子もいたらしい。もしあの子がそのような存在になってしまったのだとしたら、もう僕達の考え方では測れないよ。」

キュルルは、うつむきながら体を震わせた。

キュルル「いいんだよ…、そんな事は…！生きてさえいれば…、必ずまた会えるよ！だって…、だってあの子が帰ってくる所は…！」

そして顔を上げ、両腕をバツと広げた。

「……しかないんだからさ……！」

キュルルは涙を浮かべながら、満面の笑みを浮かべた。それを見たみんなも笑顔で応

えた。

## ビヤツコ編

## ◎ いつかまた会えるよね

キュルルとカラカルは、ジャングルの中をさまよっていた。

カラカル「…ねえ、ホントに大丈夫なのキュルル？」

キュルル「おつかしーな、そろそろ着くはずなんだけど…ああっ!?? 地図が逆さまだった！」

カラカル「ウソでしょーっ!??」

キュルルはカラカルと一緒に、パーク中を回ってフレズ達に手紙や伝言を届けるメツセンジャーとなった。文字の分からないフレズに代わって、文章や絵を書いてあげたりもしている。

今日はジャングルにお使いに来たのだが、慣れない場所で迷ってしまったようだ。キュルルはしばらく地図とにらめっこしていたが、不意に顔を上げた。

キュルル「よし！こつちだ、間違いない！」

こう言つてズンズンと歩き出したキュルルに、カラカルが心配そうに声をかけた。

カラカル「なんなら木に登って、周りを見てきてもいいのよ？」

キュルル「もうちよつと待つて！早く一人でみんなを助けられるようになりたいんだ！」

カラカル「…そうね、しつかりやりなさい！」

そう言うとかラカルは、キュルルの後について歩き出した。

キュルルがパーク中を回っているのは、アムールトラを探すためでもある事をカラカルは知っていた。そんな彼を誇らしく思うと同時に、自分だけを見てくれない事に少しヤキモチを妬いていた。

そして樹上の気配に、心の中でこう呟いた。

カラカル『何やってんのよ、もう…さっさと出てきなさいよ！』

そんな2人の様子を、高い木の上からじつと見つめている大きなフレンズがいた。頭には立派なトラの縞模様が刻まれていて、オレンジ色の長い髪が風に揺れている。その子は先程からずーっともじもじしていた。

『パーク中大騒ぎになっちゃってる…。気まずいよ〜！』

とりあえず大きく深呼吸をして、よし、行くぞ！と気合を入れ直した。しかしどうしてもあと一步が踏み出せない。そして毛皮から、アムールトラの顔が描かれている一片のスケッチブックのかけらをつまみ出すと、また悩み始めた。

『これも謝らないといけないの…ああでもどうしよう〜！』

## ● 大平原の白い巨峰

すると、とうとう彼女の乗っていた枝がベキン！と折れた。

「あ。っ!!!」

どっしーん！

そして派手な音とともに、草に覆われた地面に尻餅をついた。

「あてててて…。」

お尻をさすったり体についた葉っぱを払ったりしていると、その音を聞きつけたキュルルとカラカルがやってきた。

彼女を見たキュルルは、全身を震わせ、目からポロポロ涙を流しながら叫んだ。

キュルル「ビー…、アムールトラアア!!!」

それからアムールトラに駆け寄ると、勢いよく抱きついた。そして、彼女の名前を何度も叫びながらわんわん泣き出した。

キュルル「会いたかった…、会いたかったよお…!」

アムールトラはその勢いに圧倒されたが、しっかりと彼を抱きしめると、小さくなった手で頭を撫でた。

カラカルは、目に涙を浮かべていた。

カラカル「おかえり！もう、さつきから何やってたの？無事なら早く出てきなさいよ！」

2人の涙を見て、アムールトラは心の中で首を傾げた。

アムールトラ『どうして2人とも、泣いているんだろう…？』

キュルル「カラカル、この子がそばにいるって知ってたの!!?」

カラカル「木の上からずくと心配と音がしてたのよ。」

アムールトラ『あ、バレてたんだ…、恥ずかしい〜!』

彼女は顔を赤らめながら気まずそうに頬を掻いた。それからトラの子の顔が描かれた紙の切れ端を2人に見せながら、流暢に喋り出した。

アムールトラ「ごめんね。パーク中大騒ぎになってるし、キュルルさんのものをバラバラにしちゃった事も謝らないと思ったら、どうしても踏ん切りがつかなくて…。」すると2人は、凄くびっくりした顔をした。

キュルル「へ!!?アムールトラ…。」

カラカル「アンタ、そんなスラスラしゃべれたの!!?」

アムールトラ「ああ、これはね…。」

女王「ウガアアア!!!」



断末魔の叫び声と共に、女王の体が激しく輝き大爆発を起こした。目の前が真っ白になり、もう駄目だと思った。

しかし次の瞬間、腕からカシャンという音がして私の体は空高く舞い上がった。そして全身に激しい衝撃が走り、そのまま気を失ってしまった。

それからどのくらい時間が経ったのだろうか。すぐそばで誰かの声があった。

？「…おい、…おい、起きんか！」

『う…、う…ん…』

私はゆっくりと目を開け、上体を起こした。あたりはどこまでも続く平原で、強い風が吹いている。これまでパーク中を走り回ってきたが、こんな所には来たことがない。そして目に前に、小柄なトラのフレームズが立っていた。

その子は全身真っ白だった。髪型はボリユームのあるショートヘアで、前髪にトラの縞模様がある。くりくりとした瞳は右目が青、左目が黄色のオッドアイ、毛皮は私と似たような感じで、上は長袖のワイシャツにベストにネクタイ、下はミニスカートにニーソックスを履いていて、お尻からは長くてしなやかな尻尾が生えている。そしてそれぞれ青と黄色の髪留め、手首の腕輪、足輪、尻尾の輪をつけている。

しかし見た目とは裏腹に、この子の放つ気配は今まで出会ったどのフレームズよりも圧倒的で、まるで目の前に巨大な山が立っているかのようだった。

私は思わず身をこわばらせた。

ビヤツコ「おお、我（われ）の気を感じ取ったか。見た目で判断せず、物事の本質を見極めようとする目があるのだな、感心感心。

だがそう固くならずとも良い。我はジャパリパークの西方を守護し風を司る者、四神獣のひとりビヤツコだ。」

「強い気を感じて来てみれば、手枷が外れたばかりのビーストであつたか。もはや新たに生まれるものも無くなって久しい…、こうしてあいまみえるのはぬしで最後かもしれないな。で、何用だ？ これからの身の振り方でも聞きに来たのか？」

そう言われて体を見回すと、手枷がない事に気づいた。それに全身もボロボロで、右手が特にひどい。

「私、は、あの…。」

ビヤツコ「無理に話さずとも良い。念ずれば大体分かる。それにぬしの事は、まだパークにヒトがおつた頃から知っておる。」

そう言うとその子は、私の目をじっと見つめた。

ビヤツコ「…：…どうやら手枷がここに連れてきたようだの。とりあえず目の前の敵は退けたが、その後は何も考えておらん…：か。

長き眠りの間に全てを忘れ、目覚めてからは誰も導く者が現れなかつたのでは無理も

ないか。

：まあ、体が癒えるまでゆっくり休め。それからどうするか考えるがよい。さらに力を磨いて神獣になるもよし、あるいはこれまで通りの生活を送るのもよいだろう。」

『これまで通り…。また一人ぼっちで戦い続けるのは嫌だなあ…。』

ビヤッコ「…ふむ、戦いが嫌いとは、珍しいビーストだ。おまけに一人が大つ嫌いときたか。

ならばここで暮らさぬか？苦しみばかりのパークに戻る必要がどこにある…。そして体力が戻ったら、我の手伝いをしてくれぬか。」

『え…?!?!』

私は改めて、目の前の子を見つめた。こんなにも強大な気を持つているのに、私が手伝うことなんてあるのだろうか。

ビヤッコ「ぬしらの基準で考えればこれ以上ないくらい元氣に見えるだろうがな、本来の力に比べれば今の我はぬしと同じくらい弱っておるのだ。

海の底の火山を鎮めたり、あれよあれよと元の姿に戻ってゆくパークを治めるのには結構な力があるものでな。

陽の光、風のそよぎ、水のせせらぎ、大地のうねり…。我ら四神獣は、ぬしらがなげなく目になっているものを管理しておるのだ。

ここで学び力をつければ、いずれぬしにもできるようになるだろう。さすれば、今よりもっとたくさんのフレンズの力となれる。」

そう言われても、話が大きすぎて私にはピンとこなかった。

ビヤツコ「今全てが分からずともよい。力がつけば、おのずと見えてくるであろう。さて、ここで暮らすのなら、この風に慣れなくてはな。まずはこの中でもゆったり眠れるようになれ。」

そんな無茶な、と思った。この強風の中では目を開けているのもやつとで、気を抜いたら吹き飛ばされてしまう。せめて体が万全の状態だったら、だいぶ違っただろう。

ビヤツコ「我にしてみれば、こんなの涼風も同然だ。これくらい凌げなくてはな。それになまじ元氣だと、できる事が多い分やるべき事を見失う。ボロボロだからこそ見つけられるものがあるのだ。」

よいか、風と争おうと思うな。風は目の不自由な巨人、こちらが少し方向を示せば、意のままに動いてくれるのだ。感覚を研ぎ澄まし、風の声を聞け。後は風が全てを語ってくれよう。

よいな？ キティ。」

『キティ？』

ビヤツコ「子猫という意味だ。我からすれば、ぬしの力はまだそれくらいだからな。」

我はずっとぬしを見ておるぞ。時がきたらまた会おう。」

そう言うのと、ビヤッコさんの周りにつむじ風が巻き起こった。そしてそれが収まった時にはその姿は消えていて、私は風の吹き荒れる平原に一人取り残された。

『困ったな…、どうしよう？』

とりあえず、もう少し風をしのげそうな所はないか探してみる事にした。しかし吹き飛ばされないよう這いずりながら移動してみたものの、疲れるばかりで道は全然捗らない。風の中に目を凝らしても、あたりはどこまでも続く平原で、身を隠せそうなものはない。

『いっその事、吹き飛ばされちゃったらどうなるんだろう？』

そう思った途端、風で体が浮き上がり、凄い勢いでゴロゴロと転がった。

『目が回るう〜！お願い、止まってえ！』

私は無我夢中で両手を振り回した。すると爪に何かが引つ掛かり、なんとか体を止めることができた。

それは平原にポツンと立っていた、私の身長くらいの高さの低い木だった。私は必死にその細い幹に腕を回してしがみついた。

しばらくして、クラクラしていた頭がはつきりしてきた。

『ふう…。これなら思いつきり高く跳べば、トリの子みたいに飛べるんじゃないかなあ

『…』

風に乗って空を自由に飛ぶ自分の姿を想像して、私はちよつぱり愉快になった。そのまま飛んで行けば、いつかはこの平原も終わり、見知ったパークのどこかへ出るだろう。『でも…、いずれは地面に降りなきやいけないんだ。』

降りた先に待っているのは、孤独と戦いの日々…。それなら、ここにいた方が良いのではないかと思えてきた。

『…よし…あの子が言ったように、まずはここで眠れるように頑張ろう！』

そう考えた私は、木にしがみつきながら目を閉じた。

ゴオオオオ…

真つ暗闇の中で、強い風の音だけがはつきりと聞こえる。初めのうちはいつまた飛ばされるかという恐怖しかなかったが、しだいにくたびれてきて、体の力みが弛み、意識が途切れ始めた。

ぼんやりとした頭に、風の音が絶え間なく流れ込んでくる。

『…でも、どれも同じ音ではないんだな。』

よくよく聞いてみると、その強さや吹き付ける向きによって、風の音は微妙に違っていた。しばらくすると、音でどんな風なのか分かるようになってきた。私は風が弱まると眠り、強まると起きるを繰り返した。するとだんだん慣れてきて、強風の中でも眠れ

るようになった。

お腹が空いた時は、木になっていてる小さな赤い実を食べた。硬くて美味しくはなかったけど、不思議な事に一粒でも満たされた気分になった。

ここは時間の感覚がよく分からない。もう何年も経ったような気もするし、数分しか経ってないような気もする。すると不意に、風の中からビヤッコさんの声がした。

ビヤッコ「我の声が聞こえるか？なら次は、立ち上がって風の中を歩いてみよ。」

風が弱まった時を見計らい、私は木にしがみつきのながら立ち上がった。でもすぐに強い風が吹いてきて吹き飛ばされそうになり、慌てて身を伏せた。

『これじゃあ歩けないよ。風の強さごとに違う色がついてれば見分けられるのにな……。』  
その時ふと、風の中にビヤッコさんの匂いを感じた。音を聞いてみると、どうやら少し弱い風から匂いがするようだ。私は再び立ち上がると、それを頼りに少しずつ歩き出した。

『風と争っては駄目……。強い時はやり過ぎし、弱まった時に一歩踏み出す……。』  
そしてしがみついていた木が見えなくなるくらい歩いた頃、目の前につむじ風が巻き起こった。かと思うとそこからビヤッコさんが現れた。

ビヤッコ「おお、戻ったか！ここは我とキティが最初に出会った場所だ。どうやら風が見えるようになったようだな。我が力を貸してやったとはいえ、なかなか飲み込みが

早い。

風を見る鍛錬はこれくらいにして、今度は風に乗るとはどういうものなのか教えてやろう。さ、我の手をとるがいい。」

そう言つてビヤツコさんは右手を差し出した。その手を握ると、あたりの風が集まつてきて、私たちを包み込んだ。私はびっくりして、思わず声を上げた。

「わっ!!?」

● 誰かのための牙

しかしその声が終わる頃には、私達はどこかの森を見下ろす崖の上に立っていた。

『( )は…?』

ビヤツコ「平原の近くだ。キティも鍛錬を積めばできるようになるやもしれんし、あるいは我とは全く別のものを従えるやもしれん。」

…それにしても、弱音の一つも吐かぬとは。キティはずいぶん素直で熱心なやつなのだ！だがそれは、誤った教えに惑わされ易いとも言える。流されるだけでなく、時には自分の正義と照らし合わせてみるのも大事だぞ。」

『そーいえば、本心（ワタシ）にもそう言われたっけ。』

どうも私は、言われた事を真に受けて突き進むきらいがあるようだ。



ビヤッコ「まあ、こればかりはどんなに口で言っても身につくものではない。無数の声の中から己に必要なものを選び抜いて取り組むには、ある程度の知識と経験が必要だからな。初めのうちは失敗続きでも、いずれは見えてくるだろうて。」

『無数の声…か。そういうええばさつきから気になつてたんだけど、風の音に混じつて聞こえてくる小さな声、これはなんなの？』

ビヤッコ「風は匂いだけでなく、パーク中の声も運んでくるのだ。距離の近いものや数の多いもの、思いの強いものほど大きく聞こえる。集中してみれば、今のキティでも聞き取れるものもあるだろう。」

そこで私は目を閉じて、耳に意識を集中させた。風の中から聞こえてくるたくさんの小さな声、そんなわちやわちやと絡み合った音の中で、なんとか聞き取れたのは…。

「助けてーっ！」

『…？』

誰かの悲鳴だった。私は思わず目を見開くと、必死にあたりを見回した。

ビヤッコ「聞こえたようだな。」

『ねえ、今の声は…？』

ビヤッコ「この近くでセルリアンに襲われとるフレンズのものだ」

するとまた声が出た。

「誰かつ、助けて!!?」

私は眼下の森に目を凝らした。すると大きなセルリアンに襲われているフレンズがいた。その子は足から徐々にセルリアンに取り込まれている。

『助けないと!』

ビヤッコ「待て! いいかよく聞け。全ての声を救う事はできん。それにあのセルリアンは、今のキティでは到底敵わぬ。」

『そんなつ…、見殺しにしろって言うの!!?』

ビヤッコ「無理なものは無理なのだ。今やるべきはとにかく体を休める事。そして体力が戻ったらあの子の無念を晴らすがよい。」

『明日の私ならできるかもしれない…。けどあの子には今しかないんだつ!!?』

そして私は全身に意識を集中させた。しかしてんで力が入らない。

ビヤッコ「ほれな? そんな体で立ち向かっても犠牲が増えるだけ。がむしやらに向かつてゆくばかりでなく、少しは明日も考えながら行動する事を学ばねば、いくら体があつても足りぬ…。!!?」

しかし突然、私の全身から白い輝きが吹き上がり、右手に集まり始めた。ポロポロの右手に、白く輝く5本の爪が生成されてゆく。けれども体がどんどん霞んでいった。

私は自分の体を形成するもののプラズムを解放し、戦うためのエネルギーとしたの

だった。

ビヤッコさんは驚愕の表情を浮かべた。

ビヤッコ「いつ…、生命（いのち）の牙！」

『これでっ…、戦える！』

そして私は、すぐさまあの子の下へ駆けつけようと足に力を込めた。しかしビヤッコさんが目の前に立ちはだかった。

ビヤッコ「…駄目だっ！やめるのだキティ。」

『どいてー』

ビヤッコ「そうはいかん！ぬしの心意気は買うが…、100%失敗すると分かっている攻撃をみすみすさせる訳にはゆかぬ！」

『…っ』

ビヤッコ「残念だが我には分かる。その牙にあのセルリアンを倒せるだけの力はな  
いつ…？」

その言葉を聞いた私は、フツと目を閉じうつむいた。

ビヤッコ「さあ今すぐその牙を引っ込める。ボロボロなうえ手枷も失った今のぬしでは、ものの数分で命そのものが尽きてしまうぞ！」

ぬしの秘めたる力は凄まじい…、鍛錬を積み、我より優れた神獣になれるやもしれ

ぬ。無駄に命を捨てるでないっ！」

しかし私は、うつむきながらもはつきりと自分の意思を述べた。

「…いい、それで!!?」

ビヤツコ『なにっ…!!?』

そして顔を上げて、心の中でこう叫んだ。

『最初からあいつを倒そうなんて思っていない…、私の命が燃え尽きるまで、叩いて！叩いて!!? 叩きまくって!!! わずかな傷の一つでも残せばそれでいい!!』

ビヤツコ「それを無駄死にと言うんだ！」

『無駄じゃない!!? たとえ私が力尽きても、必ずみんなに何かを残せるはず…。あの子が逃げてくれれば、誰かにセルリアンの事を伝えてくれるだろうし、残った傷跡を見た他の誰かが、やつに立ち向かう勇氣を持つてくれるかもしれない。』

もともと私は、戦いの中で誰にも知られないまま消えてゆくつもりだった。そんな私の命が誰かの一步のきっかけになるんだったら…、こんな嬉しい事はないよ!』

ビヤツコ「…!!!」

そこへまた、あの子の悲鳴が聞こえてきた。

「お願い、助けて!!?」

「待ってて、今行く! ウオオオオオーッ!!!」

私は雄叫びを上げると、右の爪を構えながら、眼下のセルリアンに飛びかかっていった。

しかし突然、目の前にビヤッコさんが現れた。あまりに急だったので、私は腕を引つ込める事ができなかった。

ザシユツ……!

右の爪が、ビヤッコさんの左肩を貫いた。

「アアアツ……!!?」

ビヤッコ「……もうよい……、力を抜け、アムールトラ!」

そう言うと、ビヤッコさんは私の右手にそつと自分の手を重ねながら、私と一緒にふわりと宙に浮いた。その目は、これまで見た事のない優しさに溢れていた。

私は全身をガタガタと震わせながら爪を引き抜いた。昂っていた気持ちがあつと切れ、体から力が抜けてゆく。私は震える声でこう尋ねた。

「なん、でつ……、なんでそこまでするつ……!!?」

ビヤッコ「我は今の今までぬしをみくびつておつた。この傷はその詫び……。驚いたぞ……、ぬしは昔の我にそっくりだ!!?これはトラのさがというやつなのかのう……。」

「ビヤツ……コさん……。」

「同じく命を削るなら、我の方が良からう。我はぬしの何倍も生きた。……我にぬしほど

の決意があれば、あれくらいもの数ではなかったのだ。

ここで見ておれ、見ることもまた勉強だ！」

そう言うと、ビヤッコさんの体が旋風で包まれた。そして両腕に、物凄い力が溜まってゆく。

そしてビュツという音と共に、その姿が消えた。

ビヤッコさんは一瞬でセルリアンの目の前に現れると、両腕を叩きつけた。

ビヤッコ「疾風白虎拳!!!」

ドグワツ!!!

セルリアン「グオオオオオン！」

「きやーっ!!?」

両腕に込められた膨大なエネルギーが一気に炸裂し、巨大な風の渦がセルリアンの体を粉々に打ち砕いた。あの子も吹き飛ばされたが、どうやら無事なようだ。

すると巻き起こった風が一気に押し寄せてきて、私の周りで吹き荒れた。そして風の中から、穏やかなビヤッコさんの声があった。

ビヤッコ「アムールトラよ…、ぬしはまだパークに未練があるようだな。一旦戻って、これからの事をじっくり考えるが良い。」

『パークに…?でも、私の居場所なんて…。』

ビヤッコ「案ずるな、耳をすませてみよ！」

私は言われた通り意識を耳に集中させた。すると風の中からみんなの声が聞こえた。

「野生解放が使えるようになったよ！これならもうセルリアンに怯えなくても大丈夫だよー！」

「パークを元通りにしてくれたのは、ビーストなんだって！」

「ラッキービーストが見せてくれたよ！パークとみんなのために戦ってくれたんだ！」

「かばんさん達が言ってたよ、ビーストはアムールトラっていう、とっても優しいフレンズなんだって！」

「アムールトラに会いたいよ……。誤解してた事謝りたいし、ありがとうって言いたい！」

それを聞いたとたん、なぜか私の目に涙が溢れ出した。

『みんな……。私、一緒にいいの……。？』

すると目の前に、輝きを放つ小さな紙片がヒラヒラと舞い降りてきた。

ビヤッコ「忘れ物だ！ぬしと一緒にやってきたものだ……。それと餞別だ、私の輝き少し持つてゆけ！ゆめゆめ、命を捨てようなどと思うなよ！」

またいつか会えるのを楽しみにしておるぞ！達者でな……。」

そう告げると、ビヤッコさんの声は風の中へと消えていった。

そして紙片に手を伸ばすと、それがカツと強烈な光を放った。

気がつくくと、私は手枷が置かれた記念碑の前に佇んでいた。

「ここは…、沈んでいたはずの遊園地？ それにこれは私のジャラジャラ…、私がない間、一体何があっただらう？」

とここで、私は突然流暢に喋れるようになった自分に驚いた。そしてボロボロだった体も、いつの間にか綺麗になっていた。



## おかえりなさい編

## ◎ それから、これから

アムールトラ「みんなが私の事を心配してくれてる…、でも、もしかた怖がられたり、誰かを傷つけたらって考えると、どうしても姿を現す事ができなくて…。それで今日まで隠れてたんだ。」

カラカル「思い込みなんて、間違つてもなかなか変えられないものよ。あたしだつて、アンタが怖いやつだつてずっと勘違いしてたんだから。…ごめん。」

キュルル「その絵のかけらはアムールトラが持つててよ。ずーつと前の君を、ずーつと前の僕が描いたものなんだから！」

アムールトラ「いいの？ ありがとう！」

アムールトラはキュルルにお礼を言うつと、それを大切に毛皮にしまった。

キュルル「あ、アムールトラ…！」

カラカル「いい笑顔ね！」

アムールトラ「え？」

彼女は知らずに笑顔になっていた。こうして今日は、アムールトラが目覚めてから初

めて笑った日となった。

——ねえアムールトラ、気付いてる？

茂みからガガガサという音が近づいてきた。物音を聞きつけて、ゴリラ達がやってきたのだ。そしてアムールトラに気づくと口々にお礼を言った。

しかしその後で、ヒョウが首をかしげた。

ヒョウ「けど…、あの広場はなんやったん？」

彼女がワニ口セルリアンが広場を壊した事を伝えると、今度はみんなそれぞれ謝罪の言葉を口にした。

ゴリラ「疑って本当にすまなかった。じゃあ、せつかくだから広場を見ていってよ。サンドスターの力もあつて、もうすっかり綺麗になつてるし、ちようどかばんさん達も来ているんだ。そのうち運動会を開くから、ぜひ参加してくれ。」

そう言ったゴリラはニコニコしていたが、後の4人は不敵な笑みを浮かべていた。そしてイリエワニが、アムールトラの肩に腕を回した。

イリエワニ「あんな不意打ちで勝ち逃げしたりはしないよな？」

メガネカイマンの眼鏡の奥の目がキラんと光った。

メガネカイマン「忘れたとは言わせませんよ？」

ヒヨウとクロヒヨウが興奮した様子で彼女を見ている。

ヒヨウ「楽しみやなあ！」

クロヒヨウ「今度は負けへんで！」

アムールトラ「あつ…、あれは…。」

アムールトラは事情を説明したが、一旦火がついた彼女達の闘志を押さえる事はできなかった。

ゴリラ達に連れられて、キュルル達は広場へと向かった。

ゴリラ「ところで、ジャングルの中で何やってたの？」

キュルル「あつ、忘れてた！」

そう言うときュルルは、シオルダーバッグからオオミミギツネの招待状を取り出した。なんでもホテルの修理が終わったため、この前の戦いのお礼も込めて、パーク中のフレンズを集めてパーティをやるそうだ。

ゴリラ「わあ、ありがとう。ぜひ参加させてもらおうよ。アムールトラさんも行くよね？」

アムールトラ「え…、私、も？」

思いがけない言葉に、アムールトラはたじろいた。

カラカル「当然よ、アンタが一番活躍したんだから！いつそアンタのパーティにしちやつてもいいくらい！」

キュルル「そうだよね！ラッキー、オオミミギツネさんの近くにいるラッキービーストに伝えて。アムールトラも参加するって！」

腕ラッキー「マカセテ。」

なんだか話がどんどん進んでゆく。彼女は戸惑いの表情を浮かべながらも、内心は喜んでいた。

——これは君が守った世界なんだよ。

広場には、かばんさん、サーバル、助手、そしてアムールトラのぬいぐるみを抱っこした博士がいた。そしてアムールトラに気付いた博士は、大きく目を見開いて全身を震わせた後……

博士「アムールトラあああ〜！会いだがっただのでずうう〜!!？」

と叫んで、ぬいぐるみを取り落とし、大きな瞳に涙をいっぱい溜めながら物凄い勢いで飛びついてきた。不意を突かれた彼女は、どて〜ん！とその場に押し倒されてしまっ

た。

そして博士は、彼女の首にすがりついて大きな声で泣き始めた。

アムールトラ『博士さんも泣き出した…。どこか痛いのかな？』

アムールトラはどうしたら良いのか分からず、オロオロしながらされるがままになっていた。

するとそこへ、かばんさん達がやってきた。

サーバル「よかった、無事だったんだね！」

かばん「改めてお礼を言いたいんだけど…、博士さん、ちよつと落ち着いて…。」

助手「まったく、『ブタの目にも涙』とはよく言ったものなのです。」

それを聞いた博士は、顔を真っ赤にしながら立ち上がった。

博士「なんですかそれは！私をおちよくるのもいい加減にするのです！」

しかし助手は、しれつと言い放った。

助手『働かざる者悔いるべし』と言うのです。毎日毎日、口を開けばアムールトラのろけばかりで後は食っちゃ寝。これで優しくしろと言う方が無茶なのです、まったく。」

それからゴリラ達と別れたキュルル達は、修理が終わったジャパリバスに乗ってある

場所へと向かった。

アムールトラはかばんさんの後ろに立ち、博士はその隣にぴったりとくつついて幸せそうな顔をしている。時々助手に茶々を入れられていたが、気にならないようだった。

かばんさんはハンドルを握りながら、アムールトラに彼女の生い立ちを話して聞かせた。それからアムールトラは、ビヤッコと過ごした日々をかばんさん達にも話した。

アムールトラ「…と、これでおしまいです。思い返してみるとなんだか夢みたいで、自分でも信じられないんです。」

かばん「僕は信じるよ。それに、あやふやなままでもいいんだ。夢と現実、嘘と真、正義と悪…。一見はつきり分かれているように見えても、実は境界線が曖昧なものはおたくさんある。これに好みや情などの心が絡んでくるともつと難しく、なんとなくこつちかなくらいの気持ちで落ち着いている事も多いんだ。

それにもし全部夢だったとしても、アムールトラさんが無事に帰ってきてくれた…、それだけで十分だよ。」

助手「お前は目が覚めてから今まで、ずっと辛い思いをしてきたのです。これからは夢のような幸せな日々を送れば良いのです。」

博士「私は夢のように幸せなのです…♡ああ、夢なら覚めないでほしいのです…！」  
すると、アムールトラは博士の顔をじつと見つめた後、意を決してかばんさんに言っ

た。

アムールトラ「それとあの…、寄って欲しい所があるんですけど…。」

かばん「ん、どこ？…ああ、そこならちようど寄り道しようと思つてたんだ。アライさん達もいるはずだから。」

一方キュルルは、カラカルと一緒に後ろのトレーラーに乗つて、アライさんがどこから見つけてきたという新しいスケッチブックに何かを描いていた。

——美しい大地に、そこを流れる川のせせらぎや木々の木漏れ日、そして幸せに暮らすみんな…、全部君が守つたものなんだ！

イエイヌ「フフフ、フフーフフーン♪」

イエイヌは希望の歌の鼻歌を歌いながら、おうちの中でお茶の準備をしていた。ビーストに吹き飛ばされた屋根は、すっかり元通りになっている。その庭では、アライさん、フェネック、オオセンザンコウ、オオアルマジロが集まつて、見つけたお宝を見せ合つていた。

そしてアルマジロが汚れた紙風船を持つてきたので、それを洗つてきれいにしてあげようと、水を張つた桶に突つ込んだアライさんだったが…。

アライさん「ボロボロになってしまったのだから!?？」

フェネック「アライさん、またやってしまったねえ。」

センザンコウ「アルマーさん、泣かないでください。」

アルマジロ「ふええくん。センちゃん、よくわかんないけど、なんだかむしよーに悲しいんだよ。」

オロオロしているアライさん。するとそれを見たフェネックが石鹸を片手に、にんまりと笑った。

フェネック「困ったねえ、アライさんも洗っちゃおうか?毛皮を脱がせて、隅から隅までじいっくりと…。」

そしてアライさんを見つめる3人の目がキラーンと光り、ジリジリと迫ってきた。

アライさん「やめるのだ!ごめんなさいなのだから!」

そう叫びながら、アライさんは逃げ出した。

こうして4人が追いかけてくると、イエイヌがおうちのドアを開けてこう呼びかけた。

イエイヌ「みなさん、お茶の用意ができました…ってあれ?」

なぜかアライさんが叫びながら3人に追いかけている。それを見ると、なんだか体がムズムズしてきた。そしてイエイヌも、追いかけてくに加わった。



アライさん「ふえっ?なんでイエイヌまで追いかけてくるのだく!?」  
イエイヌ「よく分かりませんが、体が疼いて仕方がないんですく!!?」

アライさん「なんなのだくくく!」

そんなアライさん達がどったんばったん大騒ぎしているところへ、かばんさん達がやってきた。

かばん「やあ、賑やかだね。」

イエイヌ「あ、こんにちは皆さん…、あ、あなたは…!」

みんなの陰からアムールトラが現れた。そしておずおずとイエイヌの前に立つと、うつむきながらボソボソと話しました。

アムールトラ「あの…、おうちを壊しちゃったり、叩いちやったりしてごめんなさ…。」  
するとイエイヌが駆け寄ってきて、彼女の手をギュツと握った。

イエイヌ「戻ってきたんですね、よかった!ずっとお礼が言いたかったんです、ありがとう!」

アムールトラ「??」

怒られるとばかり思っていた相手に笑顔でお礼を言われ、アムールトラは面食らった。それからアライさん達もやってきて、彼女にお礼を言った。

——君は元気に帰ってきてくれた……。だから僕らはこの言葉を贈るよ！

イエイ又達にも招待状を渡した後、アライさんとフェネックも乗せたジャパリバスは、かつての海底火山にたどり着いた。そこでは一足先にパイレーツラッキーが待っていた。

かばん「お待ちませ、パイレーツさん。」

ラッキービースト「マツタタヨ、カバン、ミンナ。」

そしてかばんさんは背負っていた鞆の中から次々とものを取り出すと、オーブが安置されている石板の前に並べ始めた。

かばん「お酒、希望の歌のテープとラジカセ、水晶と鏡、せーばると書かれた日記帳、ジャパリまんにジャパリコイン……。」

カラカル「なんなの、これ？」

助手「お土産なのです。研究所から出てきたり、フレンズから分けてもらったり、アライグマが見つつけてきたりしたものです。四神とセーバルにとって必要なものなのかは分かりませんが、こちらの感謝の思いは伝わると思うのです。」

キュルル「それと、これも！」

そう言つて、キュルルはさつきできあがったばかりの絵を置いた。そこにはたくさん

のフレンズに囲まれて、アムールトラとビヤッコが並んで笑っている姿が描かれていた。

キュルル「アムールトラから聞いた話を元に、ビヤッコさんを描いてみたんだ。いつか四神とセーバルって子に会ってみたいな！」

カラカル「ビーストの次はそれ!? ほんつとアンタは、遠くの子ばかり追っかけるのね！」

かばん「これでよし：つと。ところで本で読んだんだけど、神様に挨拶する時は決まりがあるみたいなんだ。今やってみせるから、みんな僕の真似をして。」

そう言うとかばんさんは、2回お辞儀をした後2回パンパンツと手を叩くと、もう1回お辞儀をして締めくくった。しかし…、

パンパンパパンツ!

アライさん「まず手を叩くのだ!? 音が出るのたのしいのだ！」

フェネツク「アライさくん、お辞儀が先だよ。」

結局みんな、思い思いのやり方で挨拶をした。

こうして挨拶を済ませ、一行はジャパリバスへと歩き出した。そんな中、アライさんとフェネツクがとつとこ駆けてゆく。

アライさん「よしフェネットク、競争なのだ〜！」

フェネットク「待つてよく、アライさ〜ん。」

そして前を歩いていたかばんさんが振り向いた。

かばん「それじゃあみんなが研究所に帰ろうか。アムールトラさんも来るよね？」

するとアムールトラの右腕にすがりついている博士が、グツと手に力を込め、彼女の顔をじつと見つめた。その目が「嫌だなんて言ったら承知しないのです！」と言っている。

もちろん答えは決まってる。彼女は笑顔で「はい！」と答えた。

助手「『知者は流浪し留まらず』∴、力のあるものはふらつとどこかへ行つてしまいかねないので、多少嫌がられてもしつかり捕まえておかないといけません。ですよね、かばん？」

そう言うのと、助手はかばんさんをジロリと見た。

かばんさんは苦笑した。

かばん「はは∴、もうなんでも一人で背負い込もうとするのはやめるよ∴。」

するとサーバルが、かばんさんの背中に抱きついた。

サーバル「がおー、食べちゃうぞー！」

ラッキーさん「サーバル、タベチャダメだよ。」

サーバル「食べないよ♪ラツキーさんも含めて、私達はなんだってできる素敵なお嬢さんだよ！もう絶対離れない！」

かばん「サーバルちゃん…、ありがとう！僕も絶対、サーバルちゃんを離さないよ！」  
そう言つて、かばんさんはサーバルの右手に自分の右手を重ね、しっかりと握りしめた。帽子の赤と青の羽が揺れている。

ここでアムールトラの左隣を歩いてきたキュルルが、彼女の顔を見上げた。

キュルル「ねえ！今度は僕も、アムールトラの隣にいたいんだけど…。」  
するとカラカルが、キュルルを片腕でひよいと抱えた。

カラカル「アンタは後ろ！」

キュルル「そんなあ！」

そして凄みのある目で一瞬彼女を睨んだ後、ズンズンと歩いていった。

アムールトラはおののきながらこう呟いた。

アムールトラ「私、なにか悪い事したのかなあ…？」

それを見た博士がクスクスと笑っている。

博士「ふふつ、困ったやつなのです。ところで…どうなのです？今までずっと遠くから見ていたこの世界は楽しいですか？」

アムールトラ「いろんな事が起こりすぎて目が回りそうだよ。けど、ぜんぜん嫌じゃ

ない。うまく言えないけど、楽しくて、嬉しくて…、しようがないんだ！」

博士「良かったのです。これはお前が守ったもの…、そして、お前もこの世界のおかげがない一人なのですよ、アムールトラ！」

アムールトラ「え…？」

そう言われて、アムールトラはハツとした。

アムールトラ『そうだ…、これまで手の届かなかったものが、今目の前にある。楽しい会話、笑顔のみんな、笑い声…、私は力は強かったけど、それだけじゃ得られなかったものばかりだ。』

アムールトラ「うん、ありがとう！」

すると彼女の胸と鼻がじゅんと熱くなり、目から涙が溢れ出した。

アムールトラ「あれ、おかしいな。痛くも悲しくもないのに、なんで涙が出るんだろう？」

博士「それは嬉し涙なのです。涙は辛い時だけでなく、嬉しい時もあるのです。分からない事はなんでも聞くと良いのです。私は賢いのですよ！」

そう言って、博士はえっへん！と胸を張った。

その時、アムールトラの顔の横を爽やかな風が吹き抜けていった。彼女は思わず足を止めて振り返り、大きな山を見上げた。

博士「…? どうしたのです?」

アムールトラ「ううん、なんでもないよ。」

他の誰も気づかなかったが、アムールトラにはしつかりと聞こえていた。

アムールトラ『気のせいじゃない…、風の中に「元気でな!」ってビヤツコさんの声がした。』

思い返してみると、私は今まで過去に怯えながら、逃げるように今日を必死に駆けてきた。でもこれからは、可能性に満ちた明日を見ながら今日を歩んでゆこう。

先の事を考えると不安もある。けどそれは、きつと誰でも同じだ。それにもう、私は一人ぼっちじゃないんだ!』

心地よい風が背中を押している。アムールトラは心の中で『ありがとうございます!』と返事をする、博士と寄り添いながら再びバスに向かって歩き始めた。

——おかえりなさい、アムールトラ!